
王道で行こう!

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王道で行こう！

【Nコード】

N8036S

【作者名】

たまさ。

【あらすじ】

ルディの夢は父のような立派な騎士になること！ その為にルディに突きつけられた試練は騎士団で三ヶ月見習いとして過ごすこと。大好きな兄と大嫌いな王子様、口が悪いが世話焼きの副長とに囲まれた、そう、これは逆ハーな物語の——筈だったのです。王道を目指して突き進むつもりが何故か王道になれなかった、ある平和な国で健気にがんばる男装女子に振り回される周りの人達の日常物語。

*恋愛ジャンルにいましたが、あまりにも恋愛要素が薄い為コメディに移動しました。

プロローグ

ルディは不機嫌だった。

この不機嫌を何かで示せと言われれば、地団駄を踏んで、その表情で、全身を使って示したことだろう。とても、とてつもなく不機嫌だった。

八つ年の離れた兄が帰宅した。

それが原因では勿論無い。

むしろ兄が帰宅したのはとても喜ばしいことだ。

十四で全寮制の士官学校に入った兄ティナンは、季節ごとの長期休暇しか自宅に帰ることがない。

その待ちに待った休みで、ルディはティナンからはじめて貰った手紙を握り締めて心から兄の帰還を今か今かと願っていたのだ。

毎日毎日、侍女のマーティアに「今日は何にち?」「兄さまは、あといくつ寝れば帰ってくる?」とせがむように言って、最終的にマーティアに苦笑と共に「もう堪忍して下さいませ」とまで言われてしまった。

彼女には彼女の仕事があるのだが、それを邪魔する程の勢いだっただ。

それに呆れて、マーティアの弟であるセイムが手作りの「若様帰宅カレンダー」を作ってくれた。単純に木板に数字を書いてあり、数字がカウントダウンされているものだ。

それを毎日セイムと二人、ナイフで削る——削り取られたそれは、とうとうもう残りもなくなったのは昨日。

——そう、兄であるティナンは帰宅した。

彼の友人であり、そして主人を連れて。

「なんだ、このちび」

兄さま——つつつ、と元気に声をあげて玄関から飛び出したルディはびしつと固まった。兄一人が帰宅すると思っていたというのに、そこには馬車が二つ、馬に乗った騎兵が数名。明らかに兄の帰宅というには物々しい様相だ。そして馬車からおりた兄は馬車の中に話しかけていたのだが、その後に続いて降り立ったのは艶やかな金髪の青年だった。

「兄……さま？」

ルディは怖くなってたたらを踏んだ。

——母代わりである長兄が苦笑しながらルディを招こうとするが、それすらルディには見えない。

おりたった金髪の少年は尊大な様子で「なんだ、このちび」と言いながら口の端をあげた。

兄が苦笑する。

「ルディ、おいで」

「……兄さま」

「こちらの方は第三王子殿下、キリシュエータ様だよ」

きちんと挨拶して。とティナンは言うが、挨拶するより先に、その第三王子殿下はぐしりと手を伸ばし、ルディのお日様のような赤みの強い金髪の頭に手をおき、ぐしぐしとかき混ぜたあげく、
「にんじんみたいだな」

と言った。

兄達とは違う色が小さなルディにとって気になるその髪を。

けれど兄達が綺麗だと言ってくれる髪を。

よりもよって大嫌いなにんじん！？

ルディはその瞬間、力いっぱい王子殿下の綺麗なブーツの先を踏みつけた。

その1

わずかな気配にルディは瞳を開けた。

瞬時に手は胸元にある小さな隠しナイフを引き出し、身構える。

けれど部屋に入ってきたのが侍女のマーティアだと知ると、気づかれないようにもとの場所に戻した。

「セймかと思った。もつと足音をたてて入って来ないと危ないよ」

「まだおかしな賭け事の最中ですよ？」

マーティアは途端に顔をしかめた。

「当たり前。まだ勝負ついてないもの」

ルディは言いながら、マーティアの持ってきた菓子に手を伸ばした。

十六を半ばまで過ぎたルディは父親に無理を言って作ってもらった軍服姿だ。

父であるエリックは宮廷指南役であり、現在は騎士団顧問を任されている。ルディはその父に直に訓練を受けているのだが、いかにせんルディは士官学校の入学を認められていない。

士官学校に入れないのだから軍人になることもない。

それはとても理不尽なことだと思う。

軍服に対しての憧れを強めてせがむルディに、仕方ないと正規軍では存在しない薄緑の軍服をこしらえ、胸にはルディの好きな蜂と花を幾何学模様にした紋章までいれてある。

親莫迦だと笑われてもエリックとしては苦笑するしかない代物だ。

——いや、エリックならば「親馬鹿」といわれれば相好を崩してその「親馬鹿」つぷりを更に披露してくれることだろう。他人の迷惑など顧みずに。

剣の訓練は毎日のようにしているし、勉強だってしている。得意なのは算学だからあまり騎士というものに関係はないけれど、それでも一通りの勉強に励んでいる。

頭のいいすぐ上の兄であるルークも勉強を教えてくださいようとしてくれるのだが、生憎とルークの教え方はルディにはむいていない。ルークが親切心で教えてくれる勉学はひたすら逃げているので、ルークの得意分野である歴史学とか神学とかは散々だ。

マーティアにしてみれば「もっと違うことを習うべきなのに」と小言がきそうだが、ルディはまったく気にしない。

「勝負勝負と子供のように、いい加減になさいませ」

「そんなわけにはいかないよ。銅貨10枚賭けてるからね」

「またそんな下らないことを」

ふふんつと鼻を鳴らしていえば、マーティアがぼそりと言う。

下らない？

「まったく、莫迦なことをして怪我をしたらどうするのです」

「くだらなくないし、莫迦でもないよ。これだって訓練の一環だもの。何より実用的だし。セムつてば最近気配の消し方が巧いんだよ。うかうかしているとこっちが一本とられてしまう」

御互い牽制しあっているので、なかなかスキを伺えない。

「兄君さま方、というかティナン様が聞いたらきつと嘆かれることでしょうに」

「……ティナン兄さまなんて嫌いだし」

「あら、また拗ねてらっしゃる」

「拗ねてないよ！

だって酷いじゃないか。最近じゃちつとも帰ってらっしゃらない。いつも殿下殿下って、殿下がそんなに大事かね！」

あんなのトウモロコシの鬚じゃないか。

勢いに任せて言うと、マーティアは額に手を当てた。

「……ええ、わたくしは忘れておりません。

あの秋を——こともあろうに殿下の御御足をおみあしにおふみになったあなた様を！ おまえなんかトウモロコシの鬚のクセに！ と叫んだあなた様を」

生きた心地がしませんでした。

続けられる言葉に、ふんつとルディは鼻を鳴らした。

このまま小言へと発展するだろうとめぼしをつけて、体の向きを変えて口の中に焼き菓子を放り込む。

最近マーティアときたら小言が多い。何かにつけて文句を言うし「嘆かわしい」が口癖だ。そうなる又何を言っても聞き入れず、ただ延々と小言を言い続けるから、ルディは聞いているフリをして時々相槌を打つのだ。

と、視線をそらした窓の向こう——正面玄関に続く道を馬が駆けてくるのが見える。途端にぱつと顔が笑みに変わった。

「兄さまっ」

言うが早いのか、この部屋が二階にあるという現実を無視して窓辺に手をかけ、とんとと床を蹴っていた。

「ルディさま！」

悲鳴のようなマーティアの言葉を背に受けて、ルディは難なく地面へと着地する。

二階程度おりののに道具など必要は無い。さすがに三階からおりてみようとした時は、セームにまで止められたので、以来三階の窓から下りる時は鉤先のついたロープを使うようにしている。

——海賊が使うという接岸用のものを手本にしたのだが、勿論コレだって評判はあまり宜しくない。

「兄さまっ」

「おまえ……またそんなところから」

上から降ってきたルディに、馬を走らせていたティナンは慌てて

手綱を引き、二の足の内側に力を加えて速度を落とし、ゆっくりと近づくと苦笑する。

八つ違いの兄は、昔とちつとも変わらぬ苦笑で馬からおりると、しげしげとルディを眺めた。

「今日はどうしたの？ 連絡も無く来るなんて珍しい」

「近くまで視察で来たものだから、殿下にお許しを頂いてちょっとだけね」

殿下、という言葉にルディは顔をしかめた。

「トウモロコシの髭も近くにいろの？」

「そんな露骨に嫌うものじゃないよ」

それにトウモロコシの髭は止めなさい。

兄のやりわりとした口調につんと顎を剃らせる。

「だって嫌いなもの」

「いつまでも子供のようなことを」

クスリと微笑み、白手に包まれた手を伸ばしてルディの前髪をかきあげてくれる優しい手。

「まったくもう。」

10年間も嫌ってられるなんて結構スゴイね」

苦笑しながらもルディの額にそつと口付けた。

嬉しくてルディは兄の腰に手を回して抱きしめた。

ティナンほど優しくて素晴らしい人はいないとルディは常々思っているのだ。

ごろごろと兄になついていると、すぐにルディはその気配に気づいてしまった。

兄が通ってきた道を、数騎の騎馬が駆ける音がする。それはすなわち——トウモロコシの髭に相違ない。

「なんだ、にんじん。相変わらずおにーちゃん子だな」

ふんつと、騎馬の上から憎たらしい声がする。

兄の腰に張り付いたまま、ルディは何事か言ってやろうかと口を開

きかけたが、慌ててティナンがその口に自らの手でもって蓋をした。
「皆でお待ちの予定では？」

「気が変わった。殺風景な場所で休むより、おまえの家で休ませてくれ」

勝手な王子はそう言いながら馬からおりた。

相変わらず兄の手がルディの口をふさいでいる為、ルディの暴言はむーむーっとしか聞こえない。それを面白がり、随分と身長伸びた王子殿下は身を屈めるようにしてルディを覗き込み、ぐわしとその頭に手をおいた。

「なんだ、ちつとも背が伸びてないんじゃないか？ にんじん。

肥料が足りてないんじゃないか？」

「むむむっーっ」

「ふふん、何を言っているか判らないな」

「むむーっ」

聞こえていたら確実に不敬罪だ。

必死にルディを押さえ込み、ティナンは「殿下、あまりからかわないで下さい」と声をかけたが、すでに彼には面白い玩具とでも認定されたのか、口の端をあげて気にする様子もない。

「珍しい色の軍服だな。そういえばもう士官学校に入っているもおかしい年頃か」

「むっむむっーっ」

「ま、おまえのようなチビは弱そうだから士官学校にも入れないだろ」

「むむむむむうううっ」

「士官学校なんて無理ですよ」

ティナンは笑った。

「女の子には」

「――は？」

殿下は一瞬何を言われたかわからず沈黙し、眉を潜めた。

そのスキをつくように、ルディは力いっぱい王子殿下の足を踏みつけ、同時に慌てて手を離してしまったティナンから逃れ、

「この腐れ目玉！」

と叫んだ。

――足先の痛みに「ぐっ」とキリシユエータは身を折り、気色ばんだ騎士達が慌ててルディへと手を伸ばす、咄嗟にティナンがルディを庇おうとその腕に抱きこんだが、騎士達にしてみれば主への無礼が過ぎた。

剣呑な空気が流れたが、なんとか体勢を整えたキリシユエータは片手をあげて騎士達を下がらせ、

「おまえの足癖の悪さは忘れてない筈だったんだが……に、しても」大きく息をつき、ティナンの腕の中で未だに威嚇しているルディを眺め、苦笑した。

「女？　これが？」

これがとか言うな。

そもそもなんて失礼なんだ。立派に女の子だろう。女を捨てたことはただの一度もないぞ。

思い切り怒鳴ろうと口を開こうとすればまたティナンがその口を手で覆いつくす。

「殿下……」

「――謎の物体だ」

意味不明な呟きにカチンとくるが、そんなルディとキリシユエータの様子にティナンは嘆息し、そっとルディに囁いた。

「ルディ、おまえは殿下と相性が悪いのだから、下がっていなさい。これ以上無礼をするならばくが許さないからね」

やんわりとした口調だが、その言葉はルディにぐっさりと刺さっ

た。

優しい兄に言われた言葉とは信じがたく、ルディは唇をきゅっと引き結んだ。その頃に丁度玄関口から現れた家人達に命じて殿下の休憩を告げる。

それをどこか遠くで聞きながら、ルディはぎゅっと拳を握りこんだ。

——大っ嫌い！！

怒鳴ってやりたいが、それを必死に押さえ込む。ルディはキッとキリシユエータを睨みつけ、つんつと顔をそむけて駆け出した。

「……すみません、不調法で」

はあっと嘆息気味にティナンは呟く。

「というか」

キリシユエータは眉を潜め、

「もしかして私が悪いのか？」

一応の確認のように口にしたが、ティナンは口をつぐんだ。

どう言っているのか、ティナンにも判らない。だが、ふと気づいた様子でキリシユエータはティナンを見た。

「そもそも、おまえがアレを妹だと言っていれば」

「私は幾度も妹の話をしたと思いますが」

「——あれのほかに妹がいるのかと思っていたんだ。そもそもおまえのトコは兄弟が多すぎる」

ティナンは「ルディ」という呼称と「うちの妹」という言葉を確かに使っていた。それが同一のものだと思ったことが一度もない。

「まあ、あまりお気になさらず」

ティナンは柔らかな微笑みを浮かべ、主を屋敷へと招いた。

その2

「大っ嫌いだあああ」

きいっ。

兄さまも嫌いだし、トウモロコシの髭も大嫌いだ。

「八つ当たりはどうだろう」

文句を並び立てて細剣を操り打ちかかってくるルディの様子に、それを受け、流しながらセイムは嘆息した。

「私のどこが男だ！」

「えっと……まな板胸、とか」

思わず真剣に応えてしまうセイムだった。

「うるさいよ、セイムっ」

「いや、だって事実だし。そもそも、子供の時だって着ていたのは兄君さまのズボンだったでしょうに」

動きやすいので普段からそんな服装を好んでいるのだ。今ならともかく、六つの子供がズボンにシャツでは男の子だと思われるでむしる当然だろう。

「ってか、やめましょうよ、ルディ様」

「黙れってば」

「あのね、今のあなた、とても——俺に、勝てません、よ？」

言葉と同時に刃先を潰した剣先がひゅっとルディの脇を走る。ひやりと血の気が下がる感触に顔をしかめ、地面を蹴ってそれを避ける。

「銅貨10枚、捨てるつもりですかね」

「生意気！」

「じゃあ、もらっていいですか？」

言っや否やセイムが身を沈める。

とんつと床を蹴って一打・二打・三打——受け止めきれずに膝が落ちる。それまでの苛立ちを捨てて、ルディは慌てて体勢を整えた。咄嗟に頭の中で自分を叱責する。

セームだって子供の頃から共に学んでいるのだし、侮ることはできない。何より相手は男で自分は女だ。長期戦は体力的にフリだ。詰められた距離をとるために細剣の持ち方を逆手に変え、横に走る。距離をとりたいルディの思惑を承知しているのだろう。余裕があるのか、それとも挑発か、セームは口の端に笑みを浮かべてついでくる。

一方ルディときたら、先ほどの怒りの為にだいぶ体力は消耗している。そしてどうやらセームは本気らしい。

何か、何か、何か……

自らの劣勢に活路を見出すべく、ルディは瞬時に頭を働かせた。

「あ、ニーネ！」

声をあげた途端に、セームは慌てふためき、わたたとその体勢が崩れた。セームにまわりついている近所に暮らすニーネを探し、ハッとルディを睨んだ。

「つの、卑怯者！」

「莫迦めっ」

このスキを見逃したりしない。ルディはぐつと剣を握りなおした。

「そこまで！」

パンつと手が打たれて、ルディとセームは慌てて身を引き離れた。

「途中までは関心したもののけど、ルディ、酷すぎる」

屋敷の二階テラスで兄が嘆息気味に言う。

その隣に王子殿下を認め、ルディはむつと口をへの字に変えた。

「いい見世物だった」

褒めたつもりなのだろう。キリシエータが言う言葉に、更にルディはムツとする。口を開こうとすればティナンがそれを黙らせる

為にルディを軽く見た。

「褒美を取らせよう、来い」
更にムツとする。

何さまだ！ 偉そうにつ。

と怒鳴ってやりたいが、何様も偉そうにも、相手は王子様だ。
王位継承権第三位の御方に相違ない。

ルディは苦いものをかみ締めながら、それでも来いと言われれば
行かなければならないのだと自分を動かした。

——兄達も父も、王家に仕える身だ。

先ほどからティナンが必死にルディを留めているのは、相手の一
言で簡単に自分の首も飛ぶであろうし、また——父や兄達に、家人
に余波が無いとは言い切れない。

なんといつても相手は性根の腐った王族だ。

ルディはそれでも精一杯の矜持でもって「ただいま」と低く唸る
ように言くと、すたすたと中庭を歩みテラスの前に立ち、膝を折ろ
うとする。すると、キリシエータはむっとした様子で「上」と
告げた。びしりと自分の中でまた何かの音を聞き、ルディは腰の
後ろに手を回し、ぱちりと釦を外した。

皮ベルトに留められた鞭がパラリと落ちるのをそのまま受け止め、
ひゅんつと空を切る。

テラスの縁に打ちつけ、その勢いのままに地面を蹴る。一度壁を蹴
ってテラスに身を躍らせると、そのままスタンツと彼等の前に膝を
ついた。

「……猿か」

小さな呟きを聞き逃すと思うか、このド阿呆。

それでも必死に自分を押さえ込んだが、黒い感情はだらだらと漏

れ出でるのがティナンは心配そうに眉をひそめた。

「ルディっ、失礼なことをしないで」

「第三王子殿下様をお待たせするのが失礼かと思ひまして」

「なんだ、さっきの勢いがいいな」

挑発するような言葉に、ティナンは嘆息し、かつんと足を慣らしてルディの前に立った。

「殿下、この子をあまり挑発しないで下さい」

「騎士団の人間も今は下げている。別に多少の無礼はいいさ」

クツと喉許で笑う。相手の余裕に更にムツが増えていく。

嫌いな人間の言動というのはこれ程気に障るものなのか。

トウモロコシの髭の癖にトウモロコシの髭の癖にトウモロコシの髭の癖につつつ。

「それに、彼——失礼、彼女は私の部下でもない」

今、絶対に、彼って言った。というかわざと言い直した。

ルディは目顔で相手を睨みつけ、その様子にティナンが鎮痛な面持ちで額にそつと手を当てた。

「さて、先ほどの余興はとてもよかった。目にも楽しめた。褒美は何かいい？」

「褒美……」

「私にできることなら、何でも言えればいい。」

どうやら、あなたにとっても失礼を働いたようだから」

やけに丁寧な口調で言われた。

おそらく、女性という扱いのつもりなのだろう。ルディはその眼差しを一旦すがめ、

「何でも宜しいのですか？」

と、確認するように言葉にする。。

「ルディ」

兄がたしなめる言葉に、ルディは思い切って口を開いた。

「私は軍属を望みます」

「ルディ！」

ティナンが声をあげた。

騎士に女性仕官など居ない。救護班にだって存在しないのだ。

あっけにとられた様子のキリシュエータが一瞬瞳を大きく見張ったが、やがてその口の端に笑みを刻んだ。

「殿下、今のはお忘れ下さい。ルディっ、莫迦なことを」

「いや、いい。」

先ほどの動きをみれば、さほど夢物語という感じでもないしな。

何といってもおまえの妹姫で、そして宮廷指南役のエリックの娘だ」

「殿下……」

「ただし、三ヶ月は見習いだ。第一師団から第三師団までを三ヶ月で巡り、師団長の推薦をもって目出度く本決まりとしよう」

「はい！」

元気に応えたルディを他所に、ティナンは苦いものをかむように顔をしかめた。

「ティナン、いくらおまえでも目こぼしなどするなよ」

「——致しません」

「楽しい余興だった。ティナン、私はこのまま帰る。おまえはソレの荷物を纏め上げてから帰還すればいい」

「本日ですか？」

「今日中に来ないのであればこの話は無しだ」

ずっとキリシュエータは立ちあがり、ふと意地の悪い眼差しをルディに向ける。

「まあ、怖気づいたのであれば来なければ良いだけの話だ」

——誰が！

そのままテラスを出て行く主を見送り、ティナンは厳しい眼差しでルディを見下ろした。

「殿下のおっしゃったとおりだ」

「ん？」

「行くのは辞めておきなさい」

「どうして！」

「——ルデイ、君はとても大変なことをしでかしたんだよ？」

ふっと瞳を柔らかくし、ティナンはまだ跪いたままだったルデイの手を引いて立たせた。

「軍務についている人間はたいてい士官学校に入り、厳しい訓練を経てやっと軍属になるというのに、試験も何もかもをとっぱらって君は入るうとしているんだ」

そついわれると、確かにそうだ。

「けど、試用期間がある訳だし」

「あまりにも特別過ぎる処置だ。それは絶対に君の為にならない。行くのは辞めたほうがいい」

兄の視線は冷たい程だ。

「いやだ！」

必死に言う言葉に、けれどティナンは冷たい嘲笑さえ浮かべた。

「——なら、ぼくは君を絶対に軍人になんかしない」

「兄さまっ」

「ぼくが誰だか判っているよね？ 第三師団長なんだよ？ 殿下の補佐役なんだ」

その奇妙な笑みに、ルデイは唇を引き結んだ。

「殿下はおっしゃられた。三師団長の推薦が必要なんだ。ぼくは何があろうと絶対に推薦などしない」

「兄さまっ」

ティナンは自分に縋る妹をぱしりと払い、冷たく言った。

「それでも良ければおいで。」

「ぼくは絶対に——君に手を貸したりなんかしない」

その3

「ティナン様、行つてしまいましたよ」

マーティアが静かに言う。

ルディは一人寝台の上、身を丸めて唇をむつと引き締めて、泣きたい気持ちを堪えていた。

「だって、だって、仕方ないじゃないか！」

行つたつて、どうせ騎士にはなれない。拳句兄にも嫌われるのだ。そして大嫌いなあの莫迦王子、トウモロコシの髭は上官になる。いたいこの話しのどこに旨みなどあるうか？

ない。

行けば自分が不幸になるだけだ。

何より兄のことを思えば唇が戦慄き、歯がかちかち音をさせる。

あんなティナンを見たのははじめてだ。まるで憎まれているのでは無いかというくらい、怖かった。

「でも、ルディさま……騎士になるのはルディ様の夢だったではありませんか」

「そうだよ！ でも、でもっ」

くうっと自分の体を抱きしめる。

兄のように華々しい騎士になるのは夢だ。そのために父の訓練も受けたし、兵法だって学んできた。そのすべては兄達や父のように働く為だ。

——本気だった。ずっとずっと、女性には騎士になれないと知った時、悔しさに泣き叫びもした。

と、ぱしんつと頭を叩かれた。

慌てて顔をあげれば、セイムが静かな眼差しで見下ろしている。

マーティアと良く似た顔立ち、とび色の瞳を優しく細めて幼馴染の少年は愛情すら込めるように口にした。

「莫迦」

「……」

「いいじゃないか。三ヶ月、行ってくれば？」

傷つけられて、ぼろぼろになって、軍人に嫌気をさして帰ってくれば？」

「あぐく兄さまにも嫌われて？」

「それでも——やりたかったことだろ？」

セイムの言葉に、体を起こす。

「ルディ様らしくないですよ。やらずに後悔するより、やって後悔するのがルディ様じゃないですか」

マーティアが微笑む。

「三ヶ月して帰ってきたら、一杯愚痴を聞きますよ」

につこりと笑う姉弟に、ルディは両手を伸ばして二人同時に抱きしめた。

「ありがとう」

へへと笑うと、セイムも笑い、すつと手を出した。

「銅貨10枚、まいどあり」

「遅くなりました」

一礼したティナンを見て、キリシュエータは片眉を跳ね上げた。執務室で書類にサインをしていた為、眼鏡をかけた若き軍事將軍は羽ペンの先を揺らし口元に笑みを刻む。

「イヤ、思うより早い」

「さようですか」

「にんじんは？」

「ルディは来ません」

さらりとティナンは言い、苦笑した。

「判っていたでしょうに」

「なんだ存外骨の無い」

「あの子はただ世間を知らぬ子供です。あまり苛めて下さいますな」

「おまえが過保護過ぎるんじゃないか」

クッと喉を鳴らす主にティナンは笑う。

ルディも十六、この年の娘であればすでに婚姻し子供の一人いておかしくもない。ある意味、エリックもティナンも兄達も妹を甘やかしてきたのだ。やりたいということをやらせ、好きな格好を許し、箱庭の中でルディは自由だ。

だが、それは小さな小さな箱庭の中でのこと。

——その箱から、確かにそろそろ出してやらなければならないのかもしれない。それは少し寂しいことだけれど。

感傷にふと笑うティナンを遮るように、来客を告げる従卒の言葉。ティナンは笑みを凍りつかせた。

「ほら、意外に骨がある」

キリシュエータは羽ペンをペン立てに放り込み、執務用につけている眼鏡を外した。ちらりと自らの片腕である第三師団長を見ればその表情はこわばり、口の端を引きつらせている。

「良く来たな、にんじん」

「——参りました」

静かに頭を垂れるルディに、キリシュエータはつまらなそうに肩をすくめ、

「言い返さないのか？」

と揶揄したが、ルディは頭を垂れたまま「今日よりあなたが主なれば」と続ける。

「立派だ、と言いたところだが——おまえはまだ騎士では無いし、軍人でもない。ただの見習いだ。私に忠誠を誓わせた訳でもない。私はおまえを認めたわけではないのだから、主などという必要

「はないな」

「……はい」

「だから特別に、他の人間が居ない時ならばおまえの暴言くらい許してやるう」

それがどういう意味なのか判らない。

だが、キリシユエータは実に楽しそうに執務用の椅子にふんぞり返る。

「ではとりあえず、第三師団長——」

「はい」

「これはおまえに一月任せる。部屋と制服を用意してやれ。」

それと、何か言いたいことはあるか？」

ティナンは静かに身を震わせ、怒りを堪えているように見えたが、やがてゆつくりと唇の隙間から息をついた。

その視線が静かにルデイを見る。

そうして告げた。

「ルデイエーラ」

「はい」

「おまえは今日からその名前を捨てなさい。」

女であることも、父の娘であることも、ぼくの妹であることも」

静かな言葉にルデイの瞳が驚愕に震える。

「決してそのことを口にしてはならない。」

男として、騎士見習いとして、偽りの名をもって生きなさい」

「……はい」

声が震えた。

「兄妹の情になど頼ろうとするな」

「そんなつもりはっ」

「口答えするな、莫迦者！」

厳しい一喝に更に頭を下げる。ゆつくりとティナンは歩み、ルデイの後ろへと回り込むと、ルデイの一本の三つ編みに結わえられた髪を掴み、腰の剣を振るった。

その鋭い剣先が、一括りにされた赤みの強い髪を一気に解き放ち、肩口で切られた髪がゆれ、頬を撫でた。

「明日までに整えなさい」

「……はい」

驚愕に瞳を見開いたのはルディだけでは無い。正面からそれを見ていたクリシエエータも言葉を失った。

「外で待っていていなさい」

主の執務室から出るように促し、ティナンは自ら切り落としたルディの髪を手に主へと一礼した。

「……女であることを隠すつもりか？」

「無茶では無いでしょう。多少は華奢ですが、いない訳でない」

「別に女でも構わないだろうに」

「男しくないこんな場に？ さあ食い散らかせと狼どもに妹を引き渡せとでも？」

「怒っているな」

「怒っておりますとも！ お恨み申し上げます我が君」

ティナンは切なさうに妹の髪を見つめ吐息を落とした。

「一月で実家に帰してみせます」

——それがルディの為だ。

その4

首の下で、髪が揺れる。

切れ味のよい細剣でさくりと切られた髪はがたがたで長さも違う。整えろといわれたところで、ただ心がすでに折れそうな程空虚だ。泣きたい気持ちはあるのに、けれど涙は出で来なかった。

この髪が綺麗だと褒めてくれた兄。

優しく手櫛でかきあげてくれた兄。

額にキスをしてくれた兄。

その兄が、まるきりの他人のように冷たい眼差しを向け、ルディの髪を無残に切り落とした。

——嫌われるところでない。

もしかして憎まれているのかもしれない。

自分の仕出かしたことでそんなに兄に不快を与えるなどと思ってもみなかった。

ルディはゆっくりと喘ぐように浅い呼吸を繰り返し、自分を励ました。「立て——とりあえず今は」二本の足で立っている。

自分は騎士団顧問エリックの娘——いや、末の息子だ。

言われたように二枚扉の執務室の前の廊下で静かに兄を——騎士団第三隊隊長を持ち、彼がやっと出てくるとふかぶかと頭を下げる。その時無意識に見たティナンの手に、結び紐で結ばれた髪は無かった。

執務室のゴミ箱にでも捨てられたのかもしれないと思うと、喉の奥から何かがずぐずぐと競りあがるような気がして、慌てて唇を引き結んだ。

「ついて来なさい」

冷たい口調のまま言われ、ただ静かにつき従う。そうしなければ、口元は戦慄き熱い目頭から涙が零れ落ちそうだった。

兄さま……――

ごめんなさい。

心の中で謝ることしかできない。もう兄でも妹でもないと言われてしまった。

そうまでして騎士になりたかったのかと問われれば、ルディはもう応えることができない。

後悔なんてしないなんて……嘘だ。

「隊服は後で部屋に届けるようにしておきます。部屋は二人部屋――同室のベイゼル・エージは第三師団の副長を務めている男だ。あのことはその男に聞きなさい」

「はい」

かすれるような声でかろうじて応えることができた。

官舎から寄宿舎へと移動し、二階にある一室の扉を叩く。

中から出てきた男はティナンの姿を見て瞳を瞬いた。

ティナンよりも幾分身長の高い黒髪の青年は、濡れた髪をタオルでかきまわしながら片眉を跳ね上げる。

「なに？ 俺なんかへマでもしましたかね？」

「今日から一月、第三師団の見習いとして入りましたルディ・アイギルです」

アイギルは親類の叔母の姓。

その名を告げられ、ルディはぎゅっと拳を握んだ。

淡々としたティナンからの紹介に、ベイゼルの瞳がはじめてティナンの背後に立つ小柄なルディを認めた。

「この時期に？　なによ、その人事は」

「殿下の指示ですので甘受なさい」

その口調はどこまでも冷たく、この人事に不満があるのだと隱そうともしない。

「あなたの部屋は余裕があるでしょう。同室として面倒をみて下さい」

「って、えええつ、マジすか？　ってかなんで？」

新入りなんだから4人部屋とかに放り込んでよっ」

「おまえは二人部屋を一人で使っているのだから文句は言わないように」

アイギル、入りなさい。

片手で押し込むようにルディを放り込み、逆に副官の肩口を引き寄せて引っ張り出すと扉を閉ざした。

「なに、なんなのコレ」

不服そうに胡乱に見上げてくる副官に、ティナンは襟首あたりを引っつかみ廊下の隅へと連れていくと、今度は襟首を掴みあげた。

「ベイ、あの子のことは頼みましたよ！」

低く抑えた声は先ほどとはまた違う。

切羽詰るかのような上官の言葉に、ベイゼルは目を白黒させた。

「な、なによ？」

「手を出したら殺しますから」

「はあ？　いくら可愛くても俺そっちの趣味ないよ」

キモチ悪い。

あからさまに顔を顰めて見せる相手をぎりぎりと締め上げ、ティナンは真顔で言った。

「いいですか？　絶対に手を出さないで下さいよ。着替えを覗くのも駄目です。風呂場では見張りくらいやりなさい。他の男にべたべた触らせるな」

「……えつと……隊長の、恋人？」

まさかの隊長つてば、そっちの趣味？

目をむいて言う副官につこりと微笑みかけ、とりあえず殴った。中指の骨がしつかりと当たるように。

「うちの可愛い妹です！」

「はあ？」

「殿下の気まぐれで騎士団に入れましたけれど、男で通しますから。絶対に、絶対にヘタなマネしないで下さいよっ」

「隊長が面倒みればいいでしょうが！」

「ぼくとは一切かわりが無いということと通しますから。名前もかえているし」

「——なんか面倒くさいんだけど」

「あの子にも自分とはかわりなど一切無い、男で通せと言ってあります。あなたも女であることなど知らぬフリで相手をして下さい」

「……ほんと面倒臭いんだけど」

そもそも俺、女好きなんだけど。とぼそりという副官に、ティナンは笑いかけた。

「あなたのあれやこれやを大目にみてきたぼくを敵にまわすつもりは無いでしょう？」

「そりゃ、まあ……」

「ですよ。うちの可愛いルディに悪さなぞしようものなら、真面目に降格の拳句どつかの僻地に飛ばしますから。」

崖の警備に行かせてそのまま蹴落としますよ？ 南方砦の鐘楼から蹴倒しますよ！」

——すつげえめんどい。

バイゼルは心底からいやな気持ちになったが、ある程度自分の主張を告げると、彼の上官はやっと息をついた。

「他の人間にはらさないように！」

ばらすもナニも……頼むから面倒ごとに巻き込んでくれるなよ。

ベイゼルはやっと開放された首元をさすりながら薄暗い天井を見上げた。

めんどくせえ。

その5

今日から一月自分が生活することになるという部屋に一人残されたルディは、ほうつておくとしわりと眦に涙が浮かびそうになるのをぶるりと身を震わせて堪えた。

大好きな兄に嫌われたのは物凄く痛い。

部屋の中は微妙な匂いが充たしている。男臭さとアルコール臭さと、煙草臭さ。かび臭さ。

生臭いような気もするが、そもそも男所帯に暮らしているので我慢できない訳ではない。

乱雑に置かれた荷物は洗濯物も混ざってそうだし、確かに部屋の右と左に寝台があるのだが、そのどちらにも無造作に荷物が置かれている。比較的少ないのは右側で、おそらくこっちに副隊長は寝ているのだろう。

「……ここで、寝るのか」

それはげんなりとしてしまう現実だ。

自分の部屋の片付けも得意とは言えないが、この部屋の有様は酷すぎる。片付けてしまおうかと思ったが、副隊長は兄——ティナン隊長によって連れ出されてしまった為、勝手にはできない。

たとえどんな無頓着な人間といえど、自分の知らぬ間にモノを移動されることは歓迎しないだろう。

初日から嫌われる訳にはいかないし。

嘆息すれば、耳の下で髪が揺れた。

切られてしまった髪をそろりと撫でて、その先端の位置を確かめる。

部屋の中に鏡などというものはありそうに無い為、ルディは仕方なく窓ガラスの反射を利用して髪を切ろうと窓辺によると、胸元のナイフを取り出し、首筋の辺りにすっと運んだ。

「だーっ、何やってる！」

突然の声に、ルディは危うく首筋を切るところだった。

自分のことばかりに集中していた為に、丁度部屋の扉を開けられたことに気付かなかったようだ。

びつくりして振り返り、瞳を瞬いて同室になった副隊長を見上げる。

目つきの悪い副体長はどかどかと長靴ちょうかの音をさせてルディエラの前に立った。

「あの、髪を……切ろうと思って」

「かみ？ ああ、髪、髪ね。」

そういえば、なんだかざんばらだな。どうした？」

目つきの悪い瞳がいつそう悪く潜められる。

「——ちよつと長かったので、先ほど隊長殿に切られてしまいました」

その眼差しから逃れるように視線を落とし、ははっと言えば、ベイズルは口元を引きつかせた。

「整えようかと思って」

「あー……しゃあねえな、ちよつと貸せ。俺、そういうの得意だ。指先器用だから」

嘆息気味に言いベイズルは近づくと、ルディのナイフではなく自分のナイフを出してルディの背後に回った。

——コレを男と言い張るのは少し無理があるんじゃないのか？

艶やかな髪は手入れが行き届き、けれどざっくりと切られてどこ

かちぐはぐだ。無残に切られた襟首が白くて華奢で、片手だけで絞められそうだ。と思った途端、すつとルディが避けた。

「あ？」

「あ、すみません……なんか、殺気のような……あれ？」

感覚は鈍くないようだ。

苦笑し「切るぞ？」と声を掛けた。すきあげるようにナイフを上下に動かし丁寧に切る。一番短い位置にあわせて揃えていく。赤みの強い金髪を切りそろえながら、なんだかいたたまれない気持ちになっってしまった。

「に、しても珍しい人事だな」

当たり障りの無い言葉を選んだつもりだ。殿下の気まぐれなどいつものことだ、あまり気にすることじゃない。だが女の子を入隊させようなんてどういう酔狂だ。

「やっぱり、珍しいですか？」

心持ち構えるような口調。

怯えすら混じるそのように、ベイゼルは苦笑を隠す。

「ま、今は暇な時期だからな。目新しいことは歓迎だよ」

「――」

最後にさらりと髪を払い、切った毛を落とす。

ルディエラは不安そうな眼差しを心持あげ、「ありがとうございます」と頭を下げた。

「――」

「副長？」

――男で通すって、どんな冗談だ？

いやいや、可愛い男というならいい訳ではない。確か第二隊にも随分と華奢なのがいる。あれは見た目が子猫な癖に中身ときたら猛獣だ。大丈夫。これだって男で通る。いや、通さねばならぬ――
ってか、もうオレイヤナンデスガ。

「あの、ぼく、何か気にさわるような……」

「ってか、ぼくは辞める。なんだそれ、新手のイヤガラセなのか？」

一人称はワタシでお願いします。オレも却下」

一息に言い切り、ベイゼルは「うわああ」と叫び、自分の髪をぐしゃぐしゃと乱暴にかき混ぜた。

「ふ、副長？」

「寝台は左側！ 荷物はベッドの下！ 寝る時は中央のカーテンを忘れるな！ オレのほうに入ってきたらぶつ飛ばす！」

指を突きつけルディエラを部屋の左側の寝台に追いやると、ざつと音をさせてカーテンを引いた。

ルディエラは瞳を瞬いて閉ざされ、軽く揺れているカーテンを見ながら首をかしげた。

——もしかして嫌われた？

え、なんで？

不安と期待とがない交ぜになって翌朝——寝られないのではないかという思いとは裏腹に、ルディエラはすっかりと熟睡し、鬼の隊長によってたたき起こされた。

その鬼の隊長殿も、実際はすやすやと眠る妹を物凄く複雑な眼差しで眺め、幾度も幾度も溜息をついたのちに大きく息を吸い込み、

「起きんか、莫迦者！」

と、勇気をもって大音量でたたき起こしたのだ。

——今までそんな口調で妹を起こしたことなど無かったというのに。ティナンの心はきしきしと痛んだ。

「え、あ……にい」

突然枕を引き抜かれてごろりと転がったルディエラは、兄の言葉に「兄さま」と口にしてしまいそうになったのだが、それはティナンの手によってふさがれた。

——口を塞いだのでは無い。無遠慮に襟首を持ち上げたのだ。

「新兵なら新兵らしく誰より早く起きなさい！ 馬房の水汲み、訓練所の水拭き、やることは山とあるぞっ」

「え、ひゃあっ？」

「おかしな声を出すな。とつとと準備っ」

——見習い一日目。

こうしてルディエラの過酷な見習いの日々は幕を開けた。

その1

エリックは自分を信用している。

自分の勘を、視力を、本能を。その全てが告げている——殺せと。
「つつつ」

馬房の片隅、壁にボロ雑巾が引っかかっていた。

見習いを示す藍色の隊服は薄汚れ、赤みの強い金髪——というかむしろ赤オレンジのような目立つ髪は汚れがついてところどころが固まっている。それを眺めるようにして立つ男は手の中で乗馬用の鞭を弄び、呆れる様子で何か言っているのだが、そんなものはエリックには関係が無かった。

本能で体が動く。

あの体の曲線が、あの髪が、顔を見なくとも自らの宝だと告げている。

腰に下げた長剣を引き抜き、一気に間合いをつめて今にも壁に手を掛けてボロ雑巾と化して逃れようとしている娘に手をかけようとしている男を叩き切ろうと動いた。

「うわぁっ」

「貴様っ、そこに直れっ」

「って、なにをするんですっ」

一瞬にしてルディの存在を見破った父親は、瞬時に相手の首に切っ先を這わせて一気に切り離そうとしたが、その相手が自分の息子だと気付くのはあまりにも遅すぎた。

そう、娘はタダ一人の宝だが生憎と息子は一山幾らでナンボ状態の父だった。

「これはどうということだ。ティナン」

「報告が遅れましたが——それは顧問が巡視に出ていたからです」

第三騎士団隊長であるティナンは軽く切られてしまった首にハンカチを押し当てて冷たく父親を見つめた。

王宮指南役——現在は顧問として所属しているエリックは、ぎらぎらと戦闘意欲にあふれた眼差しで息子を睨み付けている。

「何故、ルディエラがここにいる？　ここは軍の馬房じゃないかつ、苛立つように言いながら、エリックは息子を睨みつけ、ついで壁によりかかって寝ている少女を哀れむように視線を向けた。

「この髪は何たることだ！　私のルディの美しい髪がっ、誰だこんなことをしたのはっ、殺してやる」

「……ばくです」

「死ね！」

「実の息子になんということを」

「私だからこんなものだが、おまえ他の三人に知れたら闇討ちだぞ。おちおち寝ていられると思うなよっ」

「……息子を脅すような真似やめてください」

それだけでなく、すくなくとも西砦に在勤中の兄を思うと恐ろしいというのに。

長男であればまさに人を雇って襲わせそうだが、次男ときたら当人が大剣を振りかざしてくるだろう。弟は——ナニかはしてくる気がするが、ナニをしてくるかは予想が付かない。

騒がしい父親の声に、ボロ雑巾と化した娘はずるずると身を沈め、床に腰を打ち付けてやっと顔をあげた。

「はれ……とーさま？」

「おおっ、父様だぞ。おまえのカッコイイ素敵な父様だぞ」

まるで幼子でも相手にするように身を沈め、視線を合わせてやりながら途端にエリックは相好を崩し、ついで痛ましいというように唇を戦慄かせた。

「かわいそうに、なんでこんなことに……誰が虐めたんだ？ 父様に教えてごらん。安心おし、おまえの髪を切ったティナンは角刈りにしてやるから。後頭部にバカついていれてやるうか？ おまえを虐めたやつは百倍にして仕返ししてやるぞ。足腰どころか両手足だつてしばらく使い物にならない糞虫を作つてやるぞ」

その言葉にティナンは思わずびくりと反応して一歩下がってしまった。

「顧問つ、余計な手出しはそこまでして下さい。アイギル、おまえはまだ仕事が残っている。さつさと起きて動けつ。夕飯を食いっぱぐれるぞつ」

ティナンは鬼隊長の言葉で命じつけ、びくんつと反応したルディエラはがばりと立ち上がり敬礼をするとぺこりと頭をさげた。

「隊長、すみませんでした」

寝入った覚えもあるし、何よりエリックのことを父様と呼んでしまった。咄嗟のこととは言え、兄とも父とも思うなといわれているのだ。失態だ。

顔を手の甲でぬぐうと、馬特有の獣臭と馬糞の香りが肺一杯に広がった。確か馬糞ポロの始末をつけて、馬達に新しい寝藁ホロをしいてやつて餌をやり終えた安堵感に壁によりかかってしまったのだ。

失態だ。安堵などしている場合ではない。

一気に意識を持っていかれてしまった。

ルディエラは普段から馬の世話はしていたが、それだとして自らの使う葦毛、シルフェーヌだけだ。他の馬は幼馴染であり、下男であり庭師であり——つまり何でもこなせる便利アイテム、セイムがやっている。

だがここでは基本の手入れは馬の持ち主である者が行うが、後始末の全ては新兵であるルディエラの仕事なのだと命じつけられた。

もう四日の間行っていることだが、総勢十七名の騎士の馬の相手

は並大抵では無い。

それでも隊長副隊長、および予備の為の馬の世話は他の馬房で専用の馬長が行っている。それでも、ルディエラが任されているのは、第三騎士団の馬だけなのだ。

よれよれと馬房を出て行く愛娘を見送り、それまでまるで好々爺の如く顔を緩めていたエリックはすくりと立ち上がり、がしりと息子の腕を逆手に掴みあげた。

「説明しろ」

「……文章で届けます」

「今、ここだ。腕をへし折るぞ」

ぎりぎりと腕を締め上げて冷ややかに口元を緩める父親に、ティナンは溜息を落とした。

「くっせーよ！」

夕食も終わろうかという頃合に、よれよれと食堂に入ってきたルディエラの姿を認め、副隊長であるベイゼルはつまみあげるようにしてその後ろ襟首を引っつかんだ。

「風呂入ってから来いっ」

他の人間の迷惑だ！

「でも副チヨー、食べないと食事がなくなりますー」

すでに二度の経験済みだ。

一日目はあまりにも疲れ果てて夕食など食べようという気にもなれず、汗とドロとボロにまみれたまま寝台に倒れこみ、一瞬後にはティナンにたたき起こされ、拳句朝だった。十分な睡眠をとった覚えなど無かったというのに、朝だった。

二日目はそれでもなんとか食堂に行くことができたのだが、すで

に食事は食べつくされた後でその日の夕食も抜きだった。

なんと軍の食事は朝と夜だけ。

昼に関しては食べたいものは自分で時間配分をみて勝手に食べるというのだ。

それでも必死になって昼にはビスケットなどを食べる。

もともと三食、更には三時におやつまで食べていたルディエラにとってこの食生活はまさに地獄だった。

「そんな悪臭漂わせた人間が食堂にいと迷惑なんだよっ」

ベイゼルは忌々しいとばかりに吐き捨て、ついで仕方ないと呟くと近くにいた従卒に命じた。

「夕食のプレートを二つ、オレの部屋に届けておいてくれ」

そう命じつけると、途端にルディエラは瞳を見開いて歓喜した。

これで今日は夕食が食べれる！ しかもきちんと風呂にも入れるのだ。

「副チヨー」

「あんだよ」

「いい人ですね！」

猫の子のようにほぼぶら下げた状態のルディエラが、きらきらとした瞳をしてぐると顔をめぐらせて言うや、ベイゼルは「うわああああ」と叫んだ。

「もうなんだか知らんが勘弁しろーっ」

…… やっぱり嫌われてるのかな。

でも副隊長はいい人だな。うん、いい人だ。

ルディエラは自分の心の日記に「副長に好かれるように努力しよう」と書き記した。

自分のその決意が「迷惑」であるなどと欠片も思わないルディエラだった。

その2

久しぶりに見た父はやはり素敵だった。

翌朝、馬の背をブタ毛のブラシで丁寧に撫でてやりながら、ルディエラは口元が緩むのを必死で押さえ込んでいた。

父親のエリックはまさに鍛え抜かれた筋肉美を誇る。

騎士ではなく、もともとは傭兵であったという父はがしりとした体躯に無駄のない筋肉をしつかりと備え、またその一見重そうな体を音もなくしなやかに動かして獲物を捕らえるのだ。

ティナンはその点華奢な体躯をしている。

騎士団の人間はおおむね均整の取れた体躯をもっているが、ティナンは華奢だ。

何より、王族警護という役職である三騎士団の人間は見目麗しいものと定められているのだろう。

ルディエラにしてみれば、外見の美醜などまったくもって意味は無いと思っているのだが。

そう、人間何より大事なものは顔の美醜などではない。人間にはもっと大事なものがある。

「何にやにやしてんだよ、喜色わりいな」

丁度朝の馬慣らしから戻った副隊長が眉宇をひそめて馬房の入り口に立った。

その手首には鞭が引つ掛けられ、胡散臭いものでもみるように馬房内をぐるりと見る。

「いやあ、昨日顧問に会ったんです」

「あ？ ああ、エリックの旦那ね。そういやあ、戻ったらいいな」
つて、顧問といえはおまえの親父だろう。という突っ込みをベイゼルは飲み込んだ。だが、その顧問の話題はルディエラにはツボなのか、ぺらぺらと口を開く。

「かつこいいですよーっ」

——おまえ、どんだけ親父好きだよ。

「あの筋肉。あの敏捷性。あー、ぼくもいつかあなりたい」

絶対にムリ。

うおお、すげーっ突っ込みてえ！

瞬時に頭の中で浮かぶ言葉に、ベイゼルは口元が痙攣するのを感じた。

「スゴいんですよ！ 顧問、胸がびくびく動くんですっ」

死ね！

ってかオレを笑い殺す気か、この糞餓鬼。

おかしなもん想像させんじゃねーっ。

「いいなあ、筋肉！」

うつとりと馬の筋肉を愛おしそうになでるしぐさに、ベイゼルは完全に引きつりつつ「おま、あんな筋肉たるまがいいのかよ」と、不用意な言葉を投げかけてしまった。

「失礼な！」

「失礼って」

「筋肉は正義ですよ！ あの筋肉をどれだけの訓練で維持しているのか。断然あこがれる。たるみなんてないんですよ。さわると力チカチですっ」

筋肉は正義……

そう、人間に大事なものは顔の美醜ではない。筋肉だ！

興が乗っている様子のルディエラは、おもむろに自らの上着の袖をまくりあげ、ぐっと力こぶを作って見せた。
得意げに。しかもかなり。

「ぼくだって結構すごいんですっ」

「ぼく言っな」

そして止める。その、さあ触ってみるという誘いは止める。ぷるぷると右手が勝手にその軽く盛り上がった二の腕に触れようと動くじゃねえか。

「結構固いけど、でも顧問には全然おいつかないです」

ぷるぷると筋肉が弛緩する。

ちくしょうっ。何の罠だこの野郎っ。触れといわれれば触りたい。ベイズルは生粋の女好きだった。

女という性別であればたとえまな板胸であろうとも。いや、駄目だ。オレの好みはボン・キュ・ボン。

こんな糞餓鬼を相手になどしたら、心の恋人、事務補佐官ナシユリ・ヘイワーズ中尉に申し訳がたたん。

あくまでも心の恋人だが。

「オレは女が大好きなんだーっ」

「ぼく男です」

死ね、オレっ。

くうっと思魔の誘いにがしりと二の腕を掴み、ベイズルは呻いた。

「うわ、固っ」

思ったより固い。

そして固いと言われたことに対してルディエラは嬉しそうに口元を緩めた。

「意外と鍛えてるんですよ」

「へえ。今までどんな訓練してきたんだ？」

本来であれば女性特有のふにやりとした柔らかさがある筈だというのに、いがいにしつかりと筋肉がついている。確かに男の筋肉に

は程遠いが、それでも脂肪ではなく筋肉だ。

ベイゼルは関心しながらふにふにとその筋肉をもみ、ついでゆつくりと手を移動して二の腕から下方へと手の平を握ってみる。

一般的にルディエラの年齢であれば女性特有のしなやかな指先であろくに、そこにあるのは多少固い指先と手のひら。

幾度も肉刺^{まめ}を作り、そしてまた潰して作られた意外にもしつかりとした手だ。

——貴族の令嬢とはまったく違う。勿論、娼館の女とは違う手触り。ふむ、などと呟き考え深くにぎにぎと握っていると、突然「うわーっ」と背後、馬房の入り口から声が上がった。

「副隊長が男に走ってる！」

「やべえっ、両刀使いだったか！」

「女好きはカモフラージュ？」

部下たちのふざけた物言いに、ベイゼルは脱力しつつも振り返って答えた。

「阿呆なこと言ってるねえで——」

「そうですね、阿呆なことを言っている場合ではありませんよ。訓練の時刻はとうに過ぎている」

ひんやりとその場の温度を確実に下げる平坦な物言いに、ベイゼルは思わず自分よりもずっと小さなルディエラの背中に隠れたくなかった。

半眼を伏せるようにして奇妙な笑いを口元に貼り付けた上官は、ベイゼルをひたりと見つめていた。感情の欠落したような顔で。

「ベイ、今日は天気が宜しい。中庭で稽古を付けてあげましょう」

「……うわー、楽しみだなあ」

——切り刻む。

確実に隊長の目がそう告げている。

「く、組み手にしてもらってイイスカね？」

剣よりは死への階段が長い気がする。

「ぼくはどちらでもかまいませんよ」

——打ちのめす。

冷やかに主張する眼差しの前では、天国の階段の長さなど、あまり大差はないかもしれない。

その3

——うらやましい。

ルディエラは軽くねたましい気持ちで兄と、そして副隊長とが対峙する様を見ていた。

第三師団の為の中庭——馬柵の横の運動場には、第三師団の隊員達が面白い見世物がはじまるとばかりに中央部を囲むように見物している。

ティナンは騎士団の仕事が忙しくちつともルディエラの訓練に付き合ってくれたことが無い。

時折自宅に戻っても、どんなにせがんでみせてもティナンは訓練に付き合ってはくれなかった。本気にとってくれなかったのかもしれない。

まるきり小さな子供を扱うように、頭を撫でて「怪我でもしたら大変だからね」と笑っていたものだ。

幸い年齢の近いセイムがいたから訓練相手に困ったことは無いが、それでもティナンに稽古をつけて欲しいと思ったのは一度や二度ではない。

中庭の中央に立つティナンとベイゼル。

組み手ということで剣も剣帯も、鎖帷子もはずされている。

冷やかな隊長は軽く手袋に包まれた指を握ったり開いたりを繰り返す、淡々とした口調で言った。

「どうした？ いつでもくるといい」

「いやいや、ここはやっぱり序列を大事にしてですねえ」

「年齢を敬ってやろう」

ふっと笑って見せるティナンに、ベイゼルはニヤリと口元をゆがめた。

「たかが数ヶ月でしょうに」

軽口のように言いながら、けれどはじめに動いたのはベイゼルだった。突然身を沈めたかと思うと左手を軸にして蹴りを入れるように下半身をぐるりと回してティナンの足を攻撃したが、ティナンは容易くよけるとそのままベイゼルに蹴りを繰り返した。

「組み手ではなかったかな？」

「いやあー、普通に組んだら負けるでしょう？」

「そうですか」

相手の蹴りをよけきれずに腹部に軽くダメージを受けたベイゼルは距離をとろうとするのだが、相手のほうが早い。

一旦身を引き、その弾みを利用して進む。近づいた途端に襟首を掴みあげて腹部に膝を叩き込み、それを押さえようとするベイゼルがそちらにばかり意識を持っていたことをいいことにぱつと掴んでいた襟首を離れた。

押さえを失ったからだだがバランスを崩したところを見逃さずに首の辺りに肘を叩き込んでいく。

その躊躇ない動きをわくわくと見ながら、ルディエラはぐつと拳を握り締めた。

兄様、スゴイ！

なんて綺麗なのだろうか。

さすが近衛騎士。動きが滑らかですばやい。ベイゼルもすんですんで相手の攻撃を抑えているが、反撃に出るまでに至らない。当初に食らった腹部が痛むのか、その腹部をかばうように動くのだが、ティナンはそこを的確になぶるように攻撃の手を緩めない。

行儀の良い筈の騎士団の人間が、やがてその試合に熱を持って声をあげはじめた。

「副隊長、やっちまえ！」

「ここでやらねば男が廃るっ」

「隊長っ、ボッコボコにしちゃって下さいっ」

ひやかすような野次を飛ばしているが、ルディエラは瞳をきらきらとさせて滅多に見れないティナンの姿を見つめた。

やがて重い、どつっ、という音をさせてベイゼルの体が地面に叩きつけられ、腹部に足をかけて片手を捻り、そしてもう片方の手でしっかりと首を掴んだティナンが冷たい口調で「終わりです」と告げた頃には、シンつとした静寂が辺りを満たした。

ルディエラの心臓が激しく高鳴る。

本来であれば見習いのルディエラはこの時刻は道場の掃除だが、そんなこともすっかり忘れて他の隊員のすみで拳を握りこんで兄を応援してしまった。

——兄様、強い。

華奢なティナンだが、いつさいの無駄を省くように動いた。

おそらく体力の消耗を抑え、なおかつ相手の体重や動きすら利用しているのだ。次兄の力任せの戦いとは違うのだ。

ベイゼルが腹部を押さえ込みへたり込めば、救護係が二人近づきベイゼルの体を引き上げた。

なんて羨ましい。

ぼこぼこにされているが、兄に稽古をつけてもらえるなんてなんて羨ましい！ ルディエラは心からベイゼルに嫉妬したが、その思いはすぐに消えた。

「見習い！ アイギルっ」

突然、兄の冷たい眼差しがルディエラを捕らえ、さらにきつい口調で言った。

「職務をさぼるとはいいい度胸ですね。
来なさい——稽古をつけよう」

それは天上の誘いだった。

すくなくともルディエラには。

だが、さすがに他の騎士達が戸惑うように声をあげたのだが、ティナンはそれを一瞥で黙らせ、顎でルディエラを呼んだ。

呼ばれたルディエラはまるでうさぎが跳ねるようにぱたぱたと兄の元へと駆け寄り、心底嬉しそうにぺこりと頭を下げた。

「お願いします！」

——身軽さには自信がある。

セймとの訓練で、女の体がどれだけ力が無いかは承知している。力のかわりに自分にあるのは軽さと敏捷性。それは最大の武器。

——だがルディエラはそんな容易いものではないのだと、すぐに知ることとなった。

自分はただ彼等の組みあう様を見ていただけ。一方、ティナンの体はすでに慣らしを終えて体も適度に温まっている。ベイゼルの時のように相手の意表をつくような動きは見せなかった。ただ率直にティナンの手が襟首に伸びる。

先ほどの様子を見ていたルディエラは、頭の中で兄の動きを軽く分析していた。一度目の動きは陽動。二手・三手先の布石。だが、ティナンはそんなことをしなかった。そうするまでもないと判断されたのだ。

侮られた。

カッと自分の熱があがる。

つかまれた襟首に怒りがわいて、ルディエラはそれを振りほどこうと身を沈めたが、その力は存外強い。それならと相手の下半身を狙

おうと切り替えた。

途端、ルディエラの体は容易く宙を舞い上がり、どすんと音をさせて地面に叩きつけられた。ついで腹に一撃、混乱する頭が全てを理解するより先、押さえ込まれ腕を逆手に捻り上げられ、ついでティナンの低い声があった。

「腕を一本、貰います」

その4

「腕を一本、貰います」

ぞくりとする宣言に捻られた左腕がぎしりと悲鳴をあげる。

——兄、兄さまっ。

歯をきつくかみ合わせてうめき声がもれそうなその時、

「そこまでっ！」

深く鋭い声がある場に響き渡り、声と同時にルディエラの上ののしかかっていたティナンの体が他の騎士達によって引き上げられた。ティナンが彼らしくなく舌打ちする音がルディエラの耳に容赦なく届いた。

息が上がって、身が震えていた。

頭の中がもわもわと気振り、耳鳴りが響く。

立ち上がらなければいけないというのに、体は言うことを利かない。左腕がしびれてやけに重く感じられたが——折られる音はしなかった。そう、折られてはいない。

折られたのは、心だ。

兄は本気で、腕を折ろうとしたのだ。

誰かの腕が自分の上半身を引き上げ、立たせようとする。

そこではじめてそれが騎士団の制服ではあるが、他の隊のものであると気付いた。

そして、先ほどティナンを止めたのが——彼等の主であることも。

どこか別次元のもののように視界に入り込む第三王子殿下は、厳

しい表情でティナンを見つめ「新兵虐めのような真似を許した覚えはないぞ」と低く告げている。

「ただの訓練の一環です」

言葉を向けられたティナンは無機質な言葉で返した。

吐息を落とすと、キリシユエータはルディエラを支えている騎士に「救護室へつれて行け」と命じた。

「殿下、これは我が隊のこと。余計な手出しは困ります」

「判っていないな、ティナン。確かにこれをおまえに預けたが、潰せと命じた訳ではない。一週間見ていればただの下働き扱い。おまえの率いるのは騎士であって従卒ではない。その拳句にこれだ。少しは頭を冷やせ」

「――」

「確かに特例だろう。突然の人事で不満を持つものもあるだろう。

だがその筆頭が隊長であるのはいただけない。おまえの不満で私刑まがいなことを許す程、私は愚かではないつもりだ」

とんとと、殿下の拳が扉を相手にするように気安い調子でティナンの胸を叩いた。

「今日はあれの訓練は終いだ。いいな」

「やられたか？」

救護室に引きずられるように連れていかれれば、そこには上半身に包帯を巻いたベイゼルが器用に自分の左手に包帯を巻きつけ、歯と指とをつかつて包帯の端をきゅつと結んでいた。

その姿を見た途端、ぐつと腹部に何かがこみ上げてきたが、ルディエラは必死で耐えた。

今も兄の冷たい声が耳の奥で響いていた。

——腕を一本、貰います。

そこまで、嫌われているとは思わなかった。

「ベイズル、彼のことを任せても？」

ルディエラを連れて来てくれた騎士が問いかければ、ベイズルが「へいへい」と軽く手を払う。

ルディエラはベイズルに椅子に座れと言われたまますわり——途端に、奥歯がぎしりと音をさせるほど歯を食いしばった。

そうしなければ無様にも泣いてしまいそうだった。

「どうしたよ？ 怪我してんのか？ ほら、見せてみるよ。言っとくけど、救護兵を期待すんなよ？ 騎士団の人間は皆その訓練だつて受けてるんだからよ。自分でやるんだ」

いや、この主はいるんだが——、どうせ薬草園とかにいつちまってるんだよ。

ぶつぶつといいながら、ぱつと見ただけで判る擦り傷の為の軟膏に手を伸ばすベイズルに、ルディエラは小さく身を震わせながら、小刻みに首を振った。

「まったく、泣きたいなら泣け、うぜー」。

痛いなら痛いって言え。他に誰もいねーよ。オレはおまえの副隊長で同室だからな。訓練の愚痴くらいは聞いてやる」

ぐいっと腕をつかまれ、痛みに悲鳴をあげた。

ベイズルが眉をひそめて袖のボタンを器用にはずして引き上げると、二の腕は赤くなっていた。腫れているまではいらないが、おそらく時間がたてば赤紫の痣になるだろう。

「あー、こりや痛いな。ははっ。見事」

言いながら軟膏をべしやりとその腕に落とした。

右手で手首を掴み、左手で軟膏を伸ばしていると、小刻みに震える

ルディエラの口から小さな嗚咽が漏れた。

うつむいたまま――

「痛い、です……とても、とても、痛い」

堪えきれなくなった涙が、ルディエラの汚れたズボンに滴り落ち、じわりと染み広がった。

体が痛いのではない。心が、痛い。

兄に完全に、嫌われている。妹の腕を折ろうとする程！

そんなに憎まれるなんて思ってもいなかった。

冷たい視線を向けられるなんて。

冷たい言葉を向けられるなんて。

ちつとも思ったことなど無かった。

「隊長容赦ねーからなあ。ま、明日になれば痛みも忘れる」

軟膏を塗ったあとに驚く程綺麗に包帯を巻きながら、鼻歌交じりに言うベイゼルに、ルディエラはうつむいたまま何度もうなずき、きつとムリだ。と思っていた。

――この痛みは、ずっと忘れられない。

忘れたくとも、忘れることなどできない。

その5

もう、駄目だ。

もう帰ろう。

ルディエラは寝台の上に両膝を抱えて座り、膝頭に強く額を押し当てながら自分の内面と戦っていた。

へこたれるな、負けるなという自分。大好きな相手に嫌われてまで無駄なことをする意味など無いと喚く自分。

——このまま軍にいたところで。決して軍属でい続けることはできない。

そんなことは理解している。けれど、それでもこの空気に触れていたいと望み、またその不毛さに叫びだしてしまいそうになる。

カーテンの向こうに副隊長はいない。

夕食を済ませた筈だが、戻って来る様子は無い。

だからそれをいいことにルディエラは一人で黙々と孤独と戦っていたのだが——やがてそれは一つの小さな音によって破られた。

こんつと、ためらいがちな音。

ついでこんこんつと続いて。そのまま扉が遠慮がちに開いた。

「いるのか？」

おずおずとした声は、あまり覚えが無い。

——正確に言えば、ルディエラは下働きばかりであるから騎士団の人間と親しく会話を交わしたことは無い。

きちんとした紹介も受けていないのだ。

ただ、見習いとして入った者がいるとだけしかティナンは言ってくれなかった。その為か騎士団の人間はベイズル意外よそよしくルディエラを避け、話しかけてもくれない有様だった。

「チビ」

だからおそらく名前も覚えられていない。

はじめは遠慮がちだった声が部屋へと入ってくる。

ずかずかと入ってきた足音は一人のものではなく、数名——三人だ。気配でそれをさぐりながら、わずかに湧き上がる恐怖にぶるりと身を震わせた。

ざっとカーテンが引かれると、ついでふわりと美味しそうな香りがルディエラの鼻腔をくすぐった。

視線をあげた先、まだ年若い騎士達が普段着姿でぎこちない笑みを浮かべ、そのうちの一人は食事用のプレートを手になく手をあげた。「メシ、食ってないだろ？」

「……あの、ぼくに？」

戸惑いながらプレートと相手の顔とを幾度も確認するように見れば、照れくさそうに笑った。

薄暗い部屋であまりわからないが、確かに第三隊の人間だ。

「ワリイな。オレ達おまえと話すな、近づくなって言われててさ」

「それに、おまえって特別待遇の縁故か何かなんだろ？」

「ま、気に入らないってのは確かにあるんだよ——でも、さすがにちよつと悪いと思ったから」

口々に言われて驚きながら、ルディエラは押し付けられたプレートで寝台の脇に置いた。

「あの、ぼくと喋っちゃ、駄目だったんですか？」

「——ま、ティナン隊長もちよつとどうかと思うけどさ。気持ちには判るからさ」

「でもおまえがんばってるよ。隊員の馬の世話も、掃除だって本来なら士官学校の連中の仕事なんだよ。しかも二人一組でやるんだ」

ああ、やっぱり。

はじめてまっとうに他の隊員と会話を交わしながら、ルディエラの心は喜びと悲しさに満たされた。

——無視するようにと命じつけまでしたのだ。

殿下は「いじめ」だと言った。「いじめ」の筆頭が兄であることは疑いようが無い。

「冷める前に食べよ」

うながされて、慌ててうなずきながらルディエラは泣き笑いの顔で礼を言った。

「ありがとうございます」

「お、おうっ」

ぺこりと頭をさげると、途端にぎこちなく返答が返り、ついでルディエラの頭にぼんつと手が乗った。

「殿下がとりなしてくれたから、明日からは下働きみたいな仕事じゃなくなるってよ」

「良かったね」

「おまえがんばってるよ。皆、ちゃんと判ってるからさ」

口々に言いながら、あわただしく出て行く彼等を見送りルディエラは必死に留めていた涙を数粒落とした。

——がんばろう。

もともと、判ってたことじゃないか。

うん。がんばろう！

——三ヶ月、ぼろぼろになって軍に嫌気をさして帰って来い。

セイムはそう言っていたじゃないか。

もっともつとほろぼろになって、もっとがんばろう！

「よしっ。食べよう！」

兄に嫌われてもいい。その分自分が兄を好きでいよう。

大丈夫——大丈夫だ。

根拠の無い大丈夫を呪文のように繰り返し、ルディエラは差し入れられた食事を余すことなく平らげようとした。

「……量、多すぎ」

おそらく好意であろう、普通盛りだとして青年男性の腹を満たすに十分なその食事が、山盛りだった。

「え、これっていじめじゃないよね？」

「……邪魔臭い」

ぼそりと落とされた言葉を無視して、ティナンは三つ編みにあまれたオレンジ色の髪を両手で握り締めて幾度目かの溜息を吐き出した。そう、それは遺髪を手にする遺族のように辛気臭いしぐさで。

「おにいちゃん、一刻も早くこんな場所から可愛い妹を引き離したいだけだというのにつ」

「うざい」

「嫌われたらどうしてくれますか。もう全部が全部殿下のせいです。殿下がおかしな気まぐれをおこすから。陛下同様禿げてしまわれればいい」

「人の悪口を当人の前で言うな。ついでに私は母親似だ。その台詞はうちの長兄に言え」

びしりとキシシュエータが言うと、執務室の応接ソファで自棄酒あなやけを飲んでいる彼の幼馴染は恨めしいという視線を向けた。

「居ないところで言ったら不敬罪になるから当人の前で言っているのです」

「……当人の前でも確実に不敬罪だろう」

そして陛下の悪口はどうなんだ。

「殿下は妹がいらないから妹の可愛さが判らないのですよ。羨ましいですか、ざまーみろですね」

「おまえ、飲みすぎだぞ」

——それに、妹ならいた筈だ。

産まれて数ヶ月足らずで死んでしまった妹。失われた四番目の子供。ただし産み落としたのは父の妾の一人で、女を産み落としたことに絶望し、自ら殺してしまった。

男であればどうだったというのだろう。

すでに上に三人もいるのだ。男を産み落としたところで何も変わらないというのに。

愛妾は王の子を殺した罪で投獄され、処断された。

一度も見たことすらない妹。共に暮らし、生きていれば何かかわっただろうか。

「うちの妹は可愛いんです」

「おまえを見ていると妹なんてものは持たないに限ると思うな」

「あげませんから」

「いらん」

キリシユエータはきっぱりと言い切り、もう仕事にならないと掛けていた眼鏡のフレームに手をかけてはずし、眉間の辺りを軽くもんだ。

「ルディエーラは誰にもあげません」

「迷惑な兄だなあ」

「ルディエーラに嫌われたら殿下のせいですからねー」

「……おまえ、明らかに自分のせいだろ」

その1

「馬は？」

手袋をはめながら言うベイズルの言葉に、ルディエラは間髪要れずに「好きです」と応え、軽く頭をはたかれた。

「阿呆。乗れるのかつて意味だろ」

「の、乗れます」

騎士を目指していたのだから、当然乗馬訓練だつて受けている。

ルディエラの自慢はたとえ女性用の横鞍であろうとも障害物を越えられることだが、一度長男にこっぴどく叱られたのでそのことは秘密だ。

「おう。んじゃ、訓練のはじめは馬だ」

副隊長が率いる七名に混じり、翌朝ルディエラがはじめてまっとうな訓練を許されたのは馬術訓練からだった。

「ちなみに遠駆け」

大雑把な副隊長は自分の指で「あっちからあっちまで」と、視界に入る山の中腹辺りを示し、「あのあたりにリンゴの木があるから、それを三つばかりもって速く戻る。昼の為の携帯食は不可。自分で狩れ。最後のヤツは今夜の酒、全額負担」はじめっぞーとおもむろに出た言葉に、ルディエラは慌てて馬房から引っ張ってきた馬の銜あぶみに足をかけた。

「チビ」

ふいに掛けられた言葉に、視線を向けると少し前で馬の首を撫でているがしりとした体躯の男がニヤリと口元を緩める。

「おまえ、慣れてないだろ。オレと行くか？」

昨日夕食を運んでくれた相手だ。

声を掛けてもらえた嬉しさでうなずこうとしたが、黒毛の馬の副隊

長が「アイギル、騙されるなよ！。そいつは最後の最後でおまえを
ビリにしたいあくどい商人魂を持っている」と茶化すように口の端
を持ち上げた。

途端に他の隊員達までもが口元をゆるめた。

「言っちゃ駄目でしょ」

「ま、この場にいる人間は全て同じ考えだ。甘えるな」

その言葉でルディエラがその場にいる馬上の騎士団員の顔を順番
に見ていけば、皆一様ににやにやと意味ありげにルディエラを見返
してきた。

——カモかつ。

ルディエラはむっとし、ついで自分が侮られていることに腹をた
てた。

確かに自分は小さいが、どうしてこう侮られなければならないのか。
ここは絶対に負けられない。

「んじゃ、出発。遅くとも夕飯前には戻れよ」

ベイゼルの言葉に誰よりも速く馬を走らせたのはルディエラだった。

「おまえ、馬鹿だろ？」

誰よりも速く出立したルディエラだが、誰より早くバテたのもル
ディエラだった。

「短気すぎだし。物事をよく考える？」

「……」

「見えてるからって、一日掛ける訓練だぞ？ 近いと思うなよ。馬
を潰す気じゃないだろうな？」

淡々と言われる言葉にルディエラは黙々と水を飲んだ。

はじめのうちに距離をとろうと、途中である川で水の補給を忘れたのだ。水分はないし、無理やり走らせた馬は不機嫌になるし、最終的に馬が完全にヘソを曲げ、ぐったりとしているところでベイゼルに頭をはたかれた。

「配分も考える訓練なんだよ」

「面目ありません」

水場を理解しているベイゼルに川に連れて来られ、ルディエラはふてくされるように直に川に口をつけるようにしてごくごく水を飲んでいたが、最終的に自ら頭を突っ込み、ベイゼルは「ぶふつ」と噴出した。

「まー、簡潔な頭の冷やし方」

犬のようにぶるぶると頭を振って水気を飛ばし、ばしりと頬を討つ。

「行きます!」

「まーて。まてこら」

くるりと身を翻そうとしたところで襟首を引っつかまれた。

ベイゼルはぐいっとルディエラに顔を近づけ、ニヤリと口角をもちあげるようにして笑った。

「金あるか?」

は?――

「金だよ、金」

「きよ、きょうかつつ?」

かつあげ?

目を見開いて言うと、更に頭をはたかれた。

「ちげーよ。おまえはこのまま行くと今日の酒代を全額負担だ。おまえも含めて総勢九名。一人あたり銅貨で二枚――そうだな。酒だけじゃねえな。つまみなんかもつけると、銀貨で二枚いつちまつかもな?」

その単純な計算にぞっとした。

「な、無いですよ！」

——無い訳ではないが。

それだけでなく銅貨で十枚、すでにセイムにもっていかれた後だ。
「そこでだ」

ふふふつとベイゼルは悪い笑みを浮かべてみせた。

「銀貨一枚出すなら、俺様が特別におまえを連れて行ってやろう。

俺はこの訓練のプロだ。昼寝していたってケツにはならねえ。悪い話じゃないだろ」

「恐喝とどこが違うんですか！」

ルディエラはギッとベイゼルを睨みつけた。

「ぼくはズルはイヤです！」

「チツ、いい話なのになー。おまえ、後悔するなよっ」

などと悪な台詞を吐き捨て、ベイゼルは高笑いしながら自らの馬の上に飛び乗り、

「迷子にはなるなよーっ」

「ちよっ、どっちに行けばいいかぐらいは教えていけーっ」

水場に行く為に道をそれているのだ。

ルディエラは地団駄を踏むようにして叫んだが、自分の声が木々の間をこだまするだけだった。
絶対に見返してやる。

ドチクショウっ！ 覚えてろっ。

ルディエラの決意は堅い。

その2

「ご馳走様です」

多重音声で聞こえる言葉に、ルディエラはちびちびと酒の入ったゴブレットを傾けながら、

「どういたしまして」

と、自分でもあやふやな言葉を吐いた。

どれほど相手を打ち負かしたいという野望に燃えていたとしても、現実というやつは厳しいものだった。

ゴール一步手前でうつすらとした笑顔でまっていたバイゼルの姿に「副長は本当は優しいんだ！」と一瞬感動すら覚えたが、実際はこれみよがしにぽんつと一步進み出て、にこやかに「今日の栄えあるケツ決定！」と他の連中ともども喝采をくれた。

この隊には鬼しかない。

「今日はアイギルの歓迎会だからな。遠慮せず飲め」
遠慮しろ。少しは遠慮しろっ！

ルディエラはゴブレットを持つ手をふるわせた。
自分の歓迎だといわれたところで自分が代金を持つことを知っている為に素直に喜べそうにない。

しかも人数が増えている。

——第三隊の人間全てがこの狭い店に揃っていた。
一通り自己紹介をすませはしたが、一気に詰め込まれた名前はあやふやだ。

ルディエラはその人数とまるで水のように消費されている酒に諦めの溜息を吐き出した。

銀貨？ 金貨だろ……コレ。

何かあつたらぬの為に、長靴すべうかの底にはそれぞれ金貨が一枚づつ隠されている。だがそれは物心ついた頃からの習慣で、父が仕込んでくれたものだ。何かなどあろうものではないと思つていた為に、本気でコレを使わなければならない日が来るとは思つていなかった。

……そしてその理由があまりにも阿呆過ぎる。

「戦士はいつでも何かの為にそなえるものだ」

と、父であるエリックはこの金貨を仕込みながら豪快に笑つていたが、確実に父の想定した何かはこんなことでは無かつた筈だ。

親不孝な娘でごめんなさい。

ルディエラは天空の父に詫びた——ばりばり生きているが。

騎士団はもつと高潔なものではないのか？

やることといえば騒いで賭け事で酒場で飲み会……

ふと、ルディエラは視線を感じてちらりと視線をあげた。

——兄さま。

狭い店内だが、近づくのもイヤだというように正反対の席に兄がいる。

ティナンは冷たい眼差しでルディエラを見ていた。

その視線が怖くて、痛くて、瞼が自然とまた下がる。ベイズルが軟膏を塗りながら「明日になれば痛みはひく」と言つていた腕が、また痛む気がした。

いたたまれなくて、ゴブレットの中身を一気に飲み干した。

カツと喉の奥が焼かれるような衝撃。ぶふりと咳き込むと、近くの男がゲラゲラ笑いながらルディエラのゴブレットに酒を足した。

「飲めっ！」

がしがしと頭をかきまぜられながら、遠い場所にいる兄の視線がいつそう冷たくなるのを感じて、ルディエラはやけっぱちで酒をもう一口飲んだ。

——嫌われても平気なんて、嘘だ。

自分が兄さまを大好きでいれば平気なんて、嘘だ。
何をしてもテイナンの視線がきつくなる気がして、このまま消えてしまいたくなる。

騒がしい店内だというのに、どんな場所にいねよりも孤独と惨めさがひしひしと自分の身を侵食していくのを感じていく。

ちびちびと酒を飲みながら涙を堪えれてると、ふいに髪を無遠慮にくしゃりと混ぜられた。

うつむいていた顔が瞬時にあがる。

「どうした、にんじん？」

ぶほと口に含んでいた酒が口から吐き出され、カ一杯自分をのぞきこんだ相手の顔にかかった。

咄嗟に「トウモロコシの髭っ」と叫んでしまい、慌てて口をふさいだが、面前の男の耳にはしっかりと届いてしまった。噴出した霧状の酒と共に。

面前にいるのは明らかにトウモロコシの髭——第三王子殿下キリシュエータだが、その衣装は一般騎士と同じもので完全に場になじんでいる。

変装のつもりか知らないが、眼鏡をかけていたのだが、ルディが吹き付けた酒をモ口にくらってしまい引きつった顔で眼鏡を外し、胸のハンカチでぬぐった。

「いい度胸だな」

「な、何してるんですかつ」

動揺して周りを見回すが、他の一般騎士達は自分達が飲むのが忙しい。

少しも気に掛けていないのは気付いていないのか——いや、これが良くあることだからだろう。

というかいいいのかソレで？

第三王子殿下キリシュエータはルディエラの隣にどさりとすわり、今となつては誰のグラスだか判らないグラスに自ら酒をつぎながら言った。

「タダ酒飲み」

楽しそうな相手と違い、ルディエラは自分の懐と、そして反対側から更に怒り波動を撒き散らしている兄ティナンが気がかりで覚悟を決めた。

潰れよう——お酒なんて好きじゃないけど。

潰れた後のことなど知ったことが！

その3

元騎士がやっている兵舎にほど近い場にある居酒屋——【アビオンの絶叫】は元騎士と諜報を生業としていた女達数名の居酒屋で毒味など一切気に掛けることなく楽しめる店の一つだ。

決して広くは無い店内だが、騎士達で今はひしめき下らない喧騒が満ちている。

そして、それは突然のことだった。

ちびちびと酒を飲んでいたルディエラだったが、ある時を境に——判りやすく言えば、隣にへたくそな変装をした王子殿下が座ったあたりから、自棄のように酒を飲み始め、ふとキリシュエータが眉間に皺を刻んだところでそれおこった。

「ぬげっ！」

ふふふふつと微笑を湛えたルディエラは、突如すくりと立ち上がると、少し離れた場所で陽気に酒を飲んでいた一番体躯のいい平騎士の裾をぐいと掴み、「脱げ」と言ったのだ。

一瞬場に静けさが舞い降りた。

キリシュエータはまったく意味がつかめず、眼鏡がずり落ちるのを感じた。

その時のルディエラの表情ときたら、嬉々として追いはぎよろしく相手から衣類を剥ぎ取るうとしている。

「ぬげ、ぬげっ、ケチケチするな！」

「うぎゃあっ」

助兵衛なおっさんのような台詞を吐き出し、新入りが目を据わらせて極上の微笑を湛えて脱がしにかかるという悪夢に、つかまったダレサンドロは悲鳴を上げた。

しかも他の人間は程よく酒が入っている為にゲラゲラ笑いながら「やっちまえーっ」「貞操の危機だ、にげるお」と無責任な野次を飛ばしている。

「な、なんだアレは」

呆然としたキシシュエータだが、このままではいけないだろうと席を立てルディエラの肩に手をかけたのだが、目のすわっている酔っ払いときたら王子殿下を睨みあげた。

「優男に用はない！」

「なっ、何をしているんだ、おまえは」

「いーですかー！ 世の中は筋肉です。筋肉でできているのでーす！ 筋肉が正義、筋肉が愛、筋肉が平和！」

筋肉を隠すなど言語道断！ 世界平和の為に筋肉は晒すべきである。超理論の展開に周りの人間は腹を抱えて笑っている。

「筋肉の無い者に人権など無い！」

「おまえ、自分を棚にあげてなんということを」

「なんだとおっ！ ボクは筋肉質ですよ、鳥肉だってゆで卵だって食べているですよ。人の努力を馬鹿にするなっ」

言っや、おもむろに脱ごうとするものだからキシシュエータはギョツとしてその手を引つつかんだ。

「やめろ、この酔っ払い」

「酔ってるわけないだろ！ こっちは冷静ですよ、ははは。ヘソで茶が沸くくらいレーサーだ」

「まったく意味が判らん！」

新入りと軍事將軍の掛け合いに周りの男達はのたうちまわる。

しかし、この中にあって一人、絶対零度の冷ややかさを持つティナンはゆっくりとその騒ぎに近づくと、厳しい眼差しでルディエラを睨みつけ、ついで手にしていた酒瓶の中身をどぼどぼとルディエ

ラの頭からぶちかけた。

「いい加減にしろ、この酔っ払い」

シンっと、それまで騒がしかった騎士達が息を飲み込む。

酒の場では無礼講。どんな騒ぎになったところでティナンが隊長風を吹かせて仲裁に入ることなどない。だが、そのティナンが騒ぎの元凶に怒鳴りつけ、あまつさえ頭から酒を掛けた。

——騎士達にしてみれば、二人の仲が悪いのは周知の事実だ。だが、この場で相手の行動を諫めに入るとは思ってもいなかった。

それまで他で馬鹿騒ぎに興じていたベイゼルまでもが嘆息し、ルディエラを回収しようと足を踏み出しかけたが、その場の空気をまったくかえる行動を——ルディエラはしかしたのだ。

「大っ嫌いいいいい！」

うわーんっと号泣した挙句に物凄い大音量で叫んだのだ。

ぶふっとどこかで誰かが噴出すのを皮切りに、皆必死で笑いを堪える。まるきり子供のように嫌いなどという台詞を吐いた当人はぐしと泣きながら、ティナンを睨みつけて「大嫌いつつ」を連発し、言葉を叩きつけられているティナンは顔面蒼白、茫然自失の様相で軽く手を持ち上げたまま立ち尽くしていた。

キリシユエータの視線が少しばかり同情を込めて幼馴染を見て、ついでこの酔っ払いを外に連れ出すべきだと判断して動こうとしたのだが、笑いを堪えられずにぶふぶふと奇妙な音をさせているベイゼルがそれより先に濡れ鼠の襟首を引っ張った。

「隊長、これはさっさと風呂に叩き込んで休ませますからー」

「……」

「んじゃ、後のことは頼みます」

「……」

ふえーんつと泣くルディエラを軽々と小脇に抱えるようにして出て行くバイゼルをティナンは見送ることもできなかった。

……大っ嫌い。

脳裏に鐘楼の鐘のように言葉が響き渡り、その瞳は完全に瞳孔が開いている。

キシシュエータは軽く嘆息しつつ、その顔の前で手を振ってみたが、幼馴染の反応は無かった。

その4

頭の中で「大嫌い」という言葉が幾度も幾度も木霊する。
くわんくわんつと果てしなく。

しかも泣きはらした真つ赤な瞳で自分を上目遣いでみあげてくるル
ディエラの顔。

呆然自失しているティナンの横、キリシュエータは行くあてを失
った手を幼馴染の肩にぽんつとおろした。

「なんだ、その、つまり。生きてるか？」

「……殿下の、殿下のせいです」

ゆっくりと視線を上げてうつむいた彼の副官は、まるで呪いの言
葉のように低く恐ろしい言葉を呟くと、ぎざぎざと酷くゆっくりと
した動きで自分の主を睨みつけた。

「殿下のせ・い・ですっ」

「だから、自分のせいだろうが」

そんな二人のぼそぼそとしたやりとりなど知らぬ他の騎士達とき
たら、相変わらず酒をすぎ放題に飲みながら騒いでいたが、深い溜
息と共にキリシュエータは気付いた。

「誰がここの代金もつんだ？」

頭から酒を掛けられたルディエラを第三騎士団の宿舎に連れ戻つ
たベイゼルは、まるでモノのようにどさりと浴場にルディエラを放
り込んだ。

「酒臭い！ きちんと洗い流せよ」

「ふぁーい……」

ルディエラは曖昧な返答を返し、酒で張り付いた自分の髪を引っ張った。

頭がくらくらとするのは酒が過ぎたのだろう。自分の行動もどこかあやふやだ。大泣きしてしまった為に目元もばりばりとする感じだし、どこかはれぼりたい。

隊服のまま浴室へと放り込まれた為、はめ込まれた石タイルの上でもそもそと衣類を剥ぎ取り、夕方以降であればいつでも入ることができるようになっている湯船の中に入り込んだ。

確かに「湯船に入る前に体を洗え！」といわれていたが、失念した為に酒まみれのまま入り込んでしまった為なのか、浴室全体がふわりと酒臭い。

ほわほわと漂う湯気と酒気。

縁の辺りに顎を乗せてぼんやりとしながらルディエラはまたしてもじんわりと毗があつくなるのを感じた。

「——にーさまー」

最近のティナンは怒ってばかりだ。

以前のように優しく頭を撫でてくれない。瞼にキスもしてくれない。抱きしめてくれない。

兄のことを考えるとせつなくて涙腺が緩んでしまいが、もともとこんなに泣き上戸な性質ではない。こんな自分は嫌いだ。

「嫌い……嫌いだ」

こんな自分大嫌いだ。

ほわんとした空気が、酒気が体にまとわりつく。くったりとしたままルディエラは瞼を閉じた。

自分はいったい何をしているのだろう。

兄さまはきつと今も怒っているに違いない。あの優しい兄さまをこんなに怒らせるなんて自分は凄く最低だ。

とりとめもない思考がぐちゃぐちゃと巡る中、ぐったりと湯船の淵に腕を預け、その上に顎を乗せてルディエラは思考を弱めていっ

た。

暖かくて、ほこほこして、とても……眠かった。

「アイギール、おいつ、どんだけ長風呂なんだよ」
ベイズルは困惑していた。

放置してやつても良かったが、結構な酒量を飲んでいたのを知っている為にうかつに放置できない。だからといって浴場を覗く訳にもいかず、どうにも困った現状だった。

——俺が好きなのはガキじゃなくて、出るとこは出て締まるとこは締まったイイオンナだ。

具体的に言えば心の恋人ナシユリー・ハイワーズ中尉のように、巨乳だ。

たとえ先日、酔いに任せてその中尉の胸をちよつとだけ、ほんのちよつとだけ親愛の情を込めて撫でた——驚づかみした——だけでそのまま情け容赦なくボコボコにされてしまったとしても、心の恋人の地位は微塵もゆるんではない。

オレは決して教育途上のガキなんぞに用はない。

三度程頭の中で唱え、よしと呟くと思いつて浴室の扉をひらいて怒鳴ってみたが返事が無い。

嫌な予感がして覚悟を決めると、はたしてそこで見たものといえは湯船の中で寝ているルディエラだった。

「ばーかーやーろおお」

湯船から伸びた両腕組むようにして、その上に顎を乗せてくーくーと寝ている。これを引き上げて着替えさせろって？

これは据え膳？

いやいや、これに手を出したらどんな恐ろしいことがあるか知れな

い。なんといつてもあのティナンの妹で、そしてエリックの愛娘なのだ。

「おまえは悪魔か！」

ののしりながら、それでも誰か呼ぶ訳にもいかないベイゼルは仕方なくルディエラを浴室から引き上げた。

白い肌が湯中りの為か、それとも酒の為にかほの赤く染まっている。見てはいけないと思いつつ、それでも「これくらいは役得がないと」などと抱き上げた少女の体をちらりと眺め、絶望に呻いた。

「…………おまえ、第二次成長くらいしとけよ」

立派なまな板だった。

体を鍛えた為だろう。胸というよりは胸筋きょうきんと湛えてやりたい。

もめば育つだろうか……

——うわ、なんだろ。泣きたい。

確かにこれでは女とばれないだろう。なんだかいたたまれない気持ちになって、片手で器用にその体にタオルを掛けてやった。

さて——着替え、着替えね……

「なんだろね、この楽しいようで楽しくないの」
何だか可笑しくて、ぶふりと噴出した。

おとーとがいたら、こんなかもしれない。

とりあえずコレを見て欲情するような事態にならなかったことにホツとした立派な成人男性ベイゼルだった。

「私はタダ酒を飲みに来ただけなのになー」

嘆息交じりに皮の財布からコインを出す軍事將軍に、しかし名高き【アビオンの絶叫】の主人ドラッケン・ファウブロはあっさりいった。

「足りやせん」

「……まける」

「まかりませんなあ！　　うちは安全安心、明朗会計。お上御用達ですぜ」

「私がお上だ」

第三王子殿下が口元を引きつらせても、ドラッケンはふふふんつと鼻を鳴らした。

「まかりませんなあ！」

ドラッケン・ファウブロは殿下といえども負けません！

その5

「おとーさま」

太陽の光にきらきらと輝くオレンジ色の髪。

小さな手で花を摘んで、ぱたぱたと駆け寄る愛らしい娘。「おとーさま。ルディは素敵な花嫁さまになるの。すっごい綺麗になっておとーさまと結婚するの」と、ルディエラが言っていたのは四つまでだった。

「おとーさまっ」

久しぶりに遠征から戻ったエリックの元に駆けてきた彼の小さな宝物は、その時すでに兄の着古したズボンにシャツ姿で、それでも瞳をきらきらさせて言った。

確か、もうまもなくで五つになるうかという頃合に。

「おとーさまっ、ルディは剣がほしーっ」

「そんな危ないものは駄目だ」

咄嗟に言ったが、途端にルディエラは瞳を潤ませて見上げてくる。「だつておとーさま。ルディはおとーさまみたいに強い剣士になりたいの。大好きなおとーさまみたいになりたいのっ」

——その時のエリックは鼻の下を無様にでろーんっと伸ばし、脳内では花が咲き誇っていたに違いなかった。

娘とは何故ここまで可愛いのか。

長男は怖いし、次男は自分に似すぎているし、三男は可愛くないし、四男はわけが判らないし……と、息子達が父の頭の中を覗いたら、結託して墓穴を掘り出しそうなことを父は考えていた。

「そうかー、おとーさまみたいになりたいのかー。おとーさまがそんなに好きかぁ」

「うん！ おとーさま大好きっ。おとーさまみたいにルディすっごく強くなるっ」

「うんうん、いいぞお。大好きなおとーさまみたいな強い騎士になるうなあ」

軽々と抱き上げてくれる優しい父。遅しい父。

「筋肉は正義——っ！」

自分の声ではちりと目を覚ましたルディエラは、そこが兵舎にある自室——正確に言えばベイゼルと共有する部屋の寝台だということに気付いた。

ばかりと目をあければ、薄暗い天井。窓を見ればカーテンの向こう側はほの明るく明け方であることが知れる。

そして、更にカーテンの向こうで「ううう、やめるおお」と何故か苦しそうな声が漏れ聞こえ、ルディエラはもぞもぞと体を起こしてカーテンを開き、反対側の寝台で呻いているベイゼルに顔をしかめた。

——悪夢でも見ているのかもしれない。

その点、ルディエラは良い夢を見た。夢の中で父に鍛えてもらっている夢だ。夢の中のルディエラの腕にも足にも理想的な筋肉がしっかりとついていて、それを思い返すとうっとりとしてしまう。だが現実を見れば、自分の腕はいまいち筋肉質ではない。やせっぱちの腕は無駄な贅肉がちよろつとついている。どうしてこの贅肉が落ちないのか不思議だ。固くてきわめて伸縮性の優れた筋肉をぜひともつきたい。深い溜息を吐き出し、今度は窓辺のカーテンを引いた。本日は天気がよさそうだ。

ほんの少し霧が出ているようだが、きつと晴れるに違いない。体調もすこぶるよさそうだし、気分もすっきりとしている。今日は絶好調だ。

「なんでおまえはケロっとしてんだよ！」

朝の身支度を終えて食堂に行くと、何故か色々な人間から声を掛けられた。

「え？」

「二日酔いとかないのか？」

「ああ、ぼくお酒強いんですよ」

ルディエラはさらりと流した。

好きではないが強いらしい——セイムが「おまえは飲むな。酒が無駄だから」と言っていた。確かに途中で記憶はふつとんでしまうが、そのかわりのように翌朝はやたらと爽やかだし体も軽い。

味は好きではないが、これから毎日飲むのもいいかもしれない。

「おまえみたいなのは酒が強いつて言うんじゃない！」

ベイゼルは顔色が悪かった。

あげくその顔面にはどこかでぶつけたような痣まであるのだ。

「喧嘩でもしたんですか？」

「……したくてした訳じゃねえよ。風呂場で隊長と鉢合わせした拳句、問答無用で殴られただけだ」

その言葉にルディエラは驚いた様子で瞳を幾度もまたたかせ、軽く首を振った。

「副長が何か悪さしたんでしょ。隊長が訓練意外でそんなことするなんて考え付かない。ちゃんと謝ったほうがいいですよ？」

「——おまえはほんつとうに可愛いヤツだな！」

ぐーすかと気持ちよく寝こけている馬鹿娘の着替えをさせていたところでティナンが風呂場を訪れ、問答無用で襟首を締め上げられた拳句に殴られたのと言ってやりたかったが、着替えさせたことすら忘れている様子の相手に何を言ったところで無駄だ。

何といつても、朝の挨拶で爽やかにルディエラは微笑んだ。

「おはよーございます。いい朝ですね！」

「……」

その笑顔を見ただけでベイゼルは悟ることができた。

——こいつ、なんつにも覚えてねえ！

隊員の一人にからだことも、キシシュエータにくってかかったことも、当然ティナン隊長に「大嫌い」とやらかしたことも！

ぐったりとしながら朝食のプレートを手に行くベイゼルの後をひよこひよこついて行くルディエラだったが、その間も他の騎士達が面白そうにこちらを見てくることに眉をひそめた。

「副長」

「あんだよ」

「昨日何かしたんですか？　なんだか皆にやにやと見てますよ？」

「おめーだよ！」

さすがにベイゼルはくるりと身を翻し、びしりと指を突き付けた。

「おまえが酒かつくらって隊員の一人を脱がそうとしたり、殿下を優男呼ばわりしたり、拳句の果てに隊長を大嫌いって言ったんだよ！」

その内容に、ルディエラはじつとベイゼルの瞳を見つめたが、やがて大きく息をついて首を振った。

「ぼくがそんなことするわけないですよ」

「——」

「それにぼくお酒飲んだらすぐに潰れちゃうんです。どうしてそんな意地悪言うんですか？」

そもそもぼくがどうして服を脱がそうなんて？　隊長を嫌い？　そ

んなことあるわけない」

どこまでも爽やかな笑顔で言われ、ベイゼルは脱力した。
駄目だ——こいつ本気で酒癖悪いことを理解していない。

しかし、ベイゼルが忌々しいとばかりに列挙した事柄が、どうやら事実であるらしいことをルディエラはすぐに思い知った。

「オレに近寄るな！」

隊内一ガタイのいい男、ルディエラに衣類を剥ぎ取られそうになったダレサンドロが、ルディエラが近づくと物凄い勢いで逃げるようになった為だ。

ルディ・アイギル——男好き説絶賛浮上中。

「あ、それよりも」

「あんだよ！」

「昨日の酒場の代金ってどうなったんです？」
朝起きたら自分のブーツの金貨は無事だった。そこだけが気がかりだった。潰れてしまうのは現実逃避だったが、逃避できない現実だつてある。

「さあな。どうせ殿下あたりが払つたろ」

ベイゼルは気にするなと軽く手を払った。

あの状態で——可愛い妹に「大嫌い」攻撃をくらってしまったティナンに他に余裕があるとも思われない。

タダ酒を飲みに来てすべての代金を支払わされたキリシュエータは容易く想像がついた。

相手は殿下であるし、気にするなと言われたことに気をよくして、

ルディエラはもうそのことは忘れることにした。
ほら、やっぱり潰れてしまつて良かった。

体調はいいし、代金は払わなくて良かったし！

——そう思つていられるのは自分に芳しくない噂があることを知る
三日間の間だけであつたが。

「おにーちやまつ」

ちつさな妹は舌足らずに両手を伸ばして抱っこをせがんだものだった。

たいていは長男が当然のように抱いて移動していたものだが、下におろされる短時間にはたばたとやってきてはティナンの足に張り付いた。

「にーさま。大好きっ」

あけすけな愛情表現で愛らしく言っていた妹。

「だいつ嫌いいいい」

この耳の奥でこだましているのはきつと幻聴。幻聴だ！

「食べちゃいたいくらい可愛い妹の口からそんな暴言がでる筈はない！　そうですよね、殿下！」

「私に聞くな、頼むから」

ティナンまだまだ廃人中。

その1

「う、馬屋番が懐かしい……」

ルディエラは心底疲れきった口調でぐったりと馬の背中にもたれかかった。馬特有の体臭とほかほかとした体温が実に心地よい。

馬屋番もきつかったが、体中が痣だらけになったり痛みに歯を食いしばるようなことは無かった。

今といえば、毎日の訓練についていくのに四苦八苦して喘ぐ毎日だし、どんな訓練も追加訓練を言い付かってしまう。夕食はなんとか誰かがとっておいてくれるのだが、それを食べるよりもむしろ眠りたいというくらい空腹だか何だか判らない現状が続く、四日目。

そう、まだ騎士団に入り込んで二週間も経過していないというのに自分の体ときたら笑う程ぼろだった。

——何より！

「おまえ、男好きだって公言しないほうがいいぞ？」

誰がそんなことを公言しているか！

まったく意味の判らない忠告に、頭の中がパンクしそうになったものだが、こんな誹謗中傷などに負けてなどいられない。

騎士団というのはもつと高潔なものではなかったのか？

男臭いし粗野だし！

いいことがあるとすれば、それは筋肉だ。さすがに皆鍛えているだけあってうらやましい程の筋肉をそなえている。ぜひとも腹の腹直筋が蟹の腹のように割れているのを見たいものだが、何故か男好きだと思われる為に、誰しもがルディエラに見られることを嫌がるのだ。

「あんだ？」

近くでがしがし馬の腹にブラシをかけていたベイゼルがルディエラの視線に冷たく返す。

「副長は見た感じ筋肉重視じゃないですよー」

「おまえその筋肉重視の視点はどこにかならねえのか？ 気持ち悪い。夢に見そうだ」

正確に言えば、ベイゼルはすでに悪夢に悩まされている。

「筋肉が正義ーっ」

という仮想敵一個師団が襲ってくるのだ。これが実戦だとしたら、ベイゼルは頭を地面にこすりつけて敗北を表現するだろう。筋肉教に勝てる気はしない。

「副長は筋肉のよさがわかってない」

「わかりたくねえよ」

何故誰も理解してくれないのだろうか。そもそもセイムだって筋肉の話は嫌がっていた。それはセイムがあまり筋肉質でないせいだと思っていたのだ。男ばかりの世界ではきつと皆筋肉の話に熱くなり、筋肉の話で盛り上がりたがると思うていたというのに、ここにきてはじめて筋肉は万国共通の素晴らしいものではないのか、と自分の信念が揺らぎ始めてしまった。

「騎士団に所属すれば、もっと筋肉天国だと思っていたばくの夢をいったいどうしてくれるんですか」

「おまつ、頭おかしいんじゃないのか？ いい加減に筋肉に固執するなっ」

「脈動する背筋、上腕二頭筋」

うつとりと夢見るように呟きながら、馬の筋肉を愛おしそうに撫

でるルディエラの姿はまさに——つやつぱくもオソロシイ。

「あああ、顧問の筋肉が懐かしい」

「おまえは筋肉だけで人間が見分けられそうだな」

「あ、それ面白そうですねー。騎士団の皆さんの顔はいまいち覚えてないですけど、体は覚えられるかも」

「その卑猥な感じの言い方やめろーっ」

ルディエラは楽しい会話を止めるような怒鳴り声に唇を尖らせた。

そしてふつと馬房の外を眺めたルディエラは、一瞬のうちに通り過ぎた素晴らしい大胸筋に「ぶふーっ」と口から奇妙な音を出しそうになってしまった。

慌てて馬の後ろ側に回り込み、だらだらと流れ出る汗をなんとかやり過ごす。

「何してんだよ？」

「スゴイです、ぼくつては本当に筋肉だけでヒトがわかる！」

「はあ？」

「……なんでもありません」

今の特徴的大胸筋。上腕二頭筋、上腕三頭筋、そして素晴らしい腹直筋！

あああ、服の上からでもなんて素敵なのバゼル兄さまっ。

ルディエラは必死に身を縮めてなんとか相手がそのまま姿を消すのをまつた。この姿をバゼルに見せる訳にはいかなかった。

切られてしまった短い髪。騎士団の見習いの隊服。

バゼルは兄弟の中で一番ルディエラにオンナラシサを求める兄だった。一番筋肉質で男らしい次兄だが、一番「愛らしい」ものを愛し

ているのだ。ルディエラが筋肉愛なら、バゼルは愛らしいもの愛！
そんなバゼルはルディエラが自分の前で少年っぽい格好をするの
すら嫌っていた。

西砦に在勤している為滅多に顔を出すことはないが、顔を出すときは決まって物凄い量の愛らしいドレスやら小物やらを携え、バゼルが家に滞在する間ときたら、ルディエラはいつさいの男臭さを手放さなければいけないのだ。

大好きだが、一番苦手な兄。

あの筋肉はとても素晴らしいのに、何故バゼル兄さまはあんなに残念なヒトなのだろう。などと一番残念な思考回路を持つ自分をすっかりと棚にあげている。

少なくとも、筋肉愛、筋肉正義のルディエラにだけは「残念なヒト」などといわれたくないだろう。

「せっかく可愛く産まれたんだから、おまえはレースにまみれて生きろ！」

と熱心に言うバゼル。

ルディエラの髪をまさに神業で編みこむのが上手なのもバゼルだった。あの無骨そうな指がどうしたらあんなにも美しい編みこみを作り出せるのかが謎だが。

「アイギル？」

「……よし、行った！」

どきどきしながら確認をとり、ルディエラは自分の平べったい胸をなでおろした。バゼルに発見されたらこの髪の言い訳だとかこの隊服のいいわけだとかでたいへんだ。

隊服をはぎとられたあげくひらっひらのドレスを着せられたらたまらない。そもそも、なんだって西砦の兄がこんな場にいるのだろう。――それは定期報告の為に顔を出しているのだが、そんな恐ろしい定期報告が週に一度存在することすら知らないルディエラだった。

絶対にバゼル兄さまと顔を合わせてはいけない。
ルディエラは心の中でしっかりと確認した。

「よう、ティナン」

自分よりも頭二つ分は高い位置からかけられた言葉に、ティナンは腹の底がひやりと冷めた。

「バゼル兄さん」

「家に寄ってから来たんだけどな」

バゼルはつんつんと跳ねる髪をわしゃわしゃとかき混ぜ、眉をひそめた。

「おまえ知ってたか？」

何を言われるのか覚悟しながら、ティナンは冷静さを装って兄を見た。

「何をですか？」

「ルディエラが旅行に出てるって？　せつかくあの子に土産を持ってきたのに、がっかりだ」

「り、旅行ですか？」

「ああ、セイムが言ってた。なんだ、おまえ知らなかったのか？」

――セイム！

思わずティナンは心の中で感謝の祈りを捧げてしまった。バゼルにはさすがに「騎士になる為に騎士団官舎にいます」と言えなかったのだろう。なんて世渡り上手。

「それにしても、旅行って——何故セイムを連れていけないんだ。世の中は危険だというのに。護衛を他に雇ったとか言っていたが……ルディエーラの警護はもととセイムだろうに。あの役立たず」

いやいや、十分役に立っている。

給料を減らすべきだというバゼルのぼやきに、ティナンは減らされた分は増やしてやろうと決めた。

「兄さん、こんなところで愚痴っていないで、早く仕事を終えないと」

「ああ、そうだった。そうだ、家に行ったらクインがいた」

さらりと言われたことに、ティナンは噴出した。

「なっ、兄さんが？」

長兄、クインザム——父親を含めて唯一所領と騎士ナイト以外の爵位を所有する兄は、いつも各所の領地を見回ったりしている為に不在がちだった。

「驚くことじゃないだろ？　なんだかおまえに話があるから家に来るようにつて頼まれた」

「……はあ」

「なんかやたらとにこやかだった。おまえ何かした？」

——身に覚えがありません。

「一緒に行きませんか？」

バゼルの前ではさすがにクインザムもルディエラの件を言及できまいと引きつり笑顔で提案したが、バゼルは「何したか知らないが、説教は受け流せ」とにやにやと笑い、ティナンの肩をばしばしと叩いた。

——受け流せるだろうか。
いろいろと不安だ。

その2

つうつと神経質そうな指先が机の上を走る。

埃などついてもない筈だというのに、指先を一度確認し、その視線をひたりと弟へと向け親指の腹でこすりあわせて微笑んでいる男は、ティナンと良く似た面差しをしているがその漂わせる雰囲気はまったく違う。

ただじつと見つめられていることが耐えられず、ティナンは喉の奥に溜まった唾液を無意識に飲み込んだ。

「三男坊、呼びつけてからしばらくたった気がするよ」

「ぼくも忙しいんです」

固くなる声で答えると、長兄クインザムは微笑を湛え、頬に掛かる髪をかきあげた。

クインザムはティナンにとって物心ついた頃からオトナだった。

この家族の全てを取り仕切る大人。

静謐な空気を持ち、切れ長の眼差しで淡々と事実を積み上げて「さあ言い訳してごらん」とうながす恐怖の大魔王だ。

本来の父親ですら萎縮させ、土下座させて「悪かった」と言わせる最強の長男、キング・オブ・家長である。

家長である父を完全無視して。

多少の憧れを込めて、実はティナンの髪型は兄に似せてある。

肩甲骨のあたりまで指二本分ばかりを伸ばし、組み紐で一本に結わえてあるのだ。

「一人で来たのかい？」

「……何も指示はありませんでした」

「そう？ 君には判断力がないのか。そこに気付かなかった私の落ち度だな——じゃあ、戻る時には是非とも土産をもっていっておく

れ。ルデイに」

指先で示された包みをちらりと見て、ティナンは内心でぶつぶつと呟いていた。

殺すなら殺せ。

こうじりじりと生殺しにするのは本当に勘弁して欲しい。

クインザムは穏やかともとれる微笑を湛えたまま、自分の弟を優しく——やさしく、見つめている。慈愛に満ちた微笑だ。

「私のナーナが作った肌着と室内靴だよ。きつとあの子も気に入るだろうから」

ナーナというのは、クインザムの妻だ。彼の領地に暮らしている為、父親の家であるこの邸宅には暮らしていない。

「ルデイは、元気にしているかい？」

「元気ですよ。かわらず」

「そう、ならいいんだ」

さらりと言われた言葉に、ティナンはほっと安堵の息をついた。

怒られるものと決めてかかっていたものだが、クインザムにはその気が——

「何かあったらたじやすまないよ」

一旦安堵したからだが、一気に緊張でぶわりと鳥肌をたてた。

「でも丁度いい。あの子もそろそろ年頃だ——男達を良く見て、目を養うのは悪いことではない」

「はい？」

「あの子ときたら何故か趣味が悪い。だがそろそろ嫁に行くことも考えなければ。」

嫁になど行かなくともいいが、おかしい男に引っかかるのも困る。いい相手を是非とも見つけてくれるといいのだけれど」

「って、兄さんっ？」

「なんだい？」

「——騎士団にすることを怒っているのではないんですか？」

自分から触れたくはなかったが、思わず口にしていた。

絶対に怒っていて、それを自分にぶつける為に呼び出したに違いないと思っていたが、兄の口から出た言葉はまったく違う。

「怒ってやいないよ。私はあの子が騎士団に入りたいというのは承知している。まさか本当に入り込むとは思ってはいなかったが、まあ、さすがあの子だ。何事もがんばって欲しいものだね」

さらりと言われた言葉に、今度こそ安堵した。

やんわりとティナンの口元に笑みが浮かんだところで、クインザムは口角を上げた。

「悪いのは馬鹿殿下とおまえだから。私はあの子に怒ったりしない」

怒ってるじゃないか……

「騎士団ならばあの子の目に適うものもあるだろう。まかりまちがっておかしい男に惚れたとしても、周りにいるのは身元のはっきりとした者達だ。消すなり飛ばすなり考えようはある」

さらりとまずそんなことを言っている気がするが、ティナンはソコは流した。

「ルディエーラはまだ十六ですよ。結婚なんて早い」

「私のナーナは十六で嫁いで来たよ。早いことはない。ルディもあの髪を結い上げて大人しくしていれば誰よりも愛らしい淑女になれる。欲しがるものは多いだろうね。良い相手が見つかるといいが」

あの髪を結い上げて……

その結い上げる髪は、おそらく三年は待たねば伸びません。

ティナンは口の端を引きつらせ、視線をつつとずらした。

兄にもルディエラの髪を分けてやろうと思っていたティナンだが、とりあえずしばらくは止めておこうと胸元を押さえた。

しかしいつまでも自分ひとりで持っていたら後々が恐ろしい。いや、だが……

「兄さんは、ルディエーラがあんな場において危険だと思わないんですか？」

ぼくは一刻も早くあの子が家に帰るほうがいいと思うのに」

「私はずっとあの子が努力していたことを知っているからね。やりたいと願うことであれば何でもさせてあげたいと思っているよ？ただし、それはあの子の何かを損なうことであってはいけない。できればセイムをつけたいところだけど」

損なう……

につこりと柔らか穏やかに積み上げられている台詞に、ティナンは兄が何を知っているのか気に掛かって仕方なかったが、表面上はそれをひたかくした。

「セイムを騎士団にいれようなんて、無茶です」

「判ってるよ。言ってみただけだから」

クインザムは微笑し、細めていた瞳を真摯に三男へと向けた。

「うちの次兄には言わないほうがいいだろうね。あの子ときたら直情的だから——もしルディが男ばかりの場所で暮らしているなんて知れたら、暴れそうだね。あの子はルディに夢を見すぎていて、かよい乙女だとも思っているから……もしルディに何かあったら相手をあの大剣で八つ裂きにしてしまいたいそうだね。まあちょっと楽しそうだけど」

「……」

「あの子ときたらうちに来てルディがいなくていうんでとても悲しんでいたよ。まったく面白い。まるきり繊細なお人形のように思

っているのかな。あの無骨な手でルディの髪を結び上げたくて仕方ないんだろう」

ティナンは降参した。

「――すみませんでした」

「何がだい？」

「……ルディエーラの髪を切ったこと、ご存知ですよね」

反省しているのですくずく生殺していたぶるのはもう止めて下さい。自己申告したティナンだったが、クインザムは微笑んだ。

「女の子の髪を、切ったんだ？」

へえ？ と続ける兄に、ティナンはさあっと血の気が下がるのを感じた。

完全な墓穴……いや、もう率先して自分で墓穴を掘るので、今すぐ入らせてください。

その3

「うわ、生ゴミ？」

馬房の裏手で壁にもたれてふくらはぎをもんでいたルディエラはその気配に気付いていた。

昼の休憩時間。

今までは休憩らしい休憩もとれずにいたが、少しづつ体が慣れてきているのだろう。いつもよりも多く昼食の為の果物も食べれたし、まだ余裕がある。

馴染み深い軽やかな足取りで顔を出した幼馴染。

「セйм。どうしたの？」

「姉さんから頼まれて、着替えと菓子を届けに」

そういいながら、セймは持ってきた包みから焼き菓子を取り出すとルディエラの口に放り込んだ。

「ルディ様ずいぶんとさっぱりしましたね」

とは髪のことだろう。

苦笑しながらうなずくと、セймは荷物を地面におろし、自分も身を沈めるとルディエラのブーツを紐といて慣れた様子でその靴を剥ぎ取った。

ルディエラは抵抗せずに相手のするに任せる。

靴も靴下も抜かれると、冷たい外気が足に触れた。

「……くさい」

「失礼なっ」

「ああ、もおっ。ミントの葉とかちゃんと使って下さいよ。」

そういう細かいトコ本当にやらないですねっ」

ぶつぶつと言うセймは、すっと立ち上がると荷物からタオルと彼自身が腰につるしているケースから薬草を取り出し、馬用の水にタオルを沈めて絞ると薬草をタオルにこすり付けて丁寧にルディエ

ラの足を清めた。

ひやりとした冷たさが足を刺激し、すーっと心地よく染み入ることにルディエラは口元を緩めた。

ついでセイムは女性の足とは思われない固い皮膚の足に、ポケットから取り出した軟膏を塗って丁寧に揉みほぐしていく。

ルディエラは慣れたマッサージの気持ちよさに目を閉じて全体重を壁に預けた。

「二週間目だけど、もう随分とずたぼろですね。楽しいですか？」

「うん……まだまわりまで目が、いけないけど……楽しい」

日々精一杯乗り切っているだけだ。

最近では騎士団の面々と会話も成立してきた。ただ意地悪な人間も確かにいたりして、いやみも耳に入るようになったのが少し残念だけれど。

——さすが縁故だよな。それともお偉いさんの足でも舐めて入れてもらった口なんじゃねえの？

——舐めたのは足じゃなかったりして。

げらげらと吐き出された言葉には悪意のトゲで満ちていた。

最近やつとまわりまで目が向いてきたから気付いただけで、もとからもつと酷いことは言われていたのかもしれない。そう思うとやたらと切ない。

セイムの手でもみほぐされていく足が血のめぐりを良くしてほかほかと暖かい。休み時間はそれほど多くないから眠っては駄目だと思うのに、あふりと欠伸が漏れた。

「セイム……」

「なんですか」

「——しよっか」

「やですよこんなところで」

あつさりと拒絶され、ルディエラはもう一つ欠伸をかみ殺した。

「でも眠いんだ。体を、動かさないと」

「こんなにぼろぼろなのに」

「目え覚めるでしょ」

目元をぐしぐしとぬぐうと、セイムは身を起こしてニヤリと口元に笑みを刻んだ。

「前回と同じで？」

「やだ、二十」

「まだ根に持ってるし」

「とーぜ」

ん——と続けようとした言葉が、ガンッと乱暴に壁を蹴られた振動でたちぎえた。

馬房の壁、その向こう——

「おまえら何の話してんだつつ。って、アイギルっ、そいつは誰だっ」

突然ふってきた言葉に、ルディエラとセイムは視線を向け、不思議そうに瞳をまたたいた。

馬房の窓から顔を出したバイゼル副長は顔を真っ赤にしている。

「賭け試合」

「うちの家人です。あの、何かおかしいこと言いました？　っああ！　賭けとかって駄目ですか？」

でも飲み会のときに賭けポーカーをしていた人間もいたのに。

ルディエラの不思議そうな眼差しに、バイゼルは頭を抱えた。

「おまえなんか嫌いだーっ」

……なんで嫌われてるんだろう？

副長に好かれようと努力しているのに、なかなかルディエラの思うようにいかない。

叫び声をあげてそのまま走っていつてしまった副長を見送り、ルディエラは蹴られた反動で軽く痛む背中をさすった。

「かわった人ですね」

「いい人だけどね……ちょっと怒りっぱいんだ。ぼくがすることなすことすぐに怒る」

首をかしているルディエラをしげしげと見つめ、セイムはやがてしみじみと言った。

「ま、気持ちは良く判ります」

「——どういう意味さ？」

「ルディ様の相手はホント疲れるんですよ」

笑をこらえるように喉を鳴らし、揉み解していた足をぺしんと最後に叩いた。

「目は覚めたようですね。訓練、がんばって」

言いながらセイムは軟膏でべたつく手をタオルで拭い、ルディエラの軽く異臭騒ぎの長靴ちやうかの中にミントの葉をもんで放り込んだ。

男のなかにあって女らしさは更に退化したらしい。

——セイムはこっそりと溜息を吐き出した。

その3（後書き）

【詰め合わせギフトパック】にクイン兄ちゃんと嫁のお話をUPしました。

タイトルは「にーちゃんと嫁」現在2話まで。

その1

じりじりとした緊迫感とその場の空気をつめたいものへと浸っていく。

こくりと動かす喉の音すら、拾い落とすことのない緊張。ぴくりと指先がためらいがちに動き、息を飲んだ痛みが……――

「うぜえ！ おまえすげえうぜえっ」

げしりと無遠慮に長靴がルディエラの足を横から蹴り、

「おまえ絶対にスリーカード以上、俺はおりるっ」

ベイゼルはばさりと持っていたカードを石畳の上に放り出した。寒風吹きすさび、松明の炎が赤々と辺りを照らし出す宵闇。砦の外を巡る森からは時折フクロウの声が不気味に響いていた。

「えええっ、ずるいですよっ」

ベイゼルはルディエラの手札を高くかつたようだが、だがしかし実際はツーペア。Aのツーペアの為に交換で良いカードを引くことができれば確かに勝てるかもしれないと思ったが、それ程顔に出していたらどうか。

ルディエラはツーペア如きで死ぬほどの緊迫した空気をもし出していた訳だ。

「おまえはポーカーの何たるかを勉強しなおして来い、馬鹿がつ」
鼻息あらいんだよ！

「初心者には優しくしましょうよ」
ベイゼルは乱暴にルディエラの頭をはたき、無駄に緊張したからだをほぐすように腕を回し、ついで首筋をもんだ。

「あー、さみいつ。酒のみてえ」

彼等が居るのは南方砦、外部訓練の一環で訪れた先の鐘楼を有する物見台の上――ベイゼルがポーカーで負けた為に彼の下についている総勢七名が本日の見回りに借り出される羽目に陥っていた。

キリシュエータ、ティナン以下残り十名は歓迎という名の宴会まっただ中だ。

そもそも騎士団とはもつと高潔なもので、黙々と訓練に明け暮れるものではないのだろうか。ルディエラは自らの想像とまったく違う現実に溜息しか出ない。

「飲んでばかりじゃないですか」

「それ以外に何しろって？」

「……酷すぎる」

確かに日々の訓練は厳しいものだ。

ルディエラは必死についていこうと躍起になっているが、基本体力の違いをひしひしと感じている。重い荷物に鎖帷子をつけ、鎧を着込めばまっすぐに立つだけで苦痛を覚える。箆手などの重装備をまとって走る訓練などした日には、空腹なのか吐き気なのか理解できない段階にまでもっていかれてしまう。それでも、日々の訓練は騎士団にいるのだとひしひしと感ずることができて、喜ばしいことだった。

筋肉もつくし。

だが、どうも思っていた程真面目な場ではない。

筋肉の話題を出すと怒るし。

「アイギル、酒貰って来い。酒」

「ぼく達は仕事です」

「おまえなあ、こんな僻地で見巡りしたってだーれもこねえよ！裏手の山の向こうは切り立った崖だし、しかも一番近い他国つつたらイリーシェス妃殿下の母国じゃねえか。襲撃とか無い無い」

ひらひらと手を振るが、実際彼等の国が他国と領土を争ったのは、すでに十年近く前の話だ。今は表面上協定が結ばれ、商人の行き来もある平和な時代だ。騎士団の存在意義はもっぱら王宮警備であり、今回のように四方砦におもむくのはただの視察だといわれている。

「酒！」

がうつと噛み付くように言われ、ルディエラは嘆息して立ち上がろうとしたが、それを押し留めたのは一緒にカード遊びに興じていたユージンだった。

「俺行きますよ」

穏やかな先輩の言葉に、ルディエラは慌てた。

「ぼく行きますからっ」

物静かなユージンに行かせる為にぐずった訳ではない。ただ、見まわりをしていると言うのに酒など飲みたいと騒ぐバイゼルを非難していただけた——見まわり中に自分も含めてポーカーをしていたのはとりあえず棚にあげる。

にやにやとしたバイゼルが更に笑みを深めた。

「鐘楼の幽霊には気をつけろよな」

「幽霊なんていませんよ、馬鹿らしい」

「いるって。ここには昔っからいるんだよ」

「ハイハイ。幽霊を見つけたらとっ捕まえて見世物小屋に売り渡してやりますよ」

ふんつとルディエラは顔をそむけたが、その話はこの砦に来る前から何度も他の隊員から聞かされた。

物見台の警備中に同僚に言い寄られた拳句階段で転がり落ちて首を折って死んだ無念の霊が寂しさに仲間を呼ぶのだと……

まったく馬鹿らしいが、口々に耳にいれられた為にほんの少しだけ「本当かも」という思いがよぎる。

もし幽霊など出たのであれば、金貨一枚二枚にはなるかもしれない。

ルディエラは嘆息しつつ、ランタンを一つ手に石階段をとつとつとおりた。

上に続く階段は鐘楼へと続き、下までの三階層分はただ螺旋階段が続く。冷たい空気が下から吹き上げるような感覚に身震いし、ふいに下からぼつりと現れた光にルディエラはびしりと体を硬直させ、ゆらゆらとそれが近づいてくる感覚にぶわりと鳥肌をたてた。

——鐘楼の幽霊！

いや、そんな馬鹿なつ。幽霊なんて居ない。

子供の頃に次兄がよくからかって言ったものだけど、キャーキャーと脅えるルディエラに長兄が優しく「そんなものはいないよ」と根気良く言ってくれたものだ。

その足先でぐりぐりと次兄の手の平をふんずけながら。

ああ、なんでもいい、とっ捕まえて売る！

クインザムが居ないと言っているのだから幽霊なんていやしない。だがしかし、もし本当にいるのであればそれはすなわち、レアアイテム。

商魂逞しいルディエラは瞬時にそう判断した。

持っていたランタンを投げつけ、腰に下げた短剣で攻撃をしようとした途端「うわあつ」と声が上がった。

「うわああ」

その声に驚いてルディエラも悲鳴をあげたが、実は驚いたのは突然ランタンを投げつけられたキリシユエータだった。

「おまえは、本気で殴るぞ」

投げつけられたランタンを危ういところでひょいと避けた第三王子殿下は引きつった笑みを浮かべた。

「トウモロコシの髭っ」

叫んでから慌てて口にフタを閉めた。

「な、何をしてるんですか。殿下」

「少なくともランタンを投げつけられる為に来た訳じゃないな」

引きつった殿下は破壊されたランタンを忌々しいという様子で見つめた。

「おまえは？ 花摘みか？」

ふんつと鼻を鳴らしている相手の言葉に、ルディエラは瞳をまたたいた。

「なんでこんな時間に花を摘みに？」

脈絡の無い単語にしか思えずに素直に言えば、キリシユエータは一瞬奇妙な顔をし、ついで視線をそらした。

ルディエラは貴族階級に属する娘ではない。

父親はもともと傭兵であるし、家族は男ばかりだ。社交という場にもなじまない為に淑女が頬を染めて「花を摘みに」と廁へと行くことなど馴染みの無いことなのだろう。

キリシユエータ自身、どんな言葉で飾ろうとも廁は廁だろうとは思っていない。浴室や部屋の片隅に置かれているツボに用があるならあつけらかんとそういえばいいとすら思うのだが、女性達は頬を染めて視線を逸らし「あの、お花を摘みに……」などと言うのだ。阿呆らしい。

「——そうか、いや、うん。私が悪かった」

キリシユエータは素直に謝意を口にした。

相手は野生のサル——もとい、土に埋まるにんじんだ。廁に行きた

くば率直に言うだろう。実に男らしく。

「で、どこに行くんだ？」

ランタンはすでに破壊されつくしている。灯りといえは自分が持つランタンだけだ。だから共に行くしかあるまいと尋ねれば、ルデイエラはぽんつと手を打った。

「ああ、忘れてた」

どうやら脳みそは鳥並みだ。三歩歩けば忘れるらしい。冷ややかに笑うと、ルデイエラは無邪気な口調で言った。

「お酒をもらいに」

「おまえは飲むな！」

その2

「お酒をもらいに」

「おまえは飲むな！」

「……ぼくじゃありませんよ」

むっとしながら言い返すと、相手はあからさまに安堵の息をついた。そしてそのまま一旦ゆるりと首をふる。

「私の前で性別を偽ることは無い」

そういわれたところでいきなり、あたしと一人称をかえるのは気がひけた。ルディエラは肩をすくめ、

「うっかり女らしくしたら面倒ですから気にしないで下さい」と返した。

「女らしい？」

「……なにか？」

「悪いが、おまえのどこをどう見たら女らしいのか、私には一向に判らん」

何せティナンに女だといわれてもなお信じなかった程だ。自分の副官が嘘を言うともおもえずに「女」であることを認めはしたが、どう見ても女である要素が無い。

思わずひらべったい胸をしげしげと見てしまったが、ルディエラは頓着しようとしなかった。

「……どこが女だ。」

女であれば自分の体をじろじろと見られればそれなりの反応を示すだろう。だが、この面前の小娘ときたら平然としている。

「何言ってるんですか！ ぼくは女を捨てたことは一度もない」

「……」

捨てる部分がなくてこれか。

キリシュエータは乾いた笑みを落とした。
女らしい部分があったとすれば、それはあの艶やかな髪だったろう。
癖のない髪を後ろ手に一本の三つ編みで結い上げた様子を思い出す。
あの髪を解いてたらし、女らしくドレスを着せればまさか男と間違
うこともなかっただろう。

どれだけ胸が無くても。

「殿下、本気で失礼ですよ」

「悪かった」

ふと、一度着飾らせてみるのも楽しいかもしれないと瞳を細めた
キリシュエータだったが、ふるりと軽く首を振った。

その動作が悪かったのだろうか、突然——キリシュエータの手に
あったランタンの炎がふっと消えた。

小さなランタンの小さな灯り。

しかし場に他に灯りは無く、一瞬のうちに闇に閉ざされたそこでル
デイエラはひゅっと喉の奥を鳴らし、

「きゃあぁっ」

と悲鳴をあげ、キリシュエータは慌ててルデイエラの手首を引つ
かみ、その口にながしりと自分の手を押し当てた。

ルデイエラの悲鳴が細長い螺旋階段の内を響き渡り、くわんくわん
と木霊した。

「馬鹿か」

キリシュエータは舌打ちを一つ落とし、耳の奥の鼓膜が震える感

覚に眉を潜める。いくら突然闇に閉ざされたといったところで、もとまたよりないランタンの灯り一つ。しばらく待てば闇内といえども目が慣れる筈だ。やはり騎士となるには心が頼りないのかもしれない。

やれやれと軽く首を振ると、口を押さえ込まれたルディエラは「うーううう」と声をあげ、キリシュエータの手から逃れようと顔を振る。

「落ち着けつ。すぐに目が闇に慣れる——見えるように」
「むうううつ」

じたばたと暴れ、何故か腰の短剣を手にルディエラがもがきながら指を差したのは、キリシュエータの背後。しかしあまりにも相手の動きが激しいためにキリシュエータは思わず力任せにルディエラの腹に拳を叩き込み、落とした。

今にも剣を振り回しそうな勢いが危なすぎる。

くぐもつたうめき声をあげてルディエラが前のめりに倒れこむ。力を失ったからだは柔らかく、ふとそんなことに女らしさを一つ見つけた。

それを合図にしたように、ぴしゃりと冷たいものがキリシュエータの首筋に触れた。

つうつと生暖かなぬるりと粘着質な液体が首筋を伝わっていく感触、そして、生暖かい息遣い。

その感覚に瞬時にキリシュエータは理解したが、ルディエラはすでに意識もなくキリシュエータの腕の中だった。

「……すまん、肝試し中だったのか」

「って、殿下ですかっ？ アイギルは？」

背後でわざとらしく鼻息を荒くしている幽霊役の男ナシルは、慌てた様子でいうが、キリシユエータは嘆息しつつ命じた。

「灯りを」

その声を合図に階段下、そして上から人の気配がやってきて途端にその場は明るさを取り戻した。松明とランタンとで照らし出されたそこには、ルディエラがくたりと気を失っている。

「なっさけねえなあ」

「まったく駄目なヤツだ」

「肝っ玉がちいさいな」

にぎやかになったその場で、見習いの情けなさを笑い出すほかの男達を前に、キリシユエータはルディエラを抱えなおした。

「悪いが、コレが気を失っているのは私が落としたからだ。幽霊の恐怖に気を失った訳じゃない」

彼女の名譽の為にそう言うキリシユエータの言葉に、階段をおりてきたベイゼルは肩をすくめ、そして階段をのぼってきたティナンは主の腕にいる妹を引き取ると、くったりとしている妹をたたき起こした。

途端、ルディエラはがばりと身を起こし、らんらんと輝く瞳で叫んだ。

「金づる！」

危うく幽霊役の男に短剣をかざして踊りかかりそうになり、ティナンはがしりとルディエラの腕を背後から押さえ込んだ。そうしなければそのまま本気で相手を切り付けそうな勢いだった。

「って、幽霊はどこですか？ ええ？ ナシルさん？ って、ぼくの幽霊は？」

とっ捕まえて見世物小屋に売りつけないと！

本気で訴えるルディエラの様子に、ベイゼルは頭を抱え、

「おまえどんだけ男前なんだよ」

と呟き、きよろきよろとしている妹の姿にティナンは「可愛い…
…」と声もなく唇を動かし、キリシュエータは脱力した。

その1

ルディエラが十四になろうという頃に、長兄であるクインザムが静かに告げた。

実家に残っている彼の私室の窓枠に手をかけて、じっと庭先で行われている素振りを眺めていた兄が、まさに唐突に。

クインザムが声をかけてきたことに、ルディエラの近くで同じように素振りをしていたセイムがずっと模造剣を収めて静かに頭をたれて控える。

ルディエラは気にもかけずにそのまま素振りを続けていたのだが、兄から続けられた言葉は思いもかけないものだった。

「ルディ、そろそろおまえも自分の身の振り方を考える頃合だ」

その静かな物言いにルディエラは素振りの手を止めた。

——騎士になる。

そんなことは夢のまた夢で到底かなえられるものではないことを承知している。ならば自分のような娘を示して「身の振り方」などといえどそれは結婚を意味していた。

「私は荷物を抱える気はない」

兄の言葉は辛らつだった。

「結婚について考えるのであれば、いくらでも便宜を図ろう。おまえは貴族階級の娘ではない。だが、おまえの父親も兄達も宮仕えであることにかわりはない。相応の地位のもの、商家に嫁ぐことはできるだろう」

「……」

結婚。

女を捨てている気はないが、だからといって結婚に飛びつく気持

ちにはなれなかった。

しゅんつと沈んだ妹に、クインザムは淡々と告げた。

「もしくは——自分の食い扶持は自分で稼ぐのだな」

「クイン？」

「この家は父の家だ。出て行けという権限は私にはないよ。だが、先ほども言ったように荷物を抱えるつもりはない。この家のものは誰しも働いている。そうだろう？」

クインザムは小さく微笑んだ。

「おまえが働くことで自らの糊口をしのぐのであれば、おまえの好きにきなさい。月に銀一枚。家にいれるのであればおまえはこの家で好きに暮らすことが許される。結婚もしなくていい。衣食住に困ることは無い。ただの荷物ではないと自分の存在意義をきちんと示しなさい」

結局は末の妹に甘いだけの話だった。

嫁に出すことが最善だと判っていても、自らが育て上げた娘をどこの馬の骨とも知らぬものにほいほいとくれてやる気にはなれない。その日がいつか来るとしても、それが先であればいい。こなくとも構わない。

世の中には非道な男もいる。最愛の妹の幸せを考えれば見知らぬ男に託すより、今までと変わらず過ごすのを眺めているほうがずっといい。

クインザムは妹一人養えない男ではない。

父親はまったく当てにしていなかった。

ルディエラはぱつと表情を明るくし、クインザムの申し出に乗り気であることをありありと示したが、兄をからかうように口を開いた。

「クイン兄さまみたいに決断力があって、ティナン兄様みたいに優しくて、バゼル兄様みたいに筋肉質な人がいたら結婚だって考えて

もいけどね」

クインザムはクッと喉の奥を鳴らした。

「到底無理な話だから、せめて私程度に留めて——」

言葉が途中で途切れ、ふとクインザムは視線を剃らした。

「兄さま？」

「……私のような男はやめておきなさい。それより、ルークの名前が出ていないね」

その話題には触れたくないかのように話を剃らしたクインザムだった。

自他ともに愛妻家なクインザムだが——自分のような男がルディエラを欲しがったら全力で潰そうと心に誓った。

そんな兄の内心など気付かないルディエラは肩をすくめながら、クインザムが切り替えてきた四男を思い浮かべてふるふると首をふった。

「ちい兄様は結婚に向かないよ」

——それに、自分も。

——兄から提案された銀貨一枚を稼ぐのに、まさか妹がまっとうとは到底言えないことに手を出しまくっているとはさすがのクインザムも気付きはしなかった。

「賭け試合？」

ベイゼルは目をむいて言った。

「家に銀貨一枚いれないといけないから。手っ取り早く賭け試合とかです」

勿論、いつもセイムから金を巻き上げている訳ではない。

大きなサロンなどで行われている胴元有りの賭博場だ。基本的には中堅商家などの家で行われている闘技場で、勝ち抜き戦などで戦い、

一般人に賭けてもらって胴元から給金をもらうのだ。

月に四日、五日で銀貨なら手にはいる。

まさに手軽な仕事だった。が、夜中にこっそりと抜け出す為になかなかできないのが難点だ。

クインザムやティナンにだけはばれないようにと気を使っている。

もともと二人ともあまり家にいないからいいのだが、侍女のマーティアはこの件に関して決してルディエラの味方ではなかった。

「……おまえ」

「ああ、ぼくつてば身軽だし、闘技場でも結構ひいきにってもらってるんですよー」

へらへらと素直に言うルディエラに、バイゼルは前髪をかきあげた。一度息をつき、二度目は天井を睨み、

「それ、違法賭博だから」

呻くように言った。

「え？」

「国がそんなもん許す訳ねえだろ、このタコ！ 頼むからへらへらそんなこと言うなよ？ 本当にまずいんだからな」

もう二度と言うな、そして手を出すなよ。

指を突きつけて厳しく言うと、バイゼルは顔を顰めた。

思わず自分達の部屋内だというのに、まわりをきよろきよろと確認してしまう。

なんとという無防備な馬鹿だろうか。自分だって十分馬鹿だが……何よりも、こいつはティナンの弟——違った、妹じゃないか！

騎士団長の妹が違法賭博場で賭け試合。
なんて恐ろしい。

ぶるりと身をふるわせたというのに、ルディエラは瞳を瞬いてさらに言葉をつのらせた。

「えええ！ 違法なんですか？ でもうちの父さんも時々やってるのに！」

「――」

それはアレか？

この国の騎士団の顧問をやっているあの筋肉ダルマのエリックの旦那のことか。ある意味ティナンよりずっとまずいだろぅが。

「そうかー、違法だったのか。だから父さんってばいつもへんなマスクしてたのか！」

……顔を隠して何をしているんだ、あの人は。

頼むからこの親子オレの目のつかないトコにもっていつてくれ。か弱いオレの心臓がもたねえ。

その2

先ほどまでは他の隊員もいたというのに、いつの間に気付けばその場にいたのはルディエラと——そしてティナンだけだった。

第三隊の隊長であるティナンと、現在役立たずまっしぐらのルディエラの二人きり。

ルディエラは我知らず口元に媚びへつらうような笑みが浮かびそうになった。

……会話がありません。

いや、会話など無くていいのだ。正しい上官と部下の立場として無言でいるのも悪くない。などと脳内で思っただけのもはじめてのうただけで、ルディエラはやがて話題を探そうと口を開いてしまった。

「あ、あの……隊長」

おそろおそろ話しかけると、ティナンは切れ長の冷たい眼差しをお荷物騎士見習いへと向けた。

「何か？」

——うわー、絶対零度だ。

ルディエラはしゅんつと肩を落とし「何でもありません」と小さく応えた。

馬の世話を終えて、その日の日誌を書くために隊舎に戻り、自分の机はないので部屋の片隅でせつせと日誌と報告書とか書いていたのだ。

そして当初は確かに他の隊員もいたのだが、気付けばティナンと二人きり。

報告書を書くのも手間取るルディエラだった。

そしておそらくティナンが食堂にも風呂にも向かわずにその場にいろのは、手の遅いお荷物隊員をまんじりと待っているのだ、上官として仕方なく。

副長つ。酷い。どうしてぼくを一人にするんですかつ。

と、本日は馬のボロに片足を突っ込んでしまい早々に「風呂おお」と叫んでいたバイゼルへと恨み言を向けても仕方あるまい。

がりがりとした粗い紙にペンを走らせながら、ルディエラはちらちらと兄を伺った。

——兄さま、兄さまつ。

顔を合わせればいつだって微笑んでその両手を広げてくれた兄だった。優しい手で頭を撫でて「いい子にしてたかい？」と言ってくれた兄だった。

今は冷たい目で見ています。

おそらくルディエラの旋毛の辺りをじつと睨んでいる。

——ここで泣いたら駄目だ。そもそもぼくはいつたいつからこんなに泣き上戸みたいに弱くなったんだ。こんなことじゃ立派な騎士になんかなれないぞ！

いや、なれるとまでは思っていない。それでも少なくとも本物の騎士達と三ヶ月も共にいることができるのだ。

騎士に混じり、騎士の訓練を受けることができる！

体力だつてつくし、筋肉だつてつく。なにせ周りは筋肉質だ。汗臭さもなんのその、ビバ筋肉天国。それでいいじゃないか。

よし。行け！ 突き進め。偉いぞルディエラ。がんばれルディエーラ。強いぞルディエーラ。

ルディエラはとりあえず脳内で謎の歌をつくりあげ自分自身を盛り上げてみた。

完全な現実逃避だったが、生憎と完璧とはいえなかった。

「すごいぞーぼくらのオルディエーラ。」

兄さまの底意地悪さなんてへいちゃらだーい」

心の中で謳っていたものが、最後には口をついて出ていたのだ。

「——ほお」

低く唸り声に、ぎくりと身がすくんだ。

慌てて顔をあげると、ティナン隊長は冷ややかさに更に磨きをかけてルディエラを見ていた。

「アイギル、君の兄は底意地が悪いのかい」

「……」

「どんな兄だか聞かせてもらえるかな」

つかつかと長靴^{ちよつか}を打ち鳴らして近づいたティナンは、完全に退路を失ったルディエラの顎をぐいっと引っつかみ、固定した。

「言ってごらん」

びよおおおと冷たい風音を耳にいれた気がした。

「隊員虐めは止めるといつてるだろう」

呆れた口調で言いながらキシシュエータは部屋の扉に手をかけて嘆息した。

「虐められたのはぼくのほうですよ」

「泣きながら走っていったぞ？」

「泣いて走りたいのはぼくのほうです」

恨めしい視線を向けてくる腹心の部下を前に、キリシユエータはぐるりと目を回して天井を睨んだ。

「あー……おまえが泣いても可愛くないしうざい」

「ルディは何しても可愛いですからね！」

「意味不明なぐずりは止める。子供かおまえは」

最近壊れているティナンにうんざりとしつつ、キリシユエータはばさりと持っていた書類をテーブルの上に放り出した。

「何です？」

「次兄の外遊の為の警備網と人員についての書類と、次の議会の考察書だ」

ティナンはその言葉に、それまでのなさけない表情を打ち消して真面目な表情になって「失礼します」と書類を手にした。

「外遊といったところでリルシェイナ様ですから、第二隊全部を向けてなくてもいいと思いますが」

「そうだな。むしろアレを暗殺する意味も判らん——それでも一応うちの次兄だからな。見劣りしない程度に揃えてやってくれ」

「判りました。第二隊の隊長とそこは話をすすめます」

ぱらぱらと書類をめくる青年はすでに妹馬鹿ではなくなっている。真面目な副官の姿に満足気にならずき、キリシユエータはどさりと自分の椅子に座り、眼鏡の蔓を中指の腹でおしあげた。

「それともう一つ」

「なんでしょうか」

「にんじんのことだ——さすがに第二隊の外遊にあれを混ぜる訳にはいかない。一月と言ったが、もう一月おまえが面倒をみる」

それはもう一月嫌われ続けると同義だった。

ティナンは恨みがましい眼差しを主に向けたが、ふいに口を開いた。

「その代わり議会員である殿下にお願いがございます」

「女性騎士の登用法案か？」

くすりと笑ったキリシユエータに、ティナンはまるで小馬鹿にするように瞳をすがめた。

「誰が好き好んでそんな法案の提出を願いますか」

「なんだ、違うのか？」

「この国ではつい百年前まで兄妹間の婚――」

「却下」

キリシユエータはくると椅子を回して背を向けた。

「ちょっとした冗談ですよ」

「……………」

「冗談ですよ？」

その3

もう少しで一月——あと数日で第三隊から第二隊にうつると思うとルディエラは口元が自然緩んでしまいそうになるのを必死で堪えた。
「キメエ！」

しかし第三隊副長であるベイゼルにはルディエラのにやつきは、ばればれだったようだ。

すぱんつと小気味良い音が頭をはたく。音はいいが、しかしそれほど痛くないソレは室内履きだった。

「なにすんですか！」

「男の体みながらニヤニヤすんなっ」

「してないですよっ」

風呂上りのベイゼルは上半身裸でがしと乱暴に自分の頭をタオルでかき混ぜている。

「それに、副長の体は残念な部類ですから嬉しくない」

「ざあーけんな。つつつかどこ見てんだよ、この変態がっ」

「騎士だというのにズボンの上に脂肪がのってるってどういうことですか。ぼーとくですよ、ぼーとく！ あーっ、許されないっ」

びしりと指をつきつけるルディエラは大真面目だった。

「これぐらい普通じゃ、ボケっ」

ベイゼルは苦々しい様子で吐き捨てると、言われた自分の腹を軽く摘んだ。

そう、確かに軽く摘めるが、その程度だ。残念な部類などといわれる意味が判らない。

言っておくが一般的な——とは言わないが、その手のお嬢さん方には好評だ。

ちきしょう！

「つつかズボンがちょっときついただけだろうが」

「ふんっ、そうやって自分を甘やかすから、残念な体になるんですー」

こおの、糞ガキ！

ベイゼルは舌打ちし、そのままざりと自分の寝台に腰を落とした。
——誰がお前の風呂時間を守ってやっていると思ってるこの糞餓鬼がっ。

怒鳴りそうになったが、ベイゼルはふと思い出した。

「お前もそろそろ移動だな」

「そーなんですよ！ 第二隊に移動ですよね」

「うんうん、よくがんばった」

俺！——ベイゼルは自分を称賛した。

偉い俺！ がんばった俺！ すげーぜ俺！

この糞餓鬼と一月過ごさねばならなかった自分は特別ボーナスに値する。騎士団からは無理でもぜひともティナン隊長にはたかろう。酒……いや、たまには女でもいいはずだ。

娼館のそこそランクではなく、もうちょっと上のランクの女を。こんな胸なしの女の面倒を一月見る為に外出まで控えたのだ。それくらいは許される。

妄想の世界に耽っていると、ルディエラが「よくがんばった」の枕言葉を自分のものと勘違いし、きらきらと瞳を輝かせて拳をぐつと握りこんだ。

「ぼくがんばりました！ 筋肉もちよっぴり付きましたし、筋肉痛とも仲良くなれたしっ」

「……筋肉？ あんま判らん」

ケつとベイゼルが胡乱な眼差しを向けると、最近首の下辺りまでちよっぴり髪の毛の伸びたルディエラは突然自分の腹部のベルトに手をかけ、バックルが外れないことに唇を尖らせてシャツを一気に引きぬいた。

「この腹直筋を見てもそれがいえますか！」

えいっとシャツをたくしあげる小娘の色気の無さにベイゼルは脱帽した。

「……も、いいです」

どうだ見やがれと示されても楽しくない。確かに腹筋はだいぶ鍛えられたようで、女性とは思えない体つきをしている。

たーのーしーくーない。

げんなりとしながらベイゼルは未だ濡れている髪をかきあげた。

「おまえね、だれかれかまわず筋肉出すな。というか肌をさらすな」

あと数日でこの子供ともおさらばキャホーイと思ったが、色々と心配になってくる。やれやれとベイゼルは吐息を落とした。

「おまえと一緒にの部屋で退屈はしなかったよ。だけど、第二隊にうつたらもつとしっかりしろよ？ 第二隊は司祭長であるリルシェイラ様の護衛だからな。あつちは厳格だぞ」

——しよっちゆう逃げ出すリルシェイラの子守部隊とか影で言われていたりもするが、それは今はナイショにしておこう。

しみりと別れを惜しみ、優しい兄のように瞳を細めてルディエラを眺めるベイゼルに、ルディエラは感極まるように目元を潤ませた。

「ぼくも楽しかったです。副長と離れ離れになっても、ぼくは副長

をもう一人の兄みたいに大好きです」

「おうっ」

——兄でも何でもいい。これで縁切りだ。

こいつがいなくなったらここぞとばかりに女遊びに励もう。子守で目を離せなくて辛くて辛くて、そもそも、女が同室にいるというのは手が出せないってどんな拷問だよ。

俺、本気で偉い！

あと数日で晴れてこの子守生活から脱却だ。

幸せになれ、俺。

しみじみとしているところで、ふいに扉がノックされた。

「あ？　なんだこんな時間に」

二人の視線が扉に向き、ルディエラはシャツをズボンの中に押し込みながらひよいひよいと扉を開きに行った。

「はい」

機嫌もよく扉を開いたルディエラが、びしりと固まったのは扉に立っていたのが親愛なる鬼隊長——愛すべきティナン兄だった為だ。ティナンは冷ややかな眼差しでルディエラを一瞥し、ついで寝台に上半身裸で座り濡れた髪をタオルでがしがしとかき混ぜていたベイゼルへと更に冷ややかな眼差しを向けた。

「ベイ、ちよっと」

すつと持ち上げられた手のひら、中指でちよいちよいと招かれたベイゼルは「うっ」といやな予感に呻いた。

「な、なんすか？」

「いいから、来い」

——いいから来なさい。

という台詞ではないところがそこはかとなくいやな空気を撒き散らし、思わずルディエラはそそくさと飛びのいた。

ベイズルは先ほどの幸せ気分を一気に吹き飛ばされ、肩を落としてとぼとぼとティナンの許へと歩いたが、そのまま肩をがしりと掴まれて部屋の外に出されたあげく、扉を乱暴に閉めると同時にその扉に押し付けられた。

「ルディエラに筋肉をさらすとはいい度胸ですね」

「俺の筋肉なんざ見向きもしねーよ」

「なんだソコ！」

泣きたい。

「そうですね、そんなみつともないものは人目に晒すな」

残念だとかみつともないとか、もう俺力ワイソウ。

この兄も嫌いだ。

「俺は出てるトコはしつかり出てさわり心地が良くてオトナな女にしかきょーみねえよ！ 誰があんな平面胸に興味あるもんかつ」

「うちのルディを愚弄しているんですか！」

どういえばいいんだーっ。

上半身裸の副官を扉に押し付け、顔を突き合わせてぼそぼそと低く罵る上官の姿は決して他人に見せてはいけないものだった。

「そんなことより、何よ？ こんな時間に何か用があったんじゃねえの？」

「……忘れていました」

ふっと押さえ込んでいた肩から力を抜き、ティナンはふいに寂しそうに瞳を曇らせた。

それを見ると、ベイズルは理解した。

愛しい妹が隊を移動して自分の手を離れるのだ。

この兄にしてみれば寂しいのだろう——自分とは違って。

「ま、心配なのは判るけどさ。子守部隊の連中はうちよりもずっと品行方正……」

なんといつても仕えているのが司祭長であるリルシェイラだ。と言葉をつないで慰めようとしたが、ティナンはその言葉に言葉がかぶせた。

「来月もルディエラを頼みます」

……

「は？」

「殿下から来月も第三騎士団で面倒を見ると命じられました。激しく不本意ですが、致し方ない。そういうことですから」

——俺、俺……俺カワイソウ。

その4

道端に雑巾が落ちていた。

いや、正確に言えば人間だ。おそらく。

赤みの強い金髪は日の光の中で鮮やかなオレンジ色にも見える。

それをじっくりと観察しながら、リルシェイナはしゃがみこみ、とりあえずついでにみようとと思ったものだが、いかんせんソレが汚れてはったり倒れている為に得体が知れ無さすぎた。

触れてよいものかどうかとじっくりと思案し、落ちている棒を拾い上げておそろおそろついでにみることにした。

軽くつついてもびくともしない。

これはまさか死体だろうか？

王宮敷地内に死体が落ちているというのも奇妙な話だが、まさか暗殺とかよからぬものが入り込み、衛兵であるこのものを殺傷し……

——巡る想像にとくとくと心臓がはやる。

「と、とりあえず祈祷か？」

司祭の祈りもなく果てた哀れな命を沈めねばならないだろうか？
半ば真剣に考え始めたところで、

「お………すい、たー」

か細い声が聞こえ、リルシェイナはそれが生きていることにびくりと身を跳ね上げた。

「死体が喋った！」

「死んだら喋るかっ！」

しかし、反論したのはソレでは無かった。

ぺしんと手元を叩かれ、持っていた棒を落とされる。リルシェイナは驚いて視線を上げると、そこに見慣れた弟の姿を発見した。

「あ、キーシュ」

無駄に偉そうな第三王子殿下——軍事將軍である弟は兄をゾーキンをみるかのように眇めた眼差しで睨んだ。

「また逃げたのか、リーシェ兄」

言いながら、キシシュエータは嘆息しつつボロゾーキンを引っ張り起こし、抱えあげた。

「おまえもこんなところで寝るな。道端に落ちてるのを回収するのが何度目だと思ってるっ」

「ううう、痛い。痛いっ。横っ腹痛いっ、止めて」

はううつと苦痛に呻く声に、リルシェイナは「まさかおまえが無体な真似を？」王族なんだからうまくやれよと口にし、今度はギロリと睨まれた。

「何の話だっ」

「……いや、ただの冗談だけど。そのこ、大丈夫かい？」

「打ち込みでさんざやられた拳句、剣が折れたから武器庫に行けと命じたら行き倒れただけだ。それより、あんたはどうして一人にいる？ 第二隊の人間はどうした？」

「ああ、叱らないであげてくれよ。私は昼寝の時間なんだ——隠し扉から抜け出した」

「その隠し扉今度ふさいでおく」

「王族が暗殺を逃れる為の大事な隠し扉だよ！」

「死ね、ボケ」

キシシュエータは言いながら勢いをつけてボロ雑巾を肩に抱え上げ、すたすたと歩き出した。

数歩歩いたところでぴたりと止まり、眉間に皺を寄せて指を突きつける。

「部屋に帰れ」

「ね、その子さ、おん——なんでもないです。なんでもないです。な・ん・で・も・な・い・ですっ」

両手で広げて相手を押しとどめようとするリルシェイナと、物凄く平坦な表情で近づきずんつと顔を寄せたキリシュエータはそのまましばらく視線を交し合った。

「兄君は昼寝中でしたね」

「昼寝はおかしな夢を見やすいデスヨネ、ソウデスヨネ。ハイ」

「そうだ、これは女だ」

しかしキリシュエータはあっさりと白状した。

「来月、いやその次の月になったら第二隊に移動させる。男としてだ——責任持つて管理しろ」

実の兄に向かつて横柄な様子で突きつけ、ニヤリと口の端を歪める。

「別に女とばれても構わんが、あんたの第二隊で問題が起きたら大おお事ことだな、司祭長」

「……嫌がらせ？」

「それと、これの父親は騎士団顧問のエリックだし、当然第三隊隊長のティナンは兄だ。ついでに言えば西砦の熊殺しも兄だな。何かあった時にあの三人の攻撃を負うのは面倒くさそうだな」

ますます笑みを深める弟の台詞に、リルシェイナは蒼白になって身震いした。

「冗談だろう！ そんな危険な女の子なんて引き受けられないよっ」

「そうか。だが第二隊に移動は確定している。観念して世話に励めよ」

「キーシュ！ 厄介ごとにぼくを巻き込むな」

「そうは言っても、もう確定している。がんばれ、応援している」

少しも応援などしていなさそうな平坦な口調で言い切り、荷物を担いだまますたと行く弟に必死に追いつがって見たが——か弱

い司祭長が凶悪な軍事將軍に勝てる筈がなかった。

「キーシュ！ 夜中に祈祷してやるからなっ」

「くだらんこと言っていないでさっさと帰れ、ボケ兄」

「ベイゼル、道端に落ちてたぞ」

軽くおやつを食べて生還したルディエラは恐ろしい程元気を取り戻して今は他人の組み手の見学をしている。

「やつちまえ！」

とか言っている言葉が男らしい。

それを少し離れた場所から腕を組んで眺めて言うキシシュエータに、ベイゼルはがしがしと頭をかいた。

「餌が切れると駄目なんスよね、いつもすみません」

「忘れているかもしれないが、私はあいつの回収係ではないからな」
誰も回収に行けなんて言ってませんけどね。

という言葉をベイゼルは飲み込んでおいた。しかしニヤリと口の端を歪めて見せる。

ニヤニヤと無遠慮に見てくる相手を一瞥し、キシシュエータはくりと身を翻そうとして固まった。

「ああ、殿下！ こちらでしたか」

ずかずかと歩いてくるでかい男の存在にキシシュエータは顔を引きつらせ、そしてベイゼルは一瞬意味が判らなかったが次の瞬間には焦り、意味もなくくりと反対方向を向いた。

「定期報告に来たのですから、きちんと執務室にいてください」

「いや、うん……すまん。バゼル」

筋肉ダルマエリックの一番そっくりな息子は豪快に笑い、ふっと

その視線を彼らの後ろ、広場で行われている組み手へとむけた。

「おっ、第三隊楽しそうなことしてるな」

「お、おうっ」

キリシュエータは後ろ足でバイゼルを蹴ったが、バイゼルは一步退いて逃げただけだった。

「報告書は執務室に置いてまいりました。必要事項は書記官に。これといって重要なことはありません」

「そうか、じゃあ気をつけて帰れ」

「了解しました。じゃ、オレはこのままちよっくら組み手に混じって――」

バゼルは陽気に笑い、ふと停止した。

「……」

「……」

「……」

何を、何を見ているんだ！

何に気付いているんだ。

喋れこの筋肉ダルマ！

キリシュエータの胃がキリキリと痛み出し、バイゼルがじりじりとその場から離れようとしていると、バゼルは自らの腰につるされた剣をトントントンとたたきながら首をかしげ、

「いや、違うか」

と小さく呟いた。

「ど、どうかしたか？」

「いや、あの赤毛のちびっこが一瞬オレの妹に見えたんですよ。最近旅行だとかで家をあけてるらしくて、見てないからかな。赤毛を見ると妹だとおもっちゃう」

はははははつと笑いながら頭をかき、バゼルは「じゃ、殿下失礼しますよ」と軽く手をあげてその脇をすり抜けた。

「おう、ティナン。オレも混じっていいか？」

——監督役を務めているティナンが兄の存在に気付き飛び退り、ルディエラが慌てて他隊員の背に隠れ、キリシュエータは思わずリルシェイナではないが胸元に手を当てて神に祈った。

——ティナン、神がいれば明日もきつと生きていられるだろう。きつと……

その1

バゼルの混じる組み手の間、ルディエラはこそこそと隠れて過ごした。

危うく広場に引つ張り出されそうになったが、数名の隊員と共に雑用で指名され、そそくさとその場を逃がしてもらえたのだ。

首の皮が繋がったと安堵したのはルディエラばかりではない。ティナンも、そしてそれはキリシュエータも一緒だった。

そんなこんなで新たな用事を言い付かったルディエラだったが、何故か現在軽く窮地に陥っていた。

「俺は病気なんだろう」

つらそうな言葉はルディエラの心にもやんと響く。

第一隊の純白の騎士服の隊員の名前は当然の如く思い浮かばない。なんといても他人の名前を覚えるのが苦手なルディエラは、現在自分がいる第三隊の人間だとて、未だにきちと覚えていない。

「だが、もう駄目なんだ」

何が？

ルディエラは荷物と荷物の間に挟まり、現状の打開策を練るのが懸命なのではないかとひしひしと思ひ浮かべていた。

頼まれて鎖帷子の修繕用に古い鎖帷子を武器置き場に取りに来たところで、武器置き場の片隅で繰り広げられる「告白」にルディエラは慌てて身を潜めてしまったのだ。

「俺のものになれよ」

ぼそぼそと聞こえているのは、これは……そう、これは間違いなく告白ではあるまいか。

「セიმつてば肉屋のアリイに告白されたんだって！」

「まあっ、お肉に困らなくていいですね！」

「勝手に盛り上がるな！」

なんて良くマーティアと二人でセიმをからかってきやいきやいとやっていたものだが、これは種類が違う。

何故ならばここはむっさい男ばかりの園。

騎士団の隊舎——警備隊であれば女性管理間や事務官が存在するが、騎士団には女性隊員などいないのだ。そこから導き出される答えは三つ。

一、外部から女性を連れ込んだ。

二、告白しているのも男、告白を受けているのも男。

三、告白しているのは男、だが告白を受けているのは男に化けた女。

……とりあえず三は無いな。

そうそう男に化けた女がいてはたまらない。

「やめて下さい」

「ごそごそと聞こえる音と、相手の拒絶する言葉。

とりあえずルディエラの謎は一つ解けた。

告白されているのも男だった。立派な成人男子の声——だ。

しかも、なんと、相手は嫌がっている。つまり、告白している男は変態かもしれないけれど、告白を向けられている男は変態ではないのだ。ここはひよいひよいと顔を出して「お邪魔しましたー」と言うべきか？ ああ、でも、どうしたらいいんだ？

ルディエラがますます身を縮めていると、壁にがんつと押し付けられるような音が響いて小さなうめき声まで聞こえてくる始末。

これはもしかしたらヤバイのか？

ルディエラがぐつと拳に力を込めると、今度は力強いがつんと鈍い音が響いた。

「やめろってんだろ、このXXXXX野郎。病気？ そんな言葉は免罪符でも何でもない。その腐XXXX引っこ抜いて無理やりテメエの——」

笑いながらさわやかに吐き出される言葉の羅列は、とても耳に入れたくない程にお下劣でした。

延々と聞こえてくる言葉にルディエラが蒼白になっていると、やがてその場から逃げ出すような音が響き、ついだふんと鼻を鳴らす音と、パンパンと手を打ち鳴らし、こともあるうちに武器倉庫の中、更に奥へと足を進めたその人物は荷物の間でうずくまって蒼白になっているルディエラと対面してしまった。

「……ここはまさかのハッテン場か？」

面前に現れた長靴^{ちゅうか}をおそろおそろ上へと辿ると、その隊服は第二隊の薄い青——冷たい黒い瞳が胡乱にルディエラを見ていた。

「あ、あのっ。すみませんでした」

ルディエラはがばりと勢いをつけて体を起こし、ぺこぺこ頭を下げた。

「見たくて見た訳じゃありませんっ。というかばく見てませんからっ。男の人に告白されてキスされて、拳句怖いこと言いながらこぼこにしていたのなんか見てませんからっ」

「完全に見てるじゃないか」

引きつった笑みで言われてしまい、ルディエラは更に自分が窮地に陥ったことに気付いた。

「確か、お前もビヨウキモチなんだよな？ 第三隊のちび」

「病気？ ぼくは健康ですけど」

「男好きって有名だろ」

その言葉に、ルディエラはかちんときた。

「ぼくは別に男好きじゃありません！」

何故そのような噂がたっているのか判らないが、ルディエラは男好きではない。生憎と女好きでも無いが——あれ、この場合は男好きで正解なのだろうか？

ルディエラは思わず真剣に考えてしまいそうになった。

「お前がガタイのいい野郎の服を脱がして襲おうとしたっていうのは有名な話だ」

「それはっ……」

言い返してやろうと思ったが、面前の青年は忌々しそうな顔でルディエラを眺め回し、その白手に包まれた手でぐいっとルディエラの顎先をつかんで上向かせた。

黒髪がさらりと揺れる。

冷たい黒い眼差しは無機物を見る眼だ。

「ま、確かにさっきのデカマッチョのおっさんより、まだおまえみたいのだったら理解はできる」

更に馬鹿にされた気がして、ルディエラは相手を振り払おうとしたが、何を思ったのかその相手は男にキスされて憤っていたにも関わらず、ふいに身を屈めてルディエラの唇を自分の唇で塞いだ。

——ぐぎゃあ！

男、男にキスされてるっ。

変態だっ。

一瞬混乱したルディエラだが、よくよく考えてみると自分は女だった。自分は女だし、相手は男だからこれは正解。

なんだちつとも問題無い——わけあるかっ！

はじめはただ押し付けられただけの唇がずっとその圧力を弱めると、舌先がルディエラの唇の膨らみを確かめるようになぞり、その隙間に侵入しようと試みる。ルディエラはじたばたと暴れ、ふいに体を沈めたかと思うと、すばやい動きでその腕の中から抜け出し、びしりと指を突きつけた。

「何するんですかっ」

「口直し——わりと悪くなかった」

きいいいっ。

ルディエラはギンっと相手を睨みつけ、足元に落とした鎖帷子をすくいあげてふんつと顔をそむけてその場から逃げ出した。

——おまえはデカマツチヨのおっさんと同類だ！ 変態っ。

色々といいたいいことはあったが、悔しさの方が先にたってしまった。腹立たしさのまま第三隊の隊舎に戻り、ルディエラは苛立ちを撒き散らした。

「副長が悪い！」

「は？ 何が？」

鎖帷子の修理用に古い鎖帷子をとってきてくれと命じつけたベイズルを罵ってしまったが、完全な八つ当たりだ。だが、ふと気付いた。

つまり、自分も八つ当たりをされたのだ。

——だからって男とキスするか？　口直しだ？　ふざけるなっ。

第二隊の薄青の隊服に黒髪、黒い瞳の男。

絶対に許すまじっ。

とりあえず「ファースト・キス」を見知らぬ男に奪われるなんて、
酷い。

とは違う次元で憤っているルディエラは女として何かが欠けている
かもしれない。

その2

カカッと音をさせて馬の蹄が地面をかいた。

馬上のルディエラの手が反射行動で馬の手綱をひき、突然の命令に馬の足が止まった為だ。

「どうした？」

ルディエラの背後を並足で走っていたベイゼルも同じように手綱を引き、太ももでぐつと馬の背を押さえ込み、浮かせていた尻を鞍に落とす。

「……あの人、知ってます？」

ルディエラの眼差しがきつく第二隊の薄青の隊服を見て告げる言葉に、ベイゼルは眉を潜めてそちらへと視線を向けた。

司祭長にして第二王子殿下リルシェイラ——の子守部隊として名高い騎士団第二隊は、今日もどうやら逃げ出したリルシェイラを探しているのか、あわただしく「あっちだこっちだ」と動き回っている。

数名の薄青の隊服の男達が、言葉を交し合いながら指であちらこちらと示しているのは、明らかに何かを探している様子だ。

「あの、黒髪の人」

ルディエラが忌々しそうに言いながら顎先で示す。

ルディエラらしくない反応に眉を潜めながら、ベイゼルは「ああ」と呟いた。

「確かフォード・バネット？ バネット・フォードだったか？ なんか名前だか家名だかどっちでもいんじゃないかね？ ってな名前だ。詳しくは判らん」

あいつがどうかしたのか？

そう首をかしげて問いかけたが、ルディエラはその時はすぐに興味を失ったかのようにぷいっと顔をそむけ、さつさと馬首を元の方向へと向けた。

ベイゼルは意味が判らず、思わずじつと黒髪の男を眺めた。

黒髪に黒い瞳を持つ精悍な顔つきの男だ。ルディエラの大好きな筋肉質という訳ではないが、リルシェイラの子守部隊の中ではしつかりとした肉体を持っている。何より、あのルディエラにしては態度がおかしい。

普段であれば「副長ー、あの人誰ですかー？」と明るい口調で尋ねてくるだろう。だが、先ほどのルディエラは険しい表情を浮かべ、その口調は固く忌々しいというのを隠さない。明らかに好意ではなく嫌悪の類だろう。

だが、バネットとルディエラの間は何の接点も見出せない。

「ってか、俺が悩むことでもねえし？」

ぼやきながらベイゼルは自らも馬首をめぐらせた。

ただ、誰に対してもあけすけに疑うこともなく好意を示すルディエラにも、人を嫌うという感情があることに驚いていた。

「いいか、お前は酒を飲むなよ？」

毎度毎度くどいほど言われているルディエラは、隊舎から程近い場所にある騎士団御用達の酒場である【アビオンの絶叫】の一角で唇を尖らせた。

今日も軍服姿ではぼ占めている居酒屋では、各場所でカードゲームなども行われている。まったく平和な国だ。

酒を禁止されているのだからルディエラは酒場など来なくていいのだが、やはり皆が行くといえれば一人寂しく官舎で待つのは寂しい。何より今回は鬼隊長ティナンが不在だと耳に入れていた為、ルディエラは嬉々としてくつついて来たのだ。

それに、店主であるドラッケン・ファウブロウご自慢の牛舌の煮込みも捨てがたい。三日三晩コトコト煮込んだという煮込みはまさしく絶品だ。

「ちゃんと見ているから、あまりうるさく言ってやるな」

なぜか混じっているキリシュエータ第三王子殿下は、相変わらず銀縁の眼鏡をかけ、一般隊員と同じような騎士団服だった。

いわゆる変装なのかとルディエラが尋ねると「酒を飲みに来ているのに軍事將軍の黒い衣装に厚地のマントなんてつけていられるか。眼鏡は変装のつもりはない。普段からつけたりつけなかったりだな」キリシュエータは言いながら、ゴブレットの酒を美味そうに一口喉へと流し込む。それを恨めしい気持ちで眺めやったルディエラは、一人寂しく果実水をすすり、ふと店内に入ってきた一団に顔をしかめた。

第二隊を示す薄蒼の騎士団服。

今まで気にかけたこともなかったのだが、一度気になると視界の端にどうしても引つかかるらしい。喉に刺さる魚の小骨のように。

「どうした？」

「……いや、なんでもありません」

第二隊の隊服というだけでイヤな顔をしている場合ではない。

なんといつても来月にはその第二隊に入ることになっている身だ。毛嫌いしている場合では無い。

だが、ルディエラの理性がどうしてもイヤな気持ちをむくむくと

押し上げてくるのだ。

しかも、数名の隊員が入って来たかと思うと、その後ろから問題の黒髪が顔を出しては、ルディエラの不機嫌——不愉快さも更にゲージを増していく。

出たな、変態。

男にキスする変態めっ。

ルディエラの胸の内ではわめくのは嫌悪感より先に復讐心だった。

そして相手もルディエラに気付いたのだろう。

ふっとその視線が向けられ、しばらくルディエラをしげしげと観察したかと思うと——嘲るように鼻で笑ったのだ。

カチン、と頭の中で何かが音をさせた。

鼻で笑っておきながら、そのままふいつと視線をそらして自分の仲間内となにやら話しをはじめようとする。あまりにも腹がたったルディエラは、もっていた果実水をガンつと乱暴にテーブルに押し当てると、引きつるような微笑を浮かべた。

目にモノみせてやる！

「殿下、殿下」

ルディエラは自分の感情を捻じ曲げるように明るい口調で隣のキリシュエータの袖を引いた。

「なんだ？」

「ぼく、こないだ武器庫ですっごいものを見——」

元気良く声をあげた途端、今にも【アビオンの絶叫】の一角で椅子を引こうとしていた黒髪の男は、勢いをつけてぐるりと身を翻すと、足音も高くルディエラの元へと近づき、わざとらしい声をあげた。

「ちびつ、おまえはちっさいからそんなトコにいるとは思わなかったな。ちよつと来い」

その表情はひきつり、明らかに怒りを押さえ込んでいる。

ルディエラは嬉々として口を開いた。

「この人と第一隊のっ」

その口にぐつと大きな手が押さえつけられ、無理やり肩口を掴んで引き寄せようとする。

「いやあ、まさかこんなところで会えるとはっ。なつかしいな、ちよつと話そうか？」

まるで古馴染みを見つけたというような言い方だが、勿論ルディエラとこの男は古馴染みでも何でもない。

その勢いに気圧されたキリシュエータと、そして第三隊のベイゼル配下は呆氣に取られた。

「にんじん、知り合いなのか？」

怪訝な様子のキリシュエータの言葉に、ルディエラは口をふさがれながら「知りません！」と言い放とうとするのだが、それはむなしく「むむむむう」という音になった。

「知り合いです。幼馴染なんです。すみませんが、少し借ります」
「むむむ、むむむううう」

離せ、変態！という苦情も、謎のむむむむ語に変換されてしまう。

そのまま小脇に抱えてさらわれそうになったが、幸いその場には昼間のルディエラを記憶しているベイゼルがいた。

「知り合いの訳ないでしょ。で、うちのが何かしたか？」

やれやれと肩をすくめる。伸ばした手で容易く男の手をルディエラから引き剥がすと、ルディエラは自由になった口で思い切り叫んだ。

「この人、男の人とキスしてました！」

途端に酒場はどよめき、キリシユエータは瞳を見開き、調子に乗ったルディエラはその勢いのままにさらに爆弾をたたきつけた。

「それを見たばかりにもキスしたんですよ！ 酷いつ、変態反対っ」

——シーンつと凍りついたその場で、本名フィルド・バネットは自分の人生ががらりと音をさせて崩れていくのを感じた。

「きいいいさあ、まあっ。

あそこまでされたら普通黙ってるもんだろう！ 貴様に矜持は無いのかっ」

「ぎゃあっ、さわんな変態！」

「男に口付けられたのはお前も一緒だ！」という口封じのつもりでやった行為すら暴露されてしまったフィルドは、その額に変態の文字がさんざんと輝いてしまったのをひしひしと感じていた。

その3

納得がいかない。

ルディエラはアヒルのように口を尖らせ、ぎりぎりと奥歯を噛み合わせて眉を潜めていた。

それに反してベイズルときたら必死に何かを堪えて肩を小刻みに震わせている。この場合の何か、それは笑いというものだ。

腹の底からこみ上げてくる笑いの渦は、やがて決壊しベイズルの身はばったりと崩れた。

「たまんねえっ。クソ面白い！」

「ちつとも面白くないっ」

ルディエラは怒鳴り散らしたが、思わず本気で涙が滲みそうになった。

先日の【アビオンの絶叫】での出来事は、あっという間に広まった。それはそれは面白おかしく。

曰く、第二隊のフィールド・バネット——通称フィードは男好きである。

これはいい。

この噂に関して、ルディエラは「よし！」と拳を握り締めてケケケケケと謎の笑いを腹の底から吐き出した。まさに「ざまあみろ！」と腹のすく思いだった。

曰く、ルディ・アイギルとフィールド・バネットはフドウトクな行為をしているところを目撃された。

これは違う。断じて違う。嘘っぱちだ。

見ていたのはルディエラであって、フドウトクな行為——はルディエラには少ししか関係がない。

そう、この噂はただ面白おかしく脚色されて遊ばれて流されてしまっているだけなのだが、当然当人にはたまったものではない。

「どうしてばくまでっ」

「本気で言ってるヤツなんて六割程度だ。気にすんな」

バイゼルは快活に笑って見せたが、勿論嫌がらせだ。

「六割が本気って、勘違いしている人間のほうが多いじゃないですかっ！」

「だってもともと前が男好きだっていう噂は流れてたから、更に信憑性が増しただけつつうことだな！」

ぼんぽんつと頭をたたかれ、ルディエラは一層惨めな気持ちになった。

あの日、【アビオンの絶叫】の店内はまさに大騒ぎだった。

店内にいた人間達は、はじめのうちこそルディエラの発言に水を打ったようにシンッと静まり返ったものだが、やがてルディエラとバネットの掴み合いを面白がるようにはやし立てた。

そう広くも無い店内だというのに、バネットはルディエラの襟ぐりを掴みあげて怒鳴りつけ、ルディエラはそれに対して「喧嘩なら買いますよっ！」と息巻いている。

酒はどちらも入っていないのだが、このまま放置しておけばまさに転げまわって阿呆のように取っ組み合いの喧嘩になりそうな雰囲気だ。

それを「あー、バイゼル」と顎先でキリシュエータが命じつけて引き剥がし、キリシュエータは店内の喧騒を沈める為にパンっと手

を打った。

途端にその場が静まるのは、どんなに騒いでいたとしても誰もがこの王子の存在に気付いていたし、また誰もがその動きを把握しているということだろう。

バイゼルはルディエラを背後から押さえ込み、第二隊の副長であるサイモン・クロレルがフィールドを押さえ込んだ。

キリシュエータは「どうして私が喧嘩の仲裁などしなければなら
ないんだ」とぼそぼそと呟きながら眼鏡を左手の中指で押し上げ、
瞳を細めた。

しばらく睨みあっているルディエラとバネットとを交互に見つめ、
そして先ほど二人が言い合っていた言葉を頭の中で纏め上げる。

一瞬にして「どうして自分は今日酒場にいるのだろうか」という
激しい後悔が押し寄せた。面倒ごとは嫌いなほうではない。そうい
ったことを楽しめるタチだ。だが、あまりにも下らない。

「つまり——バネット」

「殿下。言っておきますが今のこいつの言葉は足りない部分が山と
あります。私は同性にたいして何の感慨も持ち合わせてはおりませ
ん！確かに、あの日武器庫で不遇にもそういった場面がありまし
たが、私の本意では決して無い」

「話が見えん。きちんと説明するならきちんと説明しろ」
つきつきと頭が痛む。

ちらりとルディエラに視線を向ければ、ルディエラはその瞳を爛々
と輝かせ、その口元はバイゼルによってふさがれている。

キリシュエータはふっと浮かんだ不快な気持ちにとりあえず蓋を
した。

——なんだか今ちよつとイヤな気持ちになった気がするが絶対に気のせいだ。そう、絶対に。

「にんじん。言いたいことは？」

その言葉にベイゼルがその手を離すと、ルディエラは大きく酸素を取り入れるように呼吸し、キつとその眼差しでバネットを更に睨みつけた。

「確かにその変態が他の男に無理やりキスされていたのは本意じゃないかもしれないですが、でも、ぼくにキスしたのは許せない！」
「普通に考えて口止めだろうが！ 同じことされたんだぞ。私がクソ野郎にキスされたなどと言わないように、貴様も同じ目にあわせただけだ」

なんで貴様はそうべらべら言えるんだ。

野郎にキスされたことを口にするなんて、頭おかしいだろう！

また怒鳴りあいになり、ベイゼルは慌ててルディエラの口をその手で塞いだし、バネットを押さえ込んでいるクロレルは力いっぱいバネットの足を蹴った。

——そう、ソレは頭がおかしい。

キリシュエータはつきつきと痛む額に軽く手で触れ、溜息を落とした。

「第二隊、クロレル」

「はい」

「第二隊は明日から一週間、全員減俸。隊の風紀を乱すな」

「申し訳ありませんでした」

「バネットの処遇は隊長に任せる。報告書は必要が無いな？——口頭でのみ報告しろ」

丁寧に頭を下げるクロレルの様子に、ルディエラは固まった。

まさか隊の減俸などという話に発展するとは思ってもいなかったのだ。

その眼差しを見開いてキリシュエータを見つめると、キリシュエータは今度はその眼差しをベイゼルへと向けた。

「第三隊、ベイゼル」

「はい」

「第三隊は明日から一週間、超過勤務を命じる。アイギルの処遇については隊長に任せるといいたいところだが」

ちらりとその眼差しがルディエラに向けられた。

ベイゼルに逆手を取られておさえられ、もう片手で口を塞がれているルディエラの瞳が、こぼれそうな程見開かれてキリシュエータを見つめている。

キリシュエータはふつと笑った。

「ティナンに任せたら十中八九、クビだろうな」

ベイゼルも苦い表情を浮かべているのを見れば、さすがに除隊させられるのは哀れに思うのだろう。

そしてキリシュエータはその視線をバネットへと向けた。

バネットの眼差しはルディエラへと向けられ、明らかに冷たく「ざまあみろ」と輝いている。

キリシュエータは深く、深く息を吸い込んだ。

ルディエラを騎士団に引きこんだのは、遊びだ。

退屈な日常にいつもとは違うものを放り込む、遊び。

ただの思いつきで、何の弊害もなければ、何の意味も無い。

女性騎士の登用など本気で考えている訳でもない。そもそも、ルディエラはよくやっているといえはよくやっているが、それは女性としては良くがんばって騎士達についてきているというだけの意味で、

他の隊員に喰らい付いているのが精一杯だ。

女性隊員を入れることにうまみを感じさせるものではない。
むしろ男しかいない場でこんな阿呆な騒ぎを起こすのだから、
ます女性など不必要だ。

三ヶ月持たない——か。

キリシュエータは瞳を閉じて、ふるりと首を振った。

コレは自分の遊びだ。

こんなクソ下らないネタで潰してもらっては困る。

「アイギル」

声をかけると、バイゼルがまた手はずす。

勢いこんで口を開くかと思えば、ルディエラは滲むような小さな声
でこたえた。

「はい……」

頭に手を置いてぐりぐりとかきまぜてやりたい気持ちになった。

悔しさにきゅっと引き結んだ唇。それを見つめ、浮かんだものに苦
笑する。

「酒場での喧嘩は全て戯言だ。翌日に響かせるな」

意味が判らないと上目遣いで見上げてくるのに目を細め、軽く手
を払った。

「酒の席だ。クロレル、バイゼル——今のは忘れる」

それを合図に【アビオンの絶叫】は普段の酒場に戻った。

彼らの主の言葉は絶対だ。ただの余興として流されるだけ。酒場は
普段どおりに戻ったが、おそらく二人の禍根は根強く残るのだろう。
キリシュエータはバイゼルにくしゃくしゃと頭をかき回されてい
るルディエラを一瞥し、瞳を眇めた。ついで複雑な様子を見せてい

るバネットに近づき、その肩を叩いた。

「咎めはしない。だが、お前が闇討ちにあっても私は知らぬふりをするからな」

「は？」

小さく低く囁いたつもりが、ベイゼルにも聞こえたのだろう。ベイゼルはバネットの反対の肩をぽんぽんと二度叩いた。

「生きる？」

「は？」

私の玩具で遊んだ罰としては、十分な仕置きになるだろう。

その1

ルディエラは皮袋に入った銅貨と銀貨、そして金貨に困惑していた。

昨日はいわゆる騎士団の給料日。隊長によりじきじきに下されるそれだが、当然のように見習いにはそんなものは無い。

がんばっているのにそれはちょっと寂しいなあと思っていたのだが、その日ルディエラは思いがけない贈り物に驚愕した。

「ほら」

と、まず銀貨を一枚くれたのはバイゼルだった。

「へ？」

「下のモンの面倒みるのも上のモンの仕事だ。菓子でも食べよ」

それを筆頭に、通りかかるほかの隊員から「煙草代」だの「飴代」だのという名目でコインが渡され、あつという間にルディエラの財布はそこそ一杯になったというのに、とどめのように第三王子殿下キリシュエータは金貨を一枚ルディエラに手渡した。

「肥料代」

その名目は一番最低だった。

口の端をあげ、実に楽しげに「きちんと肥料を足しておかないと成長しないぞ、にんじん」

とからかう口調で言う。

流石に金貨は金額がでかすぎると断ると「見習い期間は給金が出ないのだから、何もいわずに受け取るのが見習いの仕事だ」だの「たまには服に気をつかえ」などと取り合わない。

なんというかあつという間に一財産だ。

ルディエラは仲間達の優しさに心を暖かくし、皮袋を腰にぶら下げて鼻歌交じりにてこてこと隊舎の渡り廊下を歩いていたのだが、前方から敬愛すべき第三騎士団隊長殿が歩いてくるのを感じると、びたりと足をとめて壁際により、慌てて軽く頭をさげた。

「アイギル」

低く、冷やかな声が耳に落とされる。

たいていの場合ティナンは声など掛けずに無視していくのだが、その時は違った。

びっくりとルディエラの心臓が跳ね上がる。意味もなくじわりと自分の中に滲むものがあり、歯を食いしばった。

「はい」

「顔をあげなさい」

淡々とした問いかけにおそろおそろ顔をあげると、呆れるような奇妙な眼差しでルディエラを見つめたティナンが、ふいにルディエラの胸のポケットにすつと白手に包まれた手を向けた。

「ぼくはおまえの働きを認めはしないが、これは慣例の一つだ」

胸のポケットに落とされた二枚のコインの感触に、ルディエラは軽く目を見張った。

「休暇を楽しみなさい」

ぐつと拳を握り込み、ルディエラはティナンに抱きついてしまうのを堪えた。

許されるのであれば兄に抱きついて「兄さま、大好きっ」と言いたいところだが、ここは隊舎で、そしてティナンは兄妹であることを示すことを良しとしない。

頭をさげてティナンを見送り、ルディエラは言われた通り休暇を楽しむべくばたばたと渡り廊下を走り、自室に飛び込むと着替えの最中のベイゼルに言った。

「副長！ 町に行きましょうよ」

「……行くけどいかねえ」

ベイゼルは途端に嫌そうに顔をしかめ、ベルトのバックルを止めた。

そしてふと思いつくように口の端をイヤらしく歪め、ルディエラを指先で招くと、がしりとその肩を抱き、声を潜めた。

「それともやつぱ一緒に行くか？」

「だから町に行くんでしょ？」

「たりめえよ。久しぶりの休暇だからな。たあっぷり鋭気を養うんだよ、娼館で」

くくくくくつと嫌らしい笑みを浮かべて見せる相手に、ルディエラは慌ててわたわたと腕を動かし、相手の手を振り払った。

「なっ、昼間っから何言ってるんですかつ」

「お前も連れて行ってやつてもいいぞお？ 何ならおごつてやる」
当然、そんなつもりは毛頭無いベイゼルだった。ただルディエラをからかっていたのだが、ルディエラは真っ赤な顔をしてギッと睨みつけてくる。

「だって副長コイビトがいるんでしょ？」

「——おまえ、人の心をえぐんじゃねえっ」

ベイゼルは忌々しいというように舌打ちした。彼の言うところのコイビトの名はナシユリー・ヘイワーズ中尉——騎士隊隊舎とは王宮を挟んで逆側にいる警備隊の事務補佐官をしているが、生憎と心のコイビトであって実際の恋人では無い。幾度かアプローチをかけているのだが、腕をひねられ、投げ飛ばされ、腹部に蹴りまでくらったこともある。

ただいま連敗記録を伸ばしている最中だった。

「別れたんですか？」

小首をかしげる悪意のなさそうなルディエラの表情に、ベイゼルは毒気を抜かれた。

「——もういい」

別れるも何もはじまってさえない。

ベイゼルは苦虫を噛むような顔をし、がしがしと前髪をかきあげた。
「それで、お前は今日はどうするんだ？」

「町に出て皆さんにお金を貰ったお返しにお菓子を買って、自分の分も買って、それでたまには市とか覗いて、最後には実家に行つてこようかなって思ってます」

色気よりも断然食い気なルディエラだった。

それを眺め、ベイゼルは嘆息した。

「んじゃ行くか」

「ぼく娼館はつきあいませんよっ」

「ちげえよ。馬鹿みたいに皮財布ふくらませたお前を一人で放置できるか。阿呆——順番ははじめにお前の家だ。 unnecessary 分はおいて来い」

疲れたようなベイゼルの言葉に、けれどルディエラは顔を曇らせた。

ベイゼルはティナンの生家を知っているのだろうか？ という謎が浮かんだのだ。自分とティナンの兄妹——兄弟であることは内密になっている。もし、ベイゼルがティナンの、若しくは騎士団顧問のエリックの自宅を知っていたら面倒くさいことになってしまう。

本気で焦ったのだが——ベイゼルは勿論そんなことは百も承知だ。顔を曇らせているルディエラに、ベイゼルは上着に手を伸ばし

ながら何気ない風を装って声を掛ける。

「おまえん家つてどの辺り？」

「——ちよっと町の外れです。クレインの鍛冶屋のほう」

「へえ。あつちへ行つたことないな。鍛冶屋のところで待っていていいか？ 新しい剣でも鍛えてもらおうかな」

そうベイズルが言えば、途端に曇っていた表情が明るくなった。

「じゃ、早く行きましょう！」

「ああ、これとこれ下さい」

キリシュエータの私室の壁に飾られているナイフを指先でなぞっていたティナンが、ふいに言いながらソレを取り上げた。

「なんだ？ 自分のヤツはどうした」

細かい細工が施されたナイフは武器というよりもすでに芸術に近い。キリシュエータはそういったものを飾るのを好むが、物に執着は無い為に他の隊の隊長に持っていかれてしまうこともよくあることだった。

だが質素なものを好むティナンはわざわざ細工の施されているナイフなど使用しようとはしない。

今までキリシュエータのコレクションを持っていくことなど無かったのだ。

ティナンは手にしたナイフの重さを確かめるように手の中で弄びながら、にっこりと微笑んだ。

「一本は夜中に真っ黒い虫がいたので投げつけてしまいました」

「……」

「もう一本はあんまり腹がたったものだから、ヤツの寝ている枕に

突き刺してやりました」

汚らしいから回収するのモイヤです。
機嫌の良さそうな幼馴染は、二本のナイフを背中のベルトに差し込んだ。

鼻歌まで歌いだしそうなその様子に、思わずキリシュエータは心持下がってしまった眼鏡を中指でおしあげながら、
「私の印章入りのナイフでおかしなことをするなよ」と、一応忠告だけはしておいた。

「いやですよ、殿下。ナイフばかりじゃ芸がないじゃないですか」
どうやら次は違う手にしようとしている幼馴染の様子に、キリシュエータは肩をすくめて、

「一度ですませろ、一度で」
と嘆息したが、絶対に主人に向けてはいけないような馬鹿にしきった眼差しが返ってきてしまった。

「私の可愛いルディが感じた心の痛みを、恐怖をひしひしと体の隅々にまで叩きつけてやらねば気がおさまりませんね」

「……」

——いや、あいつもう忘れてるみたいだぞ。

たつぷり入った皮袋を揺らしてへらへらとしていた小娘を思い出して、キリシュエータは複雑な気持ちになった。

「まさかファーストキスとかでもあるまいに」

「当然です！ 赤ちゃんの頃から一杯してますからねっ。でも聞いて下さいよ、殿下っ、まだ舌は入れたことがないんですっ。どう思いますか？ 他の誰かにやられるくらいならばくが自分でしちゃったほうが安全な気がしませんか？」

「おまえはにんじんに近づくなっ」

「近づきたくても近づけないんですよ。さっきだって、お小遣い渡す時にめちゃくちゃ緊張しちゃいました。」

ああ、ルディ可愛い。なんであんなに可愛いんでしょうね」

——彼の副官はもう駄目かもしれません。

その2

「いいから、休め」

ぽんつと肩を叩いて溜息をついたのは第二隊副隊長サイモン・クロレル——そして肩を叩かれたのは、彼の部下の一人であるフィルド・バネットだった。

「最近のお前は疲れているんだ」

「……そんな訳ではありません」

「小さなミスが目立つ。いいから休め」

厳しく言うサイモンに、丁度通りかかった司祭長第二王子殿下リルシェイラは小首をかしげた。

わざわざ夜眠るときに幾つもの三つ編みを作って眠るというリルシェイラの髪は、王族特有の鮮やかな蜂蜜色の金髪、そしてしつかりと癖のついたウェーブのふわふわだ。

——女じゃあるまいに、阿呆か。

と、少なからずの人数が思っているのだが、誰一人としてそれを指摘した猛者は今のところ彼の弟であるキリシュエータしかない。

「しかし、休みなど……」

「フィード、じゃあお使い頼んでいい？」

突然の休みを渋るフィルドに、リルシェイラは「町におりてリラ・フィンデルの薔薇菓子を買ってきて」とコインを数枚フィルドの手に握らせた。

「明日のおやつにするから、明日までね」

「……はあ」

何故自分が菓子屋に行かなければいけないのか。

フィルドの心に冷たいものが走ったが、上官達の優しさをおとなしく受け入れることにした。

そつ、これは心遣いだ。余計な世話だとしても。

「フィードつてば最近呪われてるんだって？　なんか上からナイフだとか壺だとか降ってくるとか。枕にナイフが刺さってるとか」

「……壺は無いです」

今のところ上から落ちて来たのはナイフと、水と、斧だ。そして疲弊して眠っていたフィルドが目覚めると、目の前にナイフが刺さっていた。

自分が使っている枕にナイフがずっぷりと。

ざつと頭の中が真っ白になり、慌てて体を起こそうとしたものの反対側にもあるのではないかという恐怖から、体を起こすのに物凄く神経を使った。

もし寝ている時に寝返りを打っていたらと思うと血の気が完全に引いてしまった。

「エリックとの訓練で危うく肋骨折られそうになったって話も聞いたし」

「いや、それ以前に失神させられましたから——」

剣技でなくて良かった。

何故か機嫌のよくない騎士団顧問のエリックに思い切り投げ飛ばされ、背後から羽交い絞めにされて気付けば医療室だった。

骨折れてなくて良かったなと同僚に言われたが、折れていなかったのはただの奇跡に違いない。

「祈祷しておいてあげるよ。きっと呪いなんて吹き飛ばせるよ」

善意からではなく、明らかに他人の不幸を楽しんでいる様子のリ

ルシェイラに、フィルドは口の端をひくひくと痙攣させながら心にも無い礼を口にした。

「ありがたき幸せにございます」

――死ね、この脳内花畑。

何より、あの筋肉ダルマの騎士団顧問の機嫌が悪かったのは間が悪かったただけだ。だが、それ以外のことに関して言えば思い切り犯人に心当たりがある。

「っの、クソガキ！ とつつかまえてやる」

このところずっと脳内でひよこひよここと踊っている第三騎士隊の見習いを思い浮かべ、フィルドは半眼を伏せて右の拳を握り締めた。

「へぐしゅっ」

突然鼻がむずむずとうずき、ルディエラは思い切りくしゃみをした。

「つきったねーな。せめて口を塞げよ、阿呆」

「うつつ。鼻が突然むずむずしたんですよ。両手は塞がってるし……」

馬の手綱を握っていたルディエラは唇を尖らせて言いながら、ポケットからハンカチを取り出して口もとを拭った。

丁度目的地の近くに来ていた為に馬の速度を落としていて助かった。もし速歩の時に思い切りくしゃみをし、手綱を引いてしまっていたら臆病な馬は竿足立って嘶いていたことだろう。

今も馬はびくりと身を一旦固くし、耳をぴくぴくと動かしている。それを首筋を叩くようにして宥めて、ルディエラは肩をすくめた。

「あれか？」

隣で艶やかな葦毛を操るバイゼルは、顎先で丘の中腹にぽつりと立つ一軒家を示した。ルディエラはこくりとうなずき、小さく「あ……」とつぶやく。

その視界に、馴染みのものを見つけたのだ。

城下町のかなり外れの方にある鍛冶屋へと馬を速歩で駆けさせ半刻程——まるで訓練かというように並足、速歩を繰り返してやっと辿りついた鍛冶屋の丸太小屋の前で、ルディエラは馴染みの顔を二つ見つけることとなった。

建物の入り口の右手にある切り株に斧をつきたて、二人の男が談笑をしていたのだ。

楽しそうに笑い声をあげていた二人だが、馬で近づく二人組みの姿にその笑みをとめて視線を向けてくる。

やがて馬上の人物の一人が良く知る相手だと見て取ると、緊張した表情が変わった。

「ようつ、ルディエ——」

鍛冶屋で見習いをしているグレゴリーは薪割りの斧に寄りかかるようにして軽く手をあげて声を張り上げたのだが、その足を力いっぱい隣にいたセイムに蹴られた。

脛を遠慮なく蹴られたグレゴリーが呻いて身を沈める横で、セイムはわざとらしく口元に手を当てて声をあげる。

「ルディ様！ 若様こんな場所にどうしたんです？」
訓練ですか？

と、セイムが隣の悶絶男を完全無視で話しかけてくる。

ベイゼルはその男をしつかりと記憶していた。

時折ルディエラの元に荷物を届けに来るルディエラの家の下男。もしくは従僕——そして、ルディエラの幼馴染。

鳶色の瞳と髪青年は、下男というよりは女衛とかが似合いそうだ。優しい言葉で女を扱い、娼館で売り飛ばす。何故かそんなイメージがベイゼルの脳裏を掠めた。

「セムッ」

ルディエラは馬が完全に止まるより先に身を起こし、体重を移動させて片足を軸に鎧を蹴った。

ぎよっとするベイゼルの前で、当人が自慢するその身軽さでたんと地面に降り立つとそのままの勢いで女衛——ではなく下男に抱きついたのだ。

広げた腕でぎゅっと抱きしめ、元氣よく声をあげる様は屈託無いといえば屈託がないのだが、どうにもあけすけ過ぎる。

「ただいまっ」

「おかえりなさい。ちゃんとお風呂は入ってますか？ 汗臭いですよ。耳の後ろとか洗い残してたりしてませんか？ ブーツはきちんと風に当てないとまたひどいことになりますからね」

しかし、相手の口から出たのは小姑かという内容だった。

ぽんぽんと親しげに背中をたたきながら、ルディエラの幼馴染は矢継ぎ早に小うるさいことを口にし、ちらりとその人懐っこそうな——抜け目なさそうな視線をベイゼルへと向けた。

「確か、副長さんですよ？ うちのルディ様がお世話になってます」

ベイゼルはルディエラの放り出した馬の手綱と自分の馬の手綱を掴みつつ、口の端をあげた。

「本当にな。真面目に感謝してもらいたいわ」

「お前らああ、人のこと無視して会話すんな、タコ」

呻くような声をあげたグレゴリーに三人の視線が集まり、ルディエラとセიმはほぼ同時に「あれ、グレゴリーいたの？」とぼつさりと切った。

グレゴリーが顔を顰めるとルディエラは笑い、ベイゼルに視線を向けた。

「副長、コレは鍛冶屋見習いのグレゴリーです。グレゴリー、この人は王宮警護の騎士隊第三隊の副長さんをしている……あれ、副長ってベイゼルって名前？ 姓？」

ベイゼルはぱしんつとルディエラの頭をはたいた。

「ベイゼル・エージだ」

そのままグレゴリーに手を差し出し、軽く握手する。グレゴリーは愛想よくその手を受けてうなずいた。

「グレゴリー、副長に鍛冶屋の中を見せてあげて。ぼく一回家に戻るから」

「グレゴリー、話してあるよな？ うちの若様の上官だからくれぐれもおかしな粗相がないように」

セიმは念を押すように言い、慣れた様子でベイゼルの手からルディエラの馬の手綱を受け取り、

「前、後ろ？」

とルディエラに馬を顎で示した。

「前に決まってる」

「はいはい。じゃ、失礼します」

セიმはぺこりと頭を下げ、手馴れた様子で勢いをつけて馬上に

乗りあがると、片手を示してルディエラを自分の前に引っ張りあげた。

「――仲が宜しいこって」

我知らず冷たい口調になったことに気付き、ベイゼルは口の中に苦いものをつ込まれたような気持ちになった。

今のナシ。

今のナシ。

今の絶対にナシ！

突然喉の奥でうめき声をあげたベイゼルを見ながら、グレゴリーは目を白黒させて眉を潜めた。

「具合悪いんですかい？」

「――そういうことにしといてくれ」

そうだ。これはアレだ。

可愛がっているペットが、他の人間に尻尾を振るのが面白くない感情だ。

ベイゼルは丁度いい例えを発見し安堵するように息をつくと、訝し気に自分を見つめているグレゴリーの存在に小さく呻いた。

なんで残念な人を見るみたいに見てんだよ！

その3

ルディエラの自宅は町から少しばかり離れた森の中にぽつりと立てられた三階建ての邸宅だ。

兄弟達がもつと幼い頃は町の入り口の辺りに暮らしていたのだが、ある事情により人里を離れることとなった。

鶏並みに早起きの筋肉ダルマエリックが朝一番に大きな声で体操をしたり、子供達を相手に組み手、剣術とはた迷惑な日々を繰り広げた為——つまるところ近所迷惑が主な理由だ。

森を入り、しばらく行くとある湖畔の近くに開けたなだらかな場所に立つ一軒屋。上級貴族の屋敷のように恐ろしい程立派という訳では無いが親子七人とマーティア、セイム、そして年老いたアダンとが暮らすには十分な大きさを持っている。母屋、離れ、馬屋という三つの建物で構成されている家への一本道を馬で駆けて戻れば、玄関口から質素なシャツとエプロンをつけたマーティアがうれしそうに大きく手を振って出迎えた。

「ルディ様！」

「マーティアっ、ただいまっ」

大きな声で応えたルディエラだったが、マーティアは苦笑を浮かべてぺこりと頭を下げた。

「おつとめご苦労様でした」

「なんか微妙におかしい、その台詞？」

まるで監獄からでも出てきたかのような気持ちになったルディエラが口を尖らせると、マーティアが小首をかしげて見せる。

マーティアの面前でセイムは慣れた所作で馬の尻に片手をついて地面におりたつと、ルディエラの為に馬の轡へと手を掛けた。

「まさか、もう逃げ帰って来た訳ではありませんわよね？」

につこりと微笑むマーティアに顔をしかめ、ルディエラは地面に
おりたち肩をすくめた。

「違うよ。今日はお休み——昨日がお給料日で、見習いは本当はお
手当てもらえないんだけど、隊の人たちからお小遣いを貰ったから
持ってきたの。ま、クイン兄さまはいないだろうけど」

マーティア預かってくれる？

そう言葉を続けると、マーティアは苦笑した。

「ああ、それですね」

「うん、それで帰ってきたの」

口元に手を当てたマーティアは、ちらりと弟を見てまったくすくす
と笑う。

「いいえ、わたしがそれと言いましたのは、クインザム様がいら
してるからですわ。ルディ様がお顔を出されると予想していました
のね」

その一言に、ルディエラは思わず口の中で「うげっ」と呻いてし
まった。呻いた理由を察知したセイムが先をよんで笑ってみせる。
「安心して下さい。クインザム様はルディ様が騎士団にいらっしや
るのはご理解くださってますよ。もしかして怒ってらっしやと思
ってたんですか？ あの方が許さずにそれができると思いますか？」

「……ま、父様も知ってるしね」

ぼそりといい、ルディエラは弾かれたように顔をあげた。

「まさか皆知ってる？ ちい兄とか、バゼル兄さんとか？」

「バゼル様はご存知じゃないですよ。ルーク様は……どうでしょう
？ こちらからは誰も言っていないと思いますけど」

その言葉に安心しつつ、ルディエラは馬をセイムに任せてさっさ

と自宅の玄関をくぐった。

すうっと、自宅の空気を一気に肺に入れるとなんとなく泣きたいような気持ちになる。一月以上あけたことなど無かった自宅。そこらかしこに自分の記憶が落ちているような奇妙なものがこみ上げて、ルディエラは一気に廊下を駆け抜け、執務室兼図書室である部屋の扉を勢いよく開けば、本棚に向かい本を空いている場に納めていたクインザムはゆっくりと振り返って微笑んだ。

「廊下を走ってはいけないといつも言っているだろう」

「もあつ、久しぶりに顔をあわせた一言めがそれなの？」

不満に唇を尖らせたルディエラに、クインザムは淡々と手にある本を片付け、それが終わると両手を広げた。

「おいで」

「――」

すねた顔で突っ立ったままのルディエラに、クインザムが唇の端を持ち上げる。そんな顔を見るとクインザムはティナンによく似ていて、ルディエラは途端に眦に涙が盛り上がり、喉から競りあがるものに小さな嗚咽を漏らした。

親でも兄でもない。ティナンはそう言った。

――でもそれは、それは……

「兄、さまっ」

「うん？」

「ぼく、ぼくさあ――がんばってるよ」

「判っているよ」

「ぼく、ぼく……」

今は、ルディエラでいいよね？

小さく呟いた途端、ルディエラはクインザムに抱きつき、その胸に

顔をうずめて叫ぶように泣いた。

「申し訳ありません。午前中の分はもう売り切れです」

「――」

三十分近く女子供に混じって恥ずかしげもなく並ばされた挙句、
面前で売り切れを宣言されたフィルド・バネットは口元を引きつか
せた。

絶対にありえないことと思いつつも、コレもあの糞ガキ――ルデ
イ・アイギルの陰謀ではないかと思つた程だ。

当人が聞いたなら「ふざけるな」と怒鳴られるだろうが、半ば本気
でフィルドはその怒りすらルディエラに投げつけた。

毎日のように夢の中に現れ、飄々と踊りながら自分を馬鹿にしてい
るルディ・アイギル。もう幾度自分の脳内でぎったんぎったんに叩
きのめしてやったことだろう。時折自分の考えが夢であるのか現実
であるのか判らなくなってしまう程だ。

「本当に申し訳ありません。午後にまた販売いたしますからその時
にいらして下さい」

「予約は？」

声音をおさえて言えば、店員は困惑の眼差しを向けてくる。

「申し訳ありません。人気商品ですので」

予約は受け付けていないのだと暗に言われ、フィルドは「第二王
子殿下が御所望なのだ」と怒鳴ってしまいそうになった。

そんなことを言つてリルシェイラの名声を落とす訳にはいかない。
何より、現在のフィルドの格好ときたら騎士隊の制服ではなく、私
服だ。

先ほど散髪をすませた短い黒髪をかきあげ、嘆息を一つして「判

った。何時ごろに来ればいい？」と店の人間に確認を済ませた。
身分を証明する為の騎士団印の指輪は身につけているが、そんなものを恥ずかしげもなく出せるはずも無い。

——何より、出したあげくに「で？」などと言われたら目も当てられない。

世の中には誰にも屈することの無い一般人、居酒屋「アビオンの絶叫」の店主のような男もいる。噂によれば、店主であるドラッケン・ファウブロウは第三王子殿下であろうともツケを認めない。

あつさりと午後にまた菓子屋に来店することを決め、フィルドはその足で城下町のはずれにある鍛冶屋へと足を向けることにしたが、それは間違いだった。

騎士団顧問のエリックが使っているという噂のある鍛冶屋は、町からは幾分離れているが、馬で飛ばして行って帰ってすれば丁度良い頃に菓子屋に戻るができるだろうという軽い気持ちで足を伸ばしたのだ。

たまには思い切り愛馬を駆けさせたいと一気にムチをいれて街道を駆け抜け、人の噂をたよりに訪れた開けた丘の上の一軒屋。

「あ、こんにちはー」

鍛冶屋の小屋の入り口、馬の手綱を結わえようと木の枝に綱を引っ掛けていると、決して忘れることなどできないオレンジ頭の糞ガキが反対側から手を伸ばし、まるで邪気もなく微笑んだ。

「――」

「ぼくも馬を繋ぎたいんだけど、あの、あれ？　ぼくの顔に何かついてます？」

毎日夢にまで見る相手だ。

不用意なその一言で男好きだとかいう汚名まで着せられ、第二隊の副長と隊長にまで苦言を向けられ、第三王子殿下キリシュエータにまでおかしなことを言われる始末。日々憎しみを募らせている相手だ。決して間違ったりしない。

フィルドは口の端がひくひくと痙攣するのを感じた。

「あれ？　もしかして、どこかで会ったことがあります？」

まさか本気で言っている訳じゃないだろうな？

フィルドは啞然と少しだけ目元を赤くした、一見無邪気なルディ・アイギルを見下ろしてしまった。

これもこいつの罠か！？

——……いいえ、ただの阿呆な子です。

その4

ぴしりと何かにヒビが入る音を確かに聞いた。

面前には自分が嫌っている——というか、もうむしる憎んでいる相手だ。

その日に当たってきらきらと輝くオレンジ色の髪も、灰青の瞳も、決して見誤ったりしない自信がある。

夢の中にさえ現れ、それはそれは小生意気な調子で小躍りし、噂話が偶然にも耳はいれば憎しみて体温が力つとあがる程の相手だ。

「んー？」

だというのに、その問題の糞ガキ、ルディ・アイギルは本当に不思議そうに自分を見上げ、やがてぎゅっと眉間に皺を寄せていたが、相当苦勞して理解したというようにばんっと手を打った。

「第二隊の変態」

「誰がだっ！」

わざとか？ わざとだろう？

思い切りその襟首を締め上げてやろうと手を伸ばすと、小生意気なサルはひょいっと身を交わして剣呑な眼差しで睨みつけてきた。

灰青の色素の薄かった瞳がその色合いを濃くし、まるで悪戯でもするかのように鼻先で笑う。

腹立たしいことに面前で見る糞ガキときたら、記憶を更に塗り替える程の美少年で腹立たしい。聖歌隊で女のような高音で歌っていると殴りたい程だ。

「何するんですか。またおかしいことするつもりですか？」

「誰がキスなんてするか？」

「誰がキスなんて言っただけですか。そんなことばっか考えてるんですか？ あー、やだやだ変態っ」

ぶ・ち・殺す！

思わずフィルドは自分の腰に手を回し、そこにある筈の細剣を求めたが、勤務外でそんなものを引き抜いたら問題になると頭の中の冷静な部分が訴える。

いやしかし、こんな辺鄙な場で何があるかと証拠など——とまで考えはじめてしまったフィルドの耳に、暢気そうな「うるせーぞお」という声が割って入り、慌てて視線を向ければ第三隊の副長——ベイズル・エージが件の鍛冶屋から顔を出し、片眉を跳ね上げた。

ちつと我知らず舌打ちが漏れた。

品行方正と言われる第二隊としては激しくまずい。だが、このルディ・アイギルを面前にして冷静にしてなどいられない。

目撃者がいては報復活動に支障がある。いや、しかしいつそ思い切って証人になってもらっても構わない。

フィルドがそう思っているのに反し、しげしげとベイズルはフィルドを眺め、ニヤリと口の端をあげた。

「お前か、フォード・バネット」

「フィルド・バネットです」

こいつらは人をおちよくっているんじゃないだろうな？

フィルドがぐつと拳を握り締めるのとは正反対に、ベイズルはのんびりとした様子で近づいてニヤニヤと笑ってみせる。

「何を揉めてるかと思えば、またお前らか。今度は何よ？」

はつきりと面白がっているベイゼルに何か言ってやろうと口を開きかけたが、それより先にオレンジ頭がひよこりと動いた。

「どうでもいいですよ。副長、鍛冶屋はもういいんですか？ いいんならさっさと町に戻りましょうよ。ぼく皆のお土産買わないと。とっておきのお店があるんですよ」

ルディエラはふんつと鼻を鳴らし、自分の馬の手綱を引き、その視線を鍛冶屋の入り口でのんびりとこちらの様子を伺っている男に声をかけた。

「副長の馬とつてきてよ、グレゴリー」

「おう——そっちの人はお客さんかな？ 中にどうぞ。そいつの相手してつと色々疲れますぜ」

さも愉快そうに肩を揺らし、馬屋へと向かう男に気を取られていると、ベイゼルがフィルドの肩をぽんぽんと親しげにたたいた。

「グレゴリーの言う通りだ。このぼけなすに付き合っていていいことなんて無いぞ？ イノシシに当て逃げされたとも思ってた忘れるよ」

「ちよつ、何ですかそれ。ぼくが加害者みたいにつ」

唇を尖らせるルディを睨みつけ、フィルドはそれでも冷静さを装った。

「すみませんが、アイギルと少し話したいんですが」

少なくとも、闇討ちのような真似についてはきつちりと話をつけない訳にはいかない。それでも文句があるのであれば正々堂々と決闘なりなんなりで決着をつけるべきだ。

きつい眼差しで言うフィルドの前で、ベイゼルは自分の黒髪をか

きあげ、好戦的な顔をしているルディエラと、そして無理やり冷静さを装うフィルドとを見比べて肩をすくめた。

「だめだ」

「エージ副長」

「あのな、さっきも言ったようにイノシシにでも当て逃げされたと思っただけだ」

やられっぱなしでなどいられる訳がないっ。

憤りを見せるフィルドに、ベイゼルは腹に溜まった酸素を一気に吐き出すように深く、ふかーく吐き出し、指先をちよいちよいと動かしてルディエラに命じた。

「アイギル、お前が馬とってこい」

「えーっ」

「行け。行つて来い。ほらっ」

しっしつと犬でも追い払うように手を振り、ベイゼルは更に溜息を一つ落としてルディエラがしぶしぶ鍛冶屋の裏手に行くのを見送り、がしりとフィルドの肩に手を回して顔を近づけた。

「あのな、あいつはもうお前のことなんてちいっとも気に掛けて無かったんだよ。あいつの中じゃ終わってるんだ。ちよっかい出すな」
「そんなの信じられると思いますか？ 私がこの数日どんな目にあっているかっ」

おかげで立派な睡眠不足。

仕事中に小さなミスまで連発させてしまい、挙句こうして無理やり休暇をとらされてリルシェイラの為の菓子など買いに行かされる始末。

あれもこれも、昨日が雨だったことも、今日が晴天であることも

全てあの糞ガキのせいだ。

フィルドの中ではすっかり悪といえばルディ・アイギルの方程式が
できあがっていた。

「あー、それなー……予想はつくんだが」

なんかナイフが降ってきたとかって話だよな？

剣呑な雰囲気をもっているフィルドの肩にぐいっともたれるように
にして、ベイゼルは肩をすくめて、はははっと乾いた笑いを落とす
て更に嘆息した。

「誓って言うが、あいつじゃない」

「じゃあ誰がそんな真似をすると言っんですか」

ベイゼルはがりがりと自分の頭を引っかき、逡巡しながら呻いた。

「……誰かは詳しくいえない。というか言いたくない」

自分の隊の隊長だとは口が裂けても言えない。
情けなくて。

「とにかく、あー……ある人物がな、めちゃくちゃアレを溺愛して
るんだよ」

「は？」

「だから——あのボケを、めちゃくちゃ可愛がってる人間がいてだ
な、うん。つまり、お前は口止めだか何か知らんがあいつにキスし
ちまった訳だろ？」

めっちゃ怒ってるんだよ、これが。

ベイゼルは自分で言いながら嫌気が差した様子で、がしがしと自分
の頭をかき混ぜ、だあっと叫び、フィルドから身を引き離すとその
指でフィルドの胸をついた。

「俺からももうそんな真似はするなって言ってやるから。とにかく、
もう忘れなさいよ」

「そんな訳にい——まさか、殿下が？」

バイゼルが口を濁す相手、しかも問題の日に居酒屋【アビオンの絶叫】で事を収めたのはキシシュエータであることを思い出し、フィールドはすつと青ざめた。

しかも、キシシュエータはあの時「闇討ちにあつても知らぬフリをするからな」とまで言っていた。まさか第三王子殿下が男好きの上に妙な嫉妬心をおこして？ めまぐるしく恐ろしい考えがフィールドの脳裏を駆け巡ったが、それに気付いたバイゼルは慌てて打ち消した。

「ちげえよ？ おい？ まったく全然違うからな？ おま、いくらなんでもそれは不敬罪で偉いことになるぞ？」

「……いや、はい。そうですね」

さすがに恐ろしすぎる考えを否定され、フィールドは思わず胸元に手を当てて息をついた。

自分の主であるリルシェイラもはつきり言っておかしな相手だが、その弟殿下がアレな趣味の持ち主などとイヤ過ぎる。

「とにかく。アレに関わるとろくなことになるから。お前の矜持とか色々と思うところもあるだろうが、ここは俺に免じてこの間のことは水に流してくれよ。その、ナイフだとかのヤツもなんとかするからさ」

苦々しい顔で言うバイゼルの様子に、フィールドは奥歯を噛み締め不承不承うなずいた。

他隊の副隊長にそこまで言われては流石に拳を下ろさずにはいられない。

腹の底で色々思うことがあつたとしても、だ。

「で、だ。あれはガキで馬鹿だから俺がお前に謝れと言ったところ

で意固地になるだけだ。悪いが、お前から歩みよってもらえるか？」

「……無理です」

何故自分がそこまで我慢しなければいけないのか納得できない。

「かあああつ」

ベイゼルは奇妙な声をあげ、フィルドの胸に指を突きつけた。

「俺は、わりと面倒くさがりだ。他人なんざどうでもいい——その俺が、お前の為を思って言ってるんだ。ここは素直に受ける」

その台詞のどこを信じるといふのか。

明らかに可愛がっている部下の為だろうに。まさか、あの糞ガキを溺愛している阿呆野郎はおまえではないだろうな。

と、フィルドは思わず下衆な勘ぐりまでしてしまったが、ベイゼル・エージの女好きは有名だった。

ことに女性らしい女性ということで、警備隊の事務官に言い寄っているというのも知っている。

苦痛を堪えるように奥歯を噛み締め、フィルドは不承不承うなずいた。

「副長！ 早く町に戻らないとっ」

ベイゼルの馬を引いて戻ったルディエラに、ベイゼルはフィルドの肩を親しげに叩きながら応じた。

「おうっ。悪いな——それと、フォードがお前に話があるってよ」

フィルドだ。人の名前を間違えるんじゃない。

内心で苛立ちを抱えながら、フィルドはルディエラを見下ろした。にんじんのような色合いの髪に、灰青の瞳が今は太陽の光をうけて透明な色合いを浮かべている。

まさに胡散臭そうなものを見るように。

屈辱を覚えたが、ぐっと堪えて手を差し出した。

「悪かった——」

何に對しての謝罪かは言わなかった。言う必要もないだろう。むしろその後の騒動を引き起こしたこいつにこそ謝って欲しいというのに。

何故こんなことになるのか。

フィルドの内心など知らぬ氣に、ルディエラは瞳を瞬いた。

また何か嫌味が来るかと思つたが、小生意氣な糞餓鬼は驚く程やわな手でぎゅっとフィルドの手を握り返し、子供のようになつて無邪氣に笑つた。

警戒心をふわりと解いて、男と理解していても一瞬どきりとさせられる愛らしい笑み。

「ぼくもなんか色々とおトナゲなかつたです。ごめんなさい」

なんだろう、そういわれるとこちらがそれを更に上回る程に物凄く大人氣ない氣がするのは。

激しくイラツとさせられる台詞のように思つのは氣のせいかな。いや、氣のせいではないだろう。その証拠のように、無理やり親しげな雰囲気を出す為にフィルドの肩に手を掛けていたベイゼルが、慌てたようにルディエラの肩に手を回してくるりとその向きを変えた。

「アイギルつ、急いで町に戻らないといけないんだよね？ 特別な土産とやらを買つんだろ？」

ほら行くぞつ。じゃあなフォード」

そそくさと逃げるようにまたしても名前を言い間違えるベイゼル。副長つてば、フィルドさんですよ」

きつちりとベイゼルに訂正を入れ、ルディエラはぺこりとフィルドに一旦頭をさげて自らの馬の手綱を引いた。

ルディ・アイギルはやけに晴れ晴れとしているが……――

和解か……今のは和解なのだろうか。

納得のいかないシコリを残したが、それでも自分をなんとか誤魔化そうと思ったフィールドだったが――

町に戻ると決して誤魔化せない現実だけが残った。

「売り切れです」

「……」

「申し訳ありません。大口のお客様がいらっしやいまして――午後の分は思いのほか早く売り切れてしまいました。またのお越しをお待ちしております」

リルシェイラに頼まれたリラ・ファンデルの薔薇菓子を買い占めたのがルディ・アイギルだと知るのは、一刻後のことである。

その1

「兄さま、大好きっ」

彼の妹、ルディエラの「大好き」は一山幾らで売られている激安販売だ。

二束三文という言葉を使ってもいいくらいに安すぎて、誰にでも垂れ流し。

それでもあの大きな灰青の透明な瞳をきらきらとさせて「兄さま大好き」と嬉しそうに言われると、世界で一番すばらしい「大好き」を与えられたような気になる。

男四人兄弟の中に突然できた妹は、はじめから誰からも愛された訳では無い。

末のルークなどは色々と思うところもあつたろう。それまで末子として可愛がられていた自分の地位を脅かし、母の愛情をまた削られたと思つたかもしれない。それとも母親のちよつとおかしな愛情が少しは離れるやもと喜んだか。元々ルークは感情の動きが弱いのであまり判らない。

三男であるティナンにしてみれば、敬愛する長兄が突然子煩悩な父親のようになったのだから、正直面食らつたものだし、そんなある意味情けない兄——父の変わりに執務をこなすその膝の上に赤ん坊をのせ、仕事の合間にむつきを変えろという暴挙——を見るのは嫌なものだった。

その、ある意味目の上のたんこぶのような妹がいつの間にか言葉を操り、舌足らずに「にーちゃ……にー、たま？」と見上げて来た時、ティナンは自分の中で何かがぞわぞわと蠢くのを感じた。それは心地の良いものではなくて、なんだか体の内面から痒いような奇

妙なものだ。

不快であつたかもしれないが、足元にいるソレにとりあえず手を伸ばしてみようとしたら、長兄がひょいっと持ち上げた。

「お兄ちゃんの勉強の邪魔はしてはいけないよ、ルディ」

「くいん、なーして」

舌足らずの甲高い声が放してと訴える。

「だあめ。いい子にしておいで」

小さな妹はじたばたと暴れ、その手を伸ばしてティナンにせがんだ。

大きな灰青の瞳を潤ませて。

「にーたま、たーけて」

咄嗟に「兄さん、少しの間くらいぼくがみてあげるよ」と喉の奥でからむような言葉を出し、兄の手からルディエラを奪えば、小さな小さな妹は、目じりに涙粒を湛えてはじめて満面の笑みで言った。

「にーたま、だーすきっ」

その言葉はティナンの中に何かを産み落とす程にすばらしいものだったというのに――気付けばルディエラの「大好き」は激安品となっていた。

「ぼく副長大好きですよー」

食堂で暢気に言うルディエラの言葉に、バイゼルが「うっせーよ」と言っていたのは昨日のことだ。

通りすがりにバイゼルの足を踏みつけにやってたのはいうまでもない。

今更ルディエラの激安販売ごときで腹をたてたりはしないが、それに対して「うっせーよ」などとは無礼千万。許しがたし。

二束三文でも何でもいい。
ルディエラに「大好き」と言われて、ぎゅっと抱きつかれたい。癒し成分が欠乏している。

「……これでは欲求不満みたいじゃないか」

純粹な兄妹愛によしまなものはありません——というティナンの訴えを、最近第三王子殿下キリシュエータは信じてくれない。

世話をしてくれる従卒が起床時刻を告げに来るまでもなく、ティナンは隊舎にある一人部屋で身支度を済ませ、紅茶を持参した従卒に穏やかな微笑で応えた。

「おはようございます」

「おはよう」

自らの指揮する第三隊の人間には鬼隊長として知られているが、ティナンは従卒や女性には人気が高く、貴婦人達の間ではその身分は低くとも有望な婿として目されていた。なんといっても貴族の子弟という訳ではないが、第三王子殿下キリシュエータの良き友人であり右腕——やがては騎士以外の序爵も目されていた為だ。

「お手紙が届いております」

従卒は恭しく銀のトレイに手紙を載せて示し、ティナンはそれを受け取ると彼にもう下がるようにと告げた。

手紙は六通。決して少なくともないが、多いという訳でもない。たいていが何かの催しものの招待であったり、時には地方砦からの報告であることもある。

一通づつ封筒を確かめ、ティナンは二通目の手紙に押された蠟封の印章に低く呻き、そそくさとそれを後に回した。

一通目は第二隊の隊長からの第二王子殿下リルシエイラの外遊の為に相談したいことがあるという打診。二通目は古い友人からの私信。他の手紙も当たり障りも無くそんな調子のものだ。

そして、最後に回した手紙は――彼の敬愛すべき長兄からのものだった。

「……」

イヤな予感しかない。

咄嗟に火にくべてしまいたいような衝動にかられるが、ここで燃やしてしまえば無かったことになったりせずに、延々と手紙を送りつけられそうな気がする。実際に手紙を燃やして隠滅させたこともなく、兄がしつこく手紙を送り続けた事実も無いのだが、なんとなく長兄ならばネチネチといつまでもそんなことをする気がするから不思議だ。

「兄さん性格悪いから」

ぼそりと自分のことは棚上げに言い、ティナンは不承不承着用している騎士服の腕部分に隠されている刃渡りの短いナイフを引き出し、蠟封をぺしりとはがした。

ふわりと花の香りが鼻腔をくすぐる。なんというか長兄は芸が細かい。

ティナンは胃の辺りが傷む気がしながら、中から手紙を引き出した。

「では、第一隊から三名。第二隊から三分の二の人数を出して外遊

の警備に」

第二王子殿下の外遊——隣国に出向いて季節の挨拶をするという、まさにただの儀礼的なその行事の為に人数を選別しながら、ティナンは第三隊と第二隊の人間がただひたすら馬柵の中を走っている様子を窓から眺めた。

本日は第二隊と第三隊の合同訓練だが、命令自体は単純なものだ。

——倒れるまで走れ。

他隊の人間に負けたら追加訓練。

「残りの隊員はその間第三隊で面倒を見ますよ」

「頼むよ」

第二隊の隊長であるアラスターが息をつくとき、ティナンは淡い微笑を浮かべた。

「そうだ。フィルド・バネットは連れて行くつもりですか？」

「ああ——あいつはそっちと揉めたからな。残して行くつもりは……」

残して行くつもりは無いと書類を軽く叩いたが、ティナンはあえてそれをさえぎった。

「彼は残して行って下さい。いつまでもおかしい火種を残している訳にはいかない。来月には問題のアイギルもそちらの世話になることは報告がいつておりますよね？ この間にしこりはなくしてしまった方がいいでしょう」

につこりと微笑を浮かべるティナンに、アラスターは大きくうなずいた。

「確かにその通りだ。第三隊には迷惑を掛けるが、ではフィルドともどもよろしく頼む」

相手の眼差しは「若いのにしっかりとしている」とティナンを穏やかに賞賛しているが、当然のようにティナンの心内ときたら称賛されるようなことは考えていなかった。

——自分の監督下でまさにやりたい放題。

今までのようにこつそり水をぶちかれるとか、通りすがりにナイフを投げつけるとかいじましくらいせせこましい嫌がらせではない。正々堂々と卑怯な手段を講じて愛しい妹を辱めてくれたお礼を思う存分できるのだ。

たとえ何があつたとしても「訓練が少しいきすぎた」だけだ。今までも訓練中に足や腕を折ってしまつたり、内臓がちよつぴり傷ついていたという不慮の事故があつたものだが、それと何等かわらない。

ティナンは口元が緩みそうになるのを堪えつつ、相手からの職務上の相談事を適当な相槌でいなした。

もしかしたら流れ弾に当たってしまったたり、馬の後ろ足で蹴られてしまうこともあるかもしれないが、訓練上の不慮の事故であれば想定外で仕方あるまい。むしろ訓練中であれば労災くらいもぎ取ってやってもいい。

自分はなんと優しいことだろう。

「そういえば、来月うちの隊に来るといふ見習いの状態はどうだ？ フィルドと揉めたのがそれなんだよな？」

ふいに話題をかえられ、ティナンは一拍息をつめ、ふっと皮肉な笑みを浮かべてみせた。

「殿下の酔狂にも困つたものです。騎士にするなどおこがましい——訓練の邪魔ですよ」

「そうなのか？」

アラスターが眉を跳ね上げ、肩をすくめる。

そのまま眼差しを窓の外へと向け、馬柵の中を走っている自らの部下達を眺めた。

「とにかく。ぼくはこんなこと自体反対なんですよ」

「噂通りだな」

くくつと喉の奥を鳴らし、相手は楽しそうにティナンを見返した。
「噂？」

「第三隊の隊長殿は、異例の人事で入隊した騎士見習いをこのほか毛嫌いして虐め倒しているって言われているぞ。あまりいい話じゃないな」

その言葉の中に咎める響きを感じ取り、ティナンは冷やかな眼差しを向けた。

「客観的に見ても今回のお遊びにはうんざりとしているだけです」

「私は正当な目でもって相手を評価するつもりだ。突然の人事だとかは関係が無い。キリシユエータ殿下がおっしゃる通り、訓練への参加状態、態度、適正。全てでもって判断を下す」

きっぱりと言い切り、その眼差しは馬柵の中、一定の速度できつちりと走りこんでいるオレンジ頭を眺めた。

「第三隊騎士団隊長——できれば、失望させないで欲しい」

その真摯な言葉に、ティナンは唇を引き結んだ。

「——アイギルを知れば、あなたもぼくと同じ決断を下すでしょう」

淡々と告げるティナンを、片眉を跳ね上げて眺めたアラスターはこつそりと苦笑し、第三隊の生真面目な隊長殿がそこまで突っぱねる理由は何なのだろうかと思いを馳せたが、

——あんなに可愛いぼくのルディを軍属なんて絶対にイヤだ！

程度しかその男の頭の中には入っていないので、実際は考えるだけ無駄だった。

その2

——倒れるまで走れ。

他隊の人間に負けたら追加訓練。

そう命じつけられた第三騎士団の面子には余裕があった。

「なんだよお、今日走るヤツは羨ましいぜ。俺なんか審判役で走らないからな。もったいねえ。言うまでもなくケツは確定してるのになっ」

と、ベイゼルはにまにまといやな笑いを浮かべ、周りの隊員達と目を見合わせあう。見習い隊員ルディエラは「そうなんですか?」と首をかしげ、ついでその意味を理解すると逆上した。

「馬鹿にしないで下さい! ぼくだって少しは体力ついたし、そうそうビリになったりしませんからね!」

こうなつては自分の隊の人間は決して信用できない。

ルディエラはやけに余裕をかましている第三隊の人間達を見返すべく、以前のようにペース配分も視野に入れて馬柵で囲われている、本来であれば馬を走らせる為のトラック内を一人黙々と走っていた。

「副長二人は走らないのか?」

通りかかったキリシュエータが審判役としてスタート地点で立っている二人に声を掛けると、ベイゼルは肩をすくめ、第二隊の副長であるクロレルは苦笑した。

「片方は走ろうとしたんですけど——腕相撲で決めた審判役がエージに決まった途端、第三隊の見習いが意義を申し立てまして」

「俺は信用できないそうっすよ」

「ということで、二人で審判です」

肩をすくめる相手に、キリシュエータは顔をしかめた。

「それで、今のところはどうなってる？」

「均衡を保っていますが、この先どうなるか」

隊員達も馬鹿ではない。倒れるまで走れなどといわれたところで、正直にぶつ倒れるまで走り続けることはしない。周りを見てどれだけ走らずにいられるかを考え抜く——悪く言えば、どれだけ手を抜きつつ、決して最後にはならないようにする訓練と化していた。

バイゼルは馬柵にぎしりと体をもたれさせ、にまにまと口元をゆがめた。

「あとは、頭脳戦スよ」

ティナンは書記官が作成した書類を丁寧に検分し、サインをし、滲まないように吸い取り紙で抑えると、微笑んだ。

「では、こちらの書類はキシユエータ殿下の執務官に届けておいて下さい」

「かしこまりました」

従卒の世話係が勢いよく応えて礼をとり出て行くのを眺め、窓辺で第二隊と第三隊の合同訓練を眺めているアラスターに声を掛けた。
「どうです？」

「少しづつ動きが出だしたな。良くも悪くもおまえのところの見習いがペースメーカーになっている」

どちらかと言えば褒めるような口調の言葉に、ティナンは半眼を伏せた。

「あの子は、第三隊よりうちのほうがよさそうだ」

「どういう意味です？」

アラスターは腕を組み、窓枠に寄りかかるようにしてクッと喉の

奥を鳴らした。その眼差しが面白がるように細まり、目じりに小じわが刻まれる。ティナンより十程も年齢の高いアラスターは、まるで息子でも見るような眼差しでティナンを見るから、ティナンは居心地の悪さに身じろぎした。

「あの子はアレで根が真面目過ぎるんじゃないか？ 言われたことをそのままにやろうという姿勢があるんじゃないか？ どうしてアレをベイゼルの下につけた？ むしろおまえ自身が面倒を見るべきだったろうに」

アラスターの疑問に、ティナンは冷笑を返した。

「確かに、ぼくは間違えました。ルディ・アイギルの面倒はぼくがみるべきだった」

「そ——」

「そうすれば、今頃は尻尾を巻いて実家に帰っていたろうに」
嫌悪するかのような口調で言い、ティナンは冷笑を湛えた。

ルディエラは騎士団員としての能力は決して高くない。とりえといえば身軽さと真面目さ。訓練を怠けたりはせずに実直過ぎるほどに他の隊員達に喰らいついていく。毎日毎日あきれる程にぼろぼろになって、それを見続けるのはティナンにとって相当きつい。

「アラスター」

絶句しつつティナンを見ていた第二隊隊長に、ティナンは真摯な眼差しを向けた。

「あなたにも、ルディ・アイギルの騎士団本入隊を拒否してもらいたい」

それは保険。

キリシュエータは三ヶ月見習いとして過ごした後、騎士隊長の全員の了解を得て騎士に序すると言っていたが、あの時と今とでは少しばかり違っている。

——自分が反対したとして、他の隊長が許可したということでは隊に配属させると言い出さないとに限らない。

「騎士団第三隊騎士団長！ おまえは自分が何を言っているのか判っているのか？」

窓枠に預けていたからだを起こし、体に怒りすら滲ませたアラスタ―は珍しく声を荒げた。

「隊長としての資質に関わるぞ」

「どうとでも。何度でも言いましょう——ルディ・アイギルは騎士団に入隊させる訳にはいきません」

ティナンはふつとその冷たい表情に陰りを浮かべ、相手の激昂を流すように視線を伏せた。

吐息とともに口が開き、閉ざされる。

幾度かの迷いを見せて、ティナンはそれまでのきつい眼差しではなく、迷い子のような切なげな眼差しを憤りを見せているアラスタ―へと向けた。

——兄でも妹でもないと言ったのは自分だ。

ここで妹なのだと告白することはできかねて、ティナンは振り払うようにその瞳に力を込めた。

「アラスタ―。ここでこう言うのは卑怯かもしれませんが——以前、貴方はぼくに言っただけでしたね。父エリックに命を救われたことがあると。息子であるぼくに困ったことがあれば何でも言えと」

「ティナン、それを盾にこの私に信念を曲げるとか言うつもりか？」
更に怒りを膨らませる相手に、ティナンはゆっくりと首を振った。

「賭けをしましょう。」

ルディ・アイギルが貴方の隊員に勝てるようであれば、あなたは貴方の信念のままにあの子を貴方の天秤に掛けるといい。騎士団に残すも、弾くも貴方の意思で」

ティナンはその視線を窓の外——第二隊と第三隊の人間が走り続けている馬柵へと向けた。

「ですが、もし貴方の隊員に負けるようであれば、もともとが足手まといでしかないのだから。

騎士団には不要だと思いませんか？」

「おめえらちゃんと水は飲めよっ」

と、ベイゼルが口元に手を当てて時折怒鳴っている。

前方の方、柵にぶらさげた皮の水袋をちらりと眺め、ルディエラは自分が何週走ったか考え、苛々を募らせた。

確実に他の隊員が自分よりも一周多く、もしくは一周少なく走っているのを感じる。虎視眈々とルディエラの速度や様子を考え、できるだけ楽をしようという魂胆が丸見えだ。このままではいけない。そして絶対にこのまま馬鹿にされたまま終わらない。

ルディエラは皮袋の手前からゆっくりと速度を落とし、皮袋の前で足踏みをして極力ゆっくりとした速度で水を口に含んだ。

皮の味のする生ぬるい水は決して美味くはない筈だが、疲れた体には存分に染み渡る。ルディエラはシャツをたくし上げ、自分の手首の辺りをぺろりと舐めた。

——塩気が舌先を刺激する。

水分補給と塩分補給は必須だ。

自分の体から精製された塩……どんな時でも生き残る精神を教えてください。くれたのは父エリックだが、エリックが自分の腕を舐めているのを想像すると、父大好きなルディエラでもちよっぴり微妙だ。

「せんぱーい、水飲んだほうがいいですよ」

そしてルディエラは自分の脇をにやにやと通り過ぎようとする男達

を片っ端から引つつかみ、そのペースを乱して水袋を押し付けた。
「うわっ」

と声をあげて多々良を踏む男につこりと水袋を差し出し「はいっ」と微笑んで見せる。

そうしている時も自分の足はしっかりと足踏みをし、一定のペースを保っているが、相手は突然ペースを乱された為に一気にぶわりと汗を噴出した。

「おまえっ」

「水飲まないと倒れちゃいますからねっ」

言いながら、自分はひらひらと手を振ってその場を離れようとしたが、丁度その時通りかかった第二隊のフィルド・バネットの存在に瞳をさらにきらきらと輝かせた。

「フィルドさんめっけ」

思わずペースを乱して思い切り速度をあげたフィルドは、忌々しい子猿の存在に「今度は何の罠だっ」と内心でののしり声を上げたが、それは珍しく――正解だった。

その3

「脱落五名追加！」

軽快な口調で言いながら、ベイゼルは息を乱してトラック上でのたうっている人間達を馬柵の外に引きずりだし、クロレルが嘆息つきで脱落者の名を質の悪い紙に書き記していく。

「絶対にケツはアイギルだと思ったのに」

ぶつぶつと口の中で文句を垂れ流しているのは、訓練がはじまる前に同じ隊内で簡単な賭けをしたしまった為だ。

——ルディエラが一番はじめに脱落すると踏んでいたベイゼルは、銀貨一枚を失ってしまったことになる。

「見習いは粘りますね」

クロレルの言葉に、まるで自らが褒められたかのように第三王子殿下キリシュエータは瞳を細めて笑みをこぼした。

「にんじんは負けず嫌いだからな」

「こういう時は新入りらしく先輩をたてるもんでしょ」

それでもってアイギルのビリに賭けていた俺をたてやがれ。

相変わらずベイゼルがぶつぶつと口を尖らせるが、ベイゼルがルディエラのビリを願ったからこそ、負けず嫌いが暴走しているともいえる。

「それにあのポケカス、嬉々として他の人間の足を引っ張ってる。チーム戦に向きやしない」

「元々これはチーム戦じゃない。個人戦だろうに」

「相手のペースを乱したり、相手が自分を追い抜こうとするのを邪魔したり。相当性格悪いですよっ」

あの根性悪！

と、上官達が馬柵に寄りかかって面白い見世物よろしく眺めているのを尻目に、ルディエラは一定のペースを崩すことなく「どれだけ他の人間を早く脱落させるか」という悪魔の所業に白熱していた。

延々と同じ場所を走らされていたのは第二隊、第三隊総勢にして七十名足らずだったが、走り込みも気付けば終盤。

その人数はすでに二十名を切っている。

この辺りまでくればいつ倒れてもおかしくないくらいに全員が疲弊しているし、おかしな工作活動をしているルディエラに対して全員が警戒をしている。

別に最後の一人を目指している訳では無いルディエラだったが、とりあえず第二隊のフィールドよりは多く走りぬきたいという野望があった。

和解も済ませて最近ちょっぴり仲良くやっているが——当然当人だけの思い込みだが——第二隊で知っている唯一の人ということもあってルディエラはフィールドを迷惑にも勝手に目標にすえていた。

——ばくより三周早い。

それがまた闘争心をかきたてる。

三周。

他の人間にちょっかいをかけていた為に明らかに遅れてしまった。この三周をなんとか覆す為にはいったいどうすればいいだろうか。姿を見るたびにどうにか邪魔してやろうと画策したのだが、フィールドときたらまるで「化け物」でも見たかのように逃げていくので、逆に間をあけられてしまったと気付かない残念なルディエラは、正攻法で走っていたほうが自分の体力も削られなかったことにも当然気付いていない。

苦い気持ちに腹部にたまり、その表情は冷たさに磨きをかけた。勝てる賭けだった筈だというのに、ティナンの目論見はあっけなく覆されてしまったのだ。

ティナンとアラスターとが話し合いをしている間に行われていた第二隊、第三隊合同訓練にて、ティナンはルディエラが第二隊の人間より早く脱落するか、もしくは終了の合図まで走りきったとしても、第二隊の人間より遅れて終着すると思っていた。

彼の妹は女性としてみれば身体能力は高い部類になるだろうが、男達の中で平均値を上回るものではない、何より慣れない走りこみに脱落するのは火を見るより明らかだと思っていたのだ。

しかし、結果としてはじき出されたのはまったく別の回答だった。

「リズムを崩されると駄目なんですよねえ」

倒れるまで走れの言葉の通り、幾人もの男達が倒れている。

そしてルディエラ自身もへばっているがその完走周数は他の大方の隊員よりも三週は多く、その場で大の字になって倒れてはいるものの、誇らしげにすら見える。

「でも、まさかフィルドさんがぼくより二周多く走るとは思わなかった！」

顔をしかめて唇を尖らせてはやくが、その応えは隣からあがった。

「貴様の思惑などに早々はまってたまるか」

ルディエラの隣で馬柵に腕をかけているフィルドだったが、その足はがくがくと震えていて、その走り込みの壮絶さを物語る。

「——結果について何か言いたいのか？」

アラスターが意味ありげに小さく囁くことに、ティナンは奥歯を

かみ締めて耐えた。

「ベイゼル」

一番初めにばてたのは第二隊の人間だったことも災いし、ティナンにとっては手も足も出ない結果となってしまうたのはまさに計算外だ。

「後のことは頼みます」

きつい口調でティナンは言い、離れた場所で地面になつきながらも楽しそうにやにやとし、他の隊員からの罵声を嬉しそうに聞いているルディエラの姿に複雑な視線を走らせた。

本日のルディエラも、ものの見事にボロボロになっている。

見習い隊員としての隊服は他の隊員達とは違う色をしている為によりいっそう目立つが、その隊服も、その顔もあきれる程にドロにまみれて汚れている。他の隊員から浴びせられている罵声など、決して女の子が向けられて良い言葉ではないのに、当人はむしろ楽しそうにすら見える。

——女の子なのに。

その思いがいっそうティナンの胸を切りつける。

ルディエラが自宅で騎士を気取っている分には可愛いの一言で済ませられた。

無邪気に強くなりたい、騎士になりたいという様はただの子供の憧れで、決してかなえられない夢をただ語るだけの害の無いものだったというのに。

何よりティナンを打ちのめしたのは、今まで決して自分に逆らったことなど無い妹が、自分の言葉に逆らってこの場にいることだ。

——来るなと言ったのに。ルディエラは拒絶した。

「止める」

ふいの声にティナンは八つと息をつめた。

「射殺すような目でアレを見るな」

くんと肩に手をかけられ、無理やり方向を変えさせられたティナンは掠れる口調で「殿下」と主を呼ばわった。

「本来のおまえを知らなければ、おまえがアレを憎んでいるのかとすら疑う目だ。無駄に威圧して脅しをかける必要はないだろう」

憎い……？

憎い訳がない。可愛い妹なのだから。

だが、ほんの少し許せないだけだ。

何故自分に背いてこんな場にいるのか。何故、この手を振り払って……不必要にずたぼろになってそこに居続けようとするのか。

こんな場所など捨て去り、さつさと実家に戻ればいい。そうすればいくらでも冷たい態度をとったことを詫びて、抱きしめて、他の何ものからも護るのに。

ルディエラさえ意固地にならなければ、自分はこんな態度をとらなくて良いというのに。

女の子がいていい場所では決してないのに。

あの日——実家になど立ち寄らなければよかった。

あの日、キシシュエータを実家にいれるのではなかった。

あの日……いくらでも湧きあがる後悔に、ティナンはぎしりと奥歯をかみ締めた。

——お恨みもうしあげます。我が君。

胸の奥で言葉が呻くように響いていた。

「あら、ティナン様」

にっこりと微笑んだのは淡い栗毛の少女だった。

今頃は隊員達は沐浴と着替えをすませ、酒場【アビオンの絶叫】辺りに足を向けていると思うと腹が立つ。

だが、ルディエラがいると思えば自分も足を向ける気にはなれなかった。

丁度兄から託^{たく}られた使いを幸いに、ティナンは今朝方の手紙に同封されていた封書と、現金とを手に古馴染みの家を訪れることにしたのだ。

「ネティの具合はどうですか？」

エプロンをつけた娘は、曾祖母の名に苦笑しながらティナンのコートを受け取り、室内へと招き入れる。

「いつもどおり元気ですよ。最近ちよつとボケてますけど——あらいやだ。ティナン様ってわざわざおばあちゃんに会いにいらしたの？」

からかう口調で言いながら、それでも「兄に様子を見てきて欲しいと頼まれたから」といえば、素直に二階にあるネティの私室へと案内をかつてでる。

「いや、いいですよ。何かしていたのでしょうか？ 作業に戻って」ティナンはやんわりと言いながら、ルディエラとたいして年齢の変わらない少女の様子に気持ちを沈めた。

あの子も——女の子らしく家庭にいてくれればどんなにいいか。

いや、女の子らしくなくて構わない。

ルディエラはルディエラらしくあればいい。

けれど今のように無理して男とてふるまうのはいただけない。

ベイズルが聞けば「いや、当人無理してる様子は無いよ？ むしろあれ素だろ」とぶんぶんと首を振りそうなことを思っていたが、生憎この場に突っ込み要員はいなかった。

重い嘆息をつき、二階にある年齢不詳の老婆の私室の扉をノックした。

「ご無沙汰しています。おかげんはいかがですか？」

声をかけると、窓辺でロッキングチェアに腰を落とした老婆が開いているのかいないのか判らない視線をティナンへと走らせ、顔をほころばせた。

一回り小さくなった気がしたのは、元々肉付きの良い女が多少やせたのだらう。クインザムが心配するのもうなずける——その様子は病に蝕まれているのがありありと判るものだった。

もとより年齢も関係するものだらうが、おそらく産まれた瞬間から付き合ひのあるこの老女もそう長くは生きられないだらう。

ティナンは妙に物悲しい気持ちを抱いた。

「おや、クインザムぼっちゃんじゃないか」

「それは兄です」

「おやまあ。じゃあ、ティナン坊かね」

ティナンですけど坊は止めて下さい。

楽しそうにあれやこれと尋ねてくれる老婆にティナンは愛想良く対応した。

「末のぼっちゃんはどうしたね」

「ルークですか？ 今は【賢者の塔】で好きな研究にいそしんでいますよ」

ティナンは言いながら、兄から渡されていた手紙と現金とが入った封筒をテーブルの上に置き、ついでに途中で購入してきた花も添える。

「ちがうちがう。ルークぼっちゃんの下のぼっちゃんだよ」

しわくちやの骨と筋ばかりの手を振って笑う相手に、ティナンは微笑した。

「ルークの下はルディエラですよ。あの子は女の子じゃありませんか」

いくら男の子のような姿をしていたって、そこは間違えないで欲しい。

ティナンも慣れないむつきをかえたこともあるし、夏場の川遊びで素っ裸になるルディエラを何度たしなめたか知れない。

そんな昔のことを思い出し、ティナンはちよつとだけ切なくなつた。

「自分を取り上げた子供を間違えちゃ駄目ですよ」
笑いながらたしなめるように言うティナンに、老婆は憤慨した様子で顔をしかめた。

「何言ってるんだい。誰も彼も人をボケたボケたって。失礼ですよ。エリックの旦那さんの子は全部あたしが、この手で取り上げたんですよ。」

間違うものですか。
五人ともちゃあんと立派なもんをつけた男の子だよ！」

「……はい？」

いや、ボケてますよ。

ティナンはまじまじと怒っている老婆を見下ろした。

その1

「ひどいひどいひどいひどいっ」

怨嗟の呟きを延々と繰り返すルディエラの背後、騎士団官舎に呼びつけられたマーティアは肺に溜まった酸素を一息に吐き出し、力いっぱい編み込まれた紐を引き絞った。

「ひぎいいっ」

騎士団官舎内、第三騎士団の詰め所の隣にある隊員達の憩いの為のサロン、その隣にある使用人達の控え室は現在戦場であった。中央部分におかれた衝立の奥、漏れ聞こえる声は拷問官と咎人のそれすらも思わせる。

「ルディ様、もう少し息を止めて下さいまし」

「ひぬっ、ひぬからっ」

窓枠に指をがちりと食い込ませ、ルディエラはマーティアの注文にぶるぶると身を震わせた。

キシギシと背骨が悲鳴をあげる。

これ以上締め付けられれば骨が折れるのではないかと思うのに、相手は攻撃を決して緩めようとはしなかった。

「もおっ、あともう少しっ。筋肉ってなんて厄介なのかしら！」

普段のルディエラであれば自慢の筋肉の悪口を許しはしないが、今の彼女はそれどころではない。

「セイっ。セიმ——手伝って」

すでに興の乗っているマーティアは心底楽しそうに微笑を浮かべ——それはルディエラにとってはまさに悪魔の笑みに他ならないが——衝立の向こう側、扉に背を預けて笑いを堪えていた弟を呼んだ。

「ちよつ、あのさ。これ以上は無理だから。本当に、無理。駄目。だつて内臓出るつて」

ひよこりと衝立を抜けてその鳶色の瞳に認めたものは、ドロワーズ、むき出しの肩にコルセットという、本来であれば異性に曝すものでは到底無い様相――

涙目のルディエラの懇願に、セイムの瞳は苦笑に細まる。

窓枠に両手をつけたまま、腰を突き出すようにして立っているセイムの幼馴染にして主は――珍しく年相応の少女に見えた。

惜しいのは、やはりその髪が首筋から少し下で切られているのが女性として多少痛々しさを見せていることだろう。その髪を補う為にと、近くの椅子には幾つかのかつらも置かれている。

姉の手からコルセットの紐を受け取り、セイムはすぐ近くにあるルディエラの腰のラインを指先でつつとなぞり、その耳に息を吹きかけるように囁いた。

「そんな格好してると結構かわいい」

突然聞いたこともない台詞を向けられ息を詰めた相手の背中、セイムは力いっぱい締め上げて鉤に紐を引っ掛けた。力を緩めずにきゅつと紐を結ぶと、相手からの報復を逃れるようにすつと後ろへと下がった。

「姉さん、このくらいで勘弁してやってよ」

「もおつ、仕方ないわね」

すばやく逃げ出したセイムだったが、その動きは徒勞であった。姉弟の会話を耳に知れながら、ルディエラは低い声で「くぬうううう」と呻くことしかできずにいたのだから。

「セймウウウ、殺すっ」

「いつでもどうぞ。それより、背筋を伸ばして立って。姉さん、その淡い緑のドレスがいいよ」

いそいそ薄桃色のモスリンのドレスに手を掛けている姉を引きとめ、その横のドレスを指示しながら、ふとセймはルディエラの姿を正面から捉えた。

「桃色が可愛いと思うけど」

ふわふわの女の子らしいドレスに夢を持つマーティアに、セймは肩をすくめた。

「胸の詰め物たりないんじゃないかな」

「あら、丁度いいくらいよ？」

無遠慮な姉弟の会話を恨みがましい目で睨みつけながら、ルディエラは呼吸を整えた。締め付けられる体をゆっくりと慣らししていく。そのやり方くらいは心得ているが、もともとドレスなど着ないのだから、どうしたって苦しい。

ドレスは好きでもなければ嫌いでもない。

女である自分を捨てているつもりも無い。だが、ドレスと隊服を示されて一生脱ぐなといわれれば当然隊服を選ぶ。

「なんで……こんなことになったんだっけ……」

ばやいた言葉は、しかし簡潔に説明ができた。

自業自得だ。

それ以外のなにものでもなかった。

「舞踏会？」

「ただの夜会」

一昨日前、ベイゼルは手の中でナッツの皮をむき、軽く投げるようにして口の中に放り込んだ。

隊長及び副隊長の会合が開かれ、その会合の中で話し合われた結果を当然のように「あ、忘れてた」と二日たったその日ぼろりと口にしたのだ。

それはつまり翌日の予定を。

「リルシェイラ様が隣国にご機嫌伺いに出向かれるのは知ってるだろ？ その出立に際してのちよつとした催し」

ただの夜会などと言ったところで、王宮内の催しがそれほど簡単なものであるう筈は無い。当然のように王宮警護の騎士団員達は会場の警備に当たる。

他国の人間が居ないというだけで、その規模は決して小さなものではない。王宮内はまさにその準備でてんてこ舞いの様相だが、騎士隊隊舎は普段と変わらぬ様相で、日々の訓練に忙殺されているルディエラなどはそんな催しがあるうなどとは少しも気付いていなかった。

ただ視野が狭いだけともいえるが。

「明日、俺達は庭の警備な。廊下とかが第二隊、会場内部は当然第一隊」

「庭って、なんかずるい」

思わずぼろりともらすと、ベイゼルは「廊下と庭の警備はいつも第三隊と第二隊の交代だが、内部警備は絶対に第一隊に決められている。あいつら俺達王宮騎士と違って王族騎士だからな」と肩をすくめた。

言われてみると、確かにキシシュエータも普段から第一隊の人間

を二人連れている。その割に副官は第三隊隊長のティナンを指名しているのだからおかしいものだ。

「庭警備かー、ちょっとつまないですねー」

とルディエラがその時ぼやいてしまったのが悪かったのか、ふいにその肩にぽんっと手が乗ったのだ。

「そうか。じゃあお前には違う任務をくれてやろう」

気安い第三王子殿下は口の端にあまり宜しくない微笑を湛えて言い、他の隊員達は興味津々という様子で耳を傾けた。

「特別に会場内警護に回してやる。美味しいものも食べれるぞ」

「つて、ズリイですよ。殿下っ」

途端に激しい苦情のような声が上がった。

夜会、舞踏会で言う会場内警護といえは正装しての勤務となる。

その扱いはあくまでも警護ではあるが、招待客となんら変わりなく豪華な食事にもありつけるし、節度さえ守れば酒も許される。

「なんだ、ベイゼルがやりたいのか？」

「そりゃとーぜんですよ。俺のほうが役に立ちますよ」

途端に嬉しそうに言うベイゼルと、周りからは「俺がつ」との追随。

しかし、彼等の主にして第三王子殿下は、それはそれは麗しい微笑を湛えて言った。

「ドレスを着てもらうが」

「は？」

「女装」

途端にその場には沈黙が満ち、ルディエラの肩には次々と他隊員の手がぽんぽんと押し当てられた。

「大丈夫だ。お前なら似合う」

「がんばれー。馬子にも衣装っていうしな」

「人生にはやらねばならないものがある。任務なら仕方ない。涙を呑んで譲ろう」

「いやあ、残念だな」

「いきろ！」

うんうんと言いながら笑いを堪えている面々を前に、ルディエラは盛大な声をやっとしぼりだした。

「何ですかそれ！」

思わず素で声をあげたルディエラが、慌てて声を押さえ込み、不敬もへったくれもなく思い切りキシシュエータの胸倉を引っつかむと声を潜めた。

「色々まずいじゃないですか。ぼくが女だつてばれたらどうするんですかっ」

真っ青になつて言うルディエラに、キシシュエータはあくまでも平素の口調を崩さない。

「なんだ、女装に自信はないのか。そうか。特別手当も考えてやるのに。ドレスの時には剣がもてないからな、ドレスの下に隠せる短剣もやるうかと思っていたんだが。確かおまえ欲しがっていただろっ?」

「やりましょう！ ぼく全力でやりますからっ」

守銭奴魂はぐつと拳を握り締め、力強くうなずいていたのだった。

そんな過去の自分がちよっぴり憎い。

幸い、隊長であるティナンがルディエラの家人を呼んでくれた為に身支度は問題なくすんだわけだが——家人は家人でなんというか腹立たしい。

「呼吸できますか？」

胸元に手を当てて歯軋りをする明るい髪色の少女に水の入ったグラスを差し出しながら、セイムが問いかけると、ルディエラは三白眼で睨み返した。

「人の不幸を楽しむな」

「楽しむ意外することないでしょに。それより、口——口が悪いです。そういう格好している時はきちんと女性らしく」

セイムの鼻がひくひくとしているのは、明らかに笑いを堪えている。ルディエラはグラスをひったくるようにして受け取り、一気に飲み干した。

「ぼくを舐めるなよっ。女らしくなんて朝飯前だねっ」

びしり啖呵を切ったルディエラに、マーティアはうなだれるように溜息を落とした。

「すっかり一人称がぼくなんですけど」

「あああっ、しまったっ。あれ、えっと、あ、あたし？　なんか気持ちわるっ」

「あたしじゃなくてワタクシです。ああっ、もう心配で胃に穴があきそうですっ」

自分の顔に手を当ててさめざめと泣くふりをするマーティアの横、セイムは壁に片腕を預けて肩の振るえを堪えていた。

「笑うなつてば！」

「何を考えてるんですか！」

ティナンの声に、彼の主は座っていた椅子の肘掛けに尊大な調子で腕を預け、足を組み替えた。

「何がだ？」

相手に疑問符を投げかけているくせに、返される言葉を承知しているキリシュエータは指先で眼鏡の蔓を押し上げる。

硝子越しの眼差しは細まり、実に楽しげにティナンを見返していた。

「あの子に女装させるなんて！　どういうおつもりですかっ」

激怒している副官の様子に更にキリシュエータの口元は緩み、まるで直に見なければつまらないとも言つように眼鏡を取り払った。

「面白そうだと思ったただけだが」

その言葉に、ティナンはぐつと奥歯を噛み締め、射殺しそうな眼差しを主に向けはしたものの、自らの言葉は封じ込めた。

そうでなければ——その御前に跪き、死するまでの忠誠を誓った相手を本気で罵倒してしまいそうだった。

「そう熱くなるな。最近のお前は余裕が無さ過ぎやしないか？」

「それは……」

さぐるような眼差しをねじ込まれ、ティナンはふつと視線を逸らした。

一瞬だけ、まったく違う色合いを見せたティナンの様子に更に追従の手を伸ばしかけ、だが彼の主は視線を伏せ、持ち上げた。

「ただの遊びだ。楽しみ」

——主の言葉がゆっくりと胸の中に落とされる。

毎日のように腹をたてて、毎日のように苛立ちを抱えて。

棺桶に片足をつっ込んだ老婆の言葉に翻弄される。ティナンはぶちりと切れそうな自分を認識しながら、引きつった微笑を浮かべた。

「御下命とあれば」

副官の言葉にキリシュエータは呆れるように嘆息し、部屋の左側

——幾つもの短剣が飾られた一角を示した。

「そのうちの一派りをにんじんに下げ渡す。

おまえならばアレの好みは熟知しているだろう。どれでもいい。今は第三隊のサロンの隣室にて身支度をしている筈だ。届けてやってくれ」

ティナンは何本かその重さ、バランスを確かめるように手の中で弄び、実用的と思われる一番シンプルな一派りを手に暗い思考の海をさま迷っていた。

頭の中で産婆の言葉が堂々を巡る。

——母が産み落とした子供が全て男だというなら、ではルディエラは何だというのだろう。

ルディエラは……

調べればきつとこの胸に蟠るものが払拭される。

けれど、その一步を踏み出すことに躊躇してしまう。

——そう、ただの年寄りの勘違いだ。

そうでなければ、そうでなければ……自分はいったいどうしたら良

いのか判らない。

「つつ」

短剣の切っ先が指の腹をかすめ、ティナンの白手にじわりと血が滲んだ。

その真っ赤な血を見つめ、ぼんやりとその血を舌尖でなぞった。

血の……

その2

「アイギル」

ルディエラの女装を興味津々で待っていた第三騎士団の面々の感想は概ね一緒であった。

「喋るな」

「副長までそんなこと言うしっ！」

すでに控え室にいる時にマーティアに耳にタコができる程聞かされたのだ。しかも、マーティアはにっこりと。

「ルディ様にとっておきの言葉をお贈りします」

と謎の枕詞を載せ、悪意も邪気もなく「喋らなければ大丈夫です！」と言い放ったのだった。セイムと同じ鳶色の瞳をきらきらと輝かせながら。

ルディエラは引きつり「へー？」と微妙な返事を返し、セイムは顔を背けて片手で口元を覆い、肩を上下に揺らしていた。

「ほらっ、喋ると途端にボロが出るだろ」

「女っていうには色が黒いんだよな。ベールでもかぶったほうがいんじゃないか？」

「腕が太い」

好き放題に喋りだした面々を前に、ルディエラはどんどんと瞳を細めて唇を尖らせた。

マーティアには腹がたつが、自分でもなかなかのきばえだと思ったのだ。

少しばかり第三隊の面々に「どうだっ」と得意げにお披露目したと

いうのに、彼等ときたら笑いのネタ程度にしかない。

いや、ネタ程度で勿論いいのだ。

ルディエラは少年なのだから、女装がやたらと似合って完璧女性扱いされても気まずい。

ルディエラはちらりと自分の手元へと視線を向けた。

二の腕まで長い手袋をしているのは、日焼けしてしまっている腕の黒さと女性にしてはちよっぴり太め、そして訓練の時に出来た小さな擦り傷やら痣やらを誤魔化す為だ。

ドレスにしたって「夜会なのですから、もう少し肌の露出があってもいいのですけどね」と不満たらたらのマーティアに対し、セムが「もともと男の子で通してるんだから、あまり色々出したらマズイでしょ。何より、胸のトコなんて詰め物落ちるし」と、思い出せば思い出す程腹立たしい会話を交わしていた。

そうして着せられたのは、上半身は鎖骨の辺りまでしっかりとカバーされ、肩口だけが少しだけひらひらとうす布を遊ばせ、腰の少し上からは幾重にも薄緑の生地が重ねられてドレープを作り、ほんの少しだけ中着のパニエで膨らませてゆったりとしたものだった。

「体の動きと光の角度で緑の濃淡ができてとっても綺麗な色彩をみせますよ」

桃色のドレスを着せたがったマーティアは、最初不満そうにしていたが着替えさせ終わるとやっと納得したのかそんな風に言っていた。

「ルディ様日焼けが酷いから、桃色だと悪目立ちしていたかもしれませんわね」

とは、どうやら自分を納得させる為の発言であつたろうが、ルディエラとしては「余計なお世話だよ」と歯軋りしていた。

そして、現在ルディエラの足――ドレスの下には銀の短剣が潜ま
せてある。

丁度着替えが済んだ頃合、マーティアがルディエラの髪に乗せる髪
飾りを物色している時に来訪したのは、第三騎士団隊長、ティナン
であつた。

突然の来訪者に、それまで笑いを堪えるという作業に没頭しなが
ら腹筋を鍛えていたセイムが衝立の奥へと消えると、程なくして短
剣とベルトとを手に戻つたのだ。

「ティナン様がこれを足につけるようにと」

「夜会に刃物なんてとんでもありませんっ」

と、途端にマーティアは憤慨したが、ルディエラは化粧椅子に座つ
たまま勢いよくドレスの裾を持ち上げた。

「セイム、早く頂戴っ」

新しい玩具をもらつた子供の瞳がきらきらと輝いているが「頼み
ますから、自分の格好くらいは考えましようね」とセイムは嘆息し、
自分の手にある短剣とベルトとをマーティアへと差し出した。

「姉さんつけてあげて」

その言葉を残して衝立の奥へと弟が消えると、マーティアは鬼の
ような形相でルディエラの前に跪いた。

「女性なのでから少しは慎みをお持ち下さい！」

「慎みなんてマーティアにあげるから」

「ルディ様っ！ セイムだって男なんですよ」

その後たつぷりと説教をくらう羽目に陥ってしまった。

「お前たち、何を騒いでいる。そろそろ配置につく時間だろう」

冷やかな隊長の声が轟いた途端、それまでルディエラの周りでのわいわいと騒いでいた面々が背中にも棒でも突っ込まれたのかというようにびしりと背筋を伸ばし、慌てて退散した。

途端にルディエラの中でも緊張が生まれる。

ベイゼルは一般隊員と違い、ティナンが来たからといって慌てふためいて退散したりなどしなかったが、それまでの息苦しい程の人口密度が途端に変わってしまう。

広いサロン内にティナンとルディエラ、そして苦笑しているベイゼル。

「隊長、配置表に修正箇所があるから一度目を通して欲しいんだけど」

飄々と言うベイゼルに一瞥をくれ、ティナンはその眼差しをルディエラへと向けた。

まるでアラを探すように頭のとっぺんから爪先までをゆっくりとその視線が落ちていく。つま先へと一旦落ちた視線がもう一度ゆっくりとした速度で這い登るのを見返しながら、ルディエラは自分が狩り出されるつさぎや野ネズミにでもなったような心地を味わっていた。

沈黙が痛い……

怒られるのであれば怒られたほうがよっぽど精神衛生的には好ましい。

鼻の奥からつんとしたものを感じながら身を固くしていると、おもむろに顎先に手がかけられ、ルディエラはびくりと身をすくませた。

「口紅の色が濃い。少し落とせ」

「は……い」

半泣きになったルディエラが、こともあろうに自らの手でそのま

ま口紅を拭おうと反射で動けば、鬼隊長はその手を掴みあげ、吐息を落として反対の手でハンカチを取り出した。

「背筋を伸ばして、おどおどするな」

ハンカチを軽く押し当てようにしてその紅を拭い、ティナンは若干眉を潜めたものの満足したように一つうなずいてみせる。

本日のティナンはそれ程威圧的な何かを垂れ流してはいなかったが、すでにルディエラの中では恐怖の存在に成り果てているのか、ルディエラの表情はどこまでも引きつっていた。

いつそ痛々しいその様子に、ベイゼルは軽く首を振った。

「隊長、今日くらいは優しくしてやんなさいよ。アイギルだって好きでんな格好してる訳じゃないし、会場でもまさか隊員として接するつもりじゃないんでしょ？」

「――」

副長、それってもしかして援護なのかもしれませんが、怖いからお願いだから黙ってて。

ルディエラは目で訴えてみたが、ベイゼルは固まった体をほぐすように肩口を回したりなどしながら軽く言う。

「まあ、普段のこいつを見慣れている俺等にしてみれば、ちょっと面白いけど――普通の人が見たらちゃんと立派にオンナノコだよ。そんな怖い顔してないで、淑女に対するように優しくしてやんなさいよ」

ベイゼルとしては親切心だったろう。

せっかく着飾ったルディエラが、顔を強張らせてびくびくしているのが忍びなかったのだろうし、ティナンが片意地張っているのも時には解したかったのかもしれない。

ティナンはじつとルディエラを見つめ、やがてゆっくりと一つの回答を導き出した。

「そうか、今日は部下でも何でもない」

いや、部下は部下だ。

ルディエラの女装はあくまでも王宮内部の警護の為のものだ。根本原因が第三王子殿下の酔狂であつたとしても。

「そうか……」

ぼそぼそと口の中で小さく呟いていた言葉は、ルディエラには届いていないであろうが、ベイゼルにはしっかりと届いた。

——今日は兄でも妹でも、ましてや部下でも無いんだ。

いや、ちょっとまって？

兄だし、妹だし、部下であることには違いないんだが！

そいつはソレでも仕事中だよ？

ベイゼルが思わず突っ込みそうになった前で、ティナンはそれまでの鬼隊長の表情を一変させ、きつくしていた眼差しをふわりと緩め、ルディエラの白手に包まれた手の先端に口付けた。

「今日はぼくがエスコートしよう」

もし、もし……？

その3

明日からの半月——第二隊の半数の人間が第二王子殿下にして司祭長リルシェイラの護衛として隣国ユフェスタへと旅立つことが定められているが、当然自分もその旅に同行することとなると思っていたフィールド・バネットは、隊長であるアラスターの言葉に肩透かしを食らうこととなった。

「お前は居残りになった」

「何故ですか？」

第二隊は三小隊に分けられ、アラスターから直接指揮を受けているフィールドは当然今回の外遊に同行するのは確定していた筈だった。「色々と考えた上での決断だ」

それ以上の言葉は無かったが、おそらく最近こまごまとしかしたミスなどが原因であるというのはフィールドにも理解できた。

ミスを思えば自然と脳裏には明るい髪の小僧が浮かぶ。

日に焼けたような明るい金髪に、底意地の悪そうな灰青の透明な瞳を持つルディ・アイギル。

そんな顔を実際に見た訳ではないが、何故かルディ・アイギルを思うとき、頭の中で踊るヤツはべろりと舌を出して左の目の下に中指を押し当てて「ベー」と阿呆な音をさせている。

あぐくニマニマと口元を緩め人を挑発してくるのだ。

とっ捕まえてぎったんぎったんに殴りつけてやりたいという激しい衝動に駆られるのだが、実際にあの子供を面前にすると、まるでそんな気配はおくびにも出さずに「あ、フィールドさんだ」とにっこりと笑うのだ。

——腸が煮えくり返る。

「くそっ」

思わず舌打ちをもらし、フィルドは握り締めた拳を壁へとたたきつけ、慌てて現状を再確認してしまった。

——任務中。

そう、リルシェイラの外遊の壮行だ。

その会場の建物内廊下を警護する任務についているというのを危うく忘れていた。

各所に配置された第二隊の薄藍色の隊服が視界の端にちらついている。

会場内に来客は未だそれほど入っていないが、警護の為の第一隊の人間や侍従などがすでに会場内を忙しく動いている為に人の出入りも気配も感じられる。

フィルドはちらりと会場正面の扉から続く廊下に見えるアラスターへと視線を転じ、思い切るようにそちらへと一歩足を進めていくと、アラスターが慌てたように奇妙な動きを見せたのはほぼ同時のこととなった。

「隊長？」

何だ？

ととんと床を軽く蹴ってみれば、無骨な大男アラスターはその腕の中に一人の少女を抱えるようにしてこちらを振り返った。

「危ない」

とアラスターが言葉を続けるのが耳に入れば、どうやら相手の少女は躓きでもしたのだろう。それをアラスターが咄嗟に手を伸ばして抱き込んだという様子。

今夜の夜会に招かれているのか、淡い紗の生地を幾重にも重ね合わせたドレスを着用した少女は引きつった微笑で体制を整え、ついで自分を抱えるアラスターの胸を見つめながら口を開いた。

「すごいっ。胸筋固いっ」

フィルドは思わず足を止め、アラスターは引きつった表情で自分の腕の中の少女をまじまじと見下ろした。

化粧が施されていて多少大人びて見えるが、未だ二十歳にはとうていなくていいと思われる少女は瞳をきらきらと輝かせ、不寐にアラスターの胸にぺたりと手を当てた。

「うわああ。凄い。張りもいいし、固いし。素敵っ」

なんだか判らないが、聞いてるこちらが恥ずかしい。

完全に狼狽したアラスターがわたたと慌てながら「お、お嬢さん？ 淑女？」と上ずった声でじりじりと相手から逃れようとしているのだが、相手ときたら何がそんなに楽しいのかがしりとアラスターの腕を掴んだ。

「上腕三頭筋と二頭筋の張りもいい感じ。きつと脱いだらもっとうっすいすよねっ」

「な、何を言ってるんですか」

「腹筋も凄そう。あああ、見たい。勿体無いっ」

うつとりと囁く声はまるで誘惑しているようにすら見える。

狼狽するアラスターは、近くににいるフィルドを認めて声を張り上げた。

「フィ、フィード！」

「……はい」

さすがに助けってくれとは言えないのか、アラスターが必死にすが

るような眼差しを向けてくる。

自分よりもずっと小さな少女にここまで押される——というか襲われている上官も珍しい。フィルドは生温かな笑いを堪えつつ、一応二人の間に割って入るように声を掛けた。

「失礼、淑女^{レディ}。お怪我はありませんでしたか？」

それまでフィルドへと関心を示さなかった相手の視線がふっと向けられる。

どこまでも透明な灰青——少しだけ不満を示すように尖る唇。薄く紅を佩いたその唇が音を紡ぐより先に、フィルドは驚愕のままにその名を口にしようとしていた。

どんな姿をしていようと、その瞳を間違えることは無い。

日常のふとした隙間に入り込み、フィルドを苛々とさせる張本人。夢の中でも現の内でも、脳裏を駆け巡る悪魔。

「ア——」

「ルディエーラ」

凜と響く声がびしやりと投げつけられ、つかつかと長靴を打ちつけるようにしてその場の空気を引き裂いたのは第三隊隊長——ティナンだった。

「一人でうろろしては危ないと言ったでしょう。待っていないさいと言った言葉が聞こえませんでしたか？」

「あ……あの、ごめんなさい」

「アラスター、連れが迷惑を掛けたようで失礼しました」

「あ、ああ。怪我がなければそれで」

穏やかに隊長二人が会話を弾ませる横、フィルドは引きつった表

情でじつとティナンの一步後ろに立つ少女を見つめた。

少しばかり怯えを含ませ、ティナンを気にしているのは間違いなく

「ルディ・アイギル……だよな？」

小さな囁きはルディエラの耳に僅かに届き、ルディエラはちらちらとティナンを気にしながら白手に包まれた指先をひよこひよこ動かしした。

「なにをしているんだ、貴様は」

「任務です」

ルディエラはすすすつとフィールドに僅かに近づき、ふと思い出すようにティナンの声を掛けた。

「ティナン様」

そう、これもまた不可解だ。

ティナンは今日は隊長と呼ぶなと命じつけ、それならばどう呼べば良いのかと困り果てたルディエラに「ティナンでいい」と穏やかに――そう！ おそろしいことに鬼隊長は穏やかにそんなことを言うのだ。

ルディエラは何故か判らない怖さを感じつつ、生理現象を覚えてティナンの元を離れたのだ。

隊長二人が警備のことについて話し込みはじめてしまったのを幸い、ルディエラはにつこりと微笑んだ。

「ぼ——わたくし、バネットさんに花摘みに案内して頂きますから」
トイレ

「エーラ、ぼくが案内しますよ」

「いいえ。お仕事がんばって下さい」

言っや、ルディエラはさっさとフィルドの隊服の裾を引っつかみ、そそくさとその場を離れた。

「なんなんだ、ソレは」

「殿下の酔狂です。ぼくだって好きでこんな格好してる訳じゃないんです！」

潜めた声でぶつぶつといいながら、ルディエラはぶるりと身を震わせて自分の体を抱きしめた。

「いつもは怖い隊長だってなんだかやけに親切でむしろ気持ち悪いし」

「——確かに」

フィルドが知る限り、第三隊のティナンはいつだってルディ・アイギルに対して冷たい態度をとっていたものだが、先ほどのティナンはまるきり違う。

淑女を相手にしているという演技だろうか。だとしたらティナンは物凄い演技力の持ち主だ。

廊下の角を曲がり、ルディエラはぐいっとフィルドの腕を掴んで足を止めた。

「そんなことより、フィルドさんっ」

「な、なんだ」

「お話がありますっ」

真剣な表情で自分を見上げてくる青灰の眼差しに、フィルドは相手が男だと理解していても狼狽した。

女装——なんだってそんなものが似合うのだろう。

詰め物もしているのか、盛り上がった胸の膨らみや淡く施された化粧。

薄い紅を佩いた唇に自然と視線が落ちてしまう。

——いがいに柔らかかった唇。

ふとその感触を生々しく思い出し、フィルドは思わずぐっと拳を握り締めた。

口止めの意味と苛立ちと八つ当たりで仕出かした愚かな行為。他人にあんな場面を目撃されていた羞恥に相手も陥れてやろうとしてやってしまった口付け。

ただ触れるだけでよかったものを、触れてしまえばその柔らかさと甘いような味に思わず舌を沿わせていた。

男相手に自分もどうかしていると幾度か後悔したが、その唇を思い出せば苦味と共に何かが疼く。

それを認めるのがイヤで更に怒りは激しさを増していく。

その唇が、そこにある。

柔らかで、甘い——

「な、何だ？」

まさかおかしな告白じゃないだろうな？

いや、バカな考えは捨てる。

これは男だ。男だ。男なんだ。

フィルド・バネット、落ち着け。

何よりもこいつは悪魔じゃないか。騙されるな。中身はルディ・アイギルだぞ。

頭の中に薄桃色のおかしな妄想がはためいた頃。ルディエラは胸元に手を当ててフィルドに訴えた。

「今の人誰ですか？」

「——」

「凄い筋肉、憧れる！ うわー、もうぼくの目標はあの人に決めま

した。カッコイイ！　ぼくもあの人みたいになりたいっ
「……………」

「何食べたらあの筋肉が維持できるんだろう！　顧問の筋肉も素敵だけど、知ってます？　顧問ってば最近ちょっぴりお肉がついちやってるんですよっ」

…… フィルドは面前の筋肉馬鹿を殴るべきなのか、自分を殴るべきなのかよく判らなくなった。

その4

「うわぁっ」

危うく思い切りすっこけそうになったのは、自らが動きやすい騎士団の隊服ではなく、ドレスを着用していたことを失念していたことも理由の一つだろう。

エスコートするという第三騎士団隊長の好意に甘えなんとか会場入りを果たしたものの、ルディエラは四半刻も過ぎると息切れと動悸により最終的には微妙に気持ちが悪くなりとしなない状態に陥っていた。

——兄さま、どう接しろって言うの？

今日のティナンは一見して昔から良く知る兄のように優しいし、心配りをもって接してくれているのだが、このところ鬼隊長姿しか見ていないルディエラとしてはなんだか微妙にキモチワルくて仕方が無い。

兄さまと危うく言いかけ、謝罪の為に慌てるルディエラの背を軽く叩き「どうかしましたか？ 何か飲み物でも？」ときた時には、思わずぶんぶんと勢いをつけて首を振り、この二人という居心地の悪さをどうにかしたくて周りを見回したが、知るものが無い。

副長ううう。

と思わずこの場には居ないベイズルに心の中で救いすら求めてしまった程だ。

第二王子殿下であるリルシェイラの声明が済めば、会場内は歓談

する者、軽食をとるもの、楽団の曲に合わせて踊るものと多種多様に楽しみだす。

「踊れないよっ」

思わず呟くと、ティナンは苦笑して囁いた。

「きちんと言葉を改めなさい。それに、踊らなくても大丈夫——今夜は舞踏会ではなく、ほんの関係者だけを集めたただの壮行です。ダンスもただの余興に過ぎない。誰の誘いも受けなくていいのですよ」

その言葉に安堵の息をつく、ティナンはルディエラの手をそつとすくいあげて微笑んだ。

「踊ってみたいのであれば、ぼくがきちんと導いてあげますよ」

——ありがとう、兄様！

と、無邪気に言えるのであれば良いのにとルディエラが引きつっている、やっと現れた第三王子殿下キシシュエータが呆れたように二人に声を掛けた。

「まさかと思ったが——ソレはにんじんか？」

「殿下、淑女に対してソレはないでしょう」

ティナンの言葉など無視し、キシシュエータは無遠慮にルディエラの姿を頭から足元までじろじろと眺め、やがてふつと鼻で息をついた。

「残念だ」

さすがにこの言葉はルディエラにもぐさりと刺さる。

自分が美人の部類だとは思ってはいないが、だが何度も言うように女性である自分を捨てているつもりは無い。

綺麗なドレスに胸にはしっかりと詰め物もしてある。髪も自前ではないもののきちんと結い上げて化粧も施したというのに、結構自

信を持っていたというのに「残念」などといわれるとは！

ルディエラが啞然とし、ティナンが不快に口を開こうとしたところでキリシュエータは口元を引き上げるようにして笑った。

「おまえ本来の髪であればさぞ似合うだろうに」

さらりと向けられた言葉に、ルディエラは軽く目を見開き、何度もその言葉の意味を咀嚼するように噛み締めた。

——あれ、もしかしてこれって結構褒められてる？

なんだか居心地の悪い思いをしつつ、なんとなく逃げ出すように咄嗟に口を開いていた。

「トイレっ」

主の言葉に、ルディエラの髪を自ら切った事実をまざまざと思い出して顔を悪くして小さく呻いていたティナンだったが、それでもルディエラの言葉に「そういう時は淑女は花摘みと言つものですよ」と弱々しく窘めた。

しかし、そんな言葉も上の空でルディエラはさっさと広間から逃げ出していたのだ。

慣れないドレスの長い裾と、高いヒール。

そしてなんとも居心地の悪かったキリシュエータの言葉に動揺していたルディエラは、廊下に出た途端、すっころびそうになった。

「危ないっ。大丈夫ですか？」

ひょいっと差し出された腕に助けられ、ルディエラは慌てて体制を整えながら相手を見上げた。

「あれ……」

がっしりとした体躯。

張り詰めた筋肉。

見事な逆三角形——思わずドキドキと高鳴る胸で、ルディエラは相手の腕を逃してなるものと、がしりと掴んだ。

よく見れば相手は薄藍の隊服——第二隊の人間を示す。

「凄いつ。うわっ、上腕二頭筋と三頭筋の張りが凄いつ」

「あ？」

久しぶりに見た筋肉質な上背のある男の姿に、ルディエラの瞳がきらきらと輝き、その意識は完全に——ぶっ飛んでいた。

なんだか微妙であったテンションが異様な程に跳ね上がったが、勿論その向上は他の人間にとって、はた迷惑なだけだった。

フィルドを追い詰めるようにして素敵筋肉のアラスターの名前と、さらに相手が第二隊の隊長だという情報を仕入れると、ルディエラはにこにこ所要を済ませて会場に戻った。

まさかこれから配属される先に素敵筋肉を持つ人間が居るとは。なんという幸運。

いやいや、なんとねたましいことだろう。

自分がどれだけがんばったところで、決してあの肉体美を手に入れることは敵わない。だが、近くで見て観察すればあの筋肉を維持している秘訣を盗むこともできる筈だ。

否！

盗まなくとも、教えてくれるかもしれない。

さらに言えば、もしかしてアラスター隊長も自分と同じように筋肉好きかもしれないじゃないか。

同じ筋肉好きとして筋肉談義に花が咲く！

今まで誰一人として共感してくれたことは無いが、きっとアラスタ―隊長なら理解してくれるに違いない。

ハッ、もしかしたらその筋肉の秘密を他人にばらしたくない内向的筋肉好き―だった場合はどうしたらいいのだろうか。

ドレスなど着て碌なものじゃないと思ったものだが、こんな収穫があるなら王宮内部警備に配置されて良かった良かった――とルディエラが脳内でおかしな花を咲かせまくっていたのもつかの間、すでに人で埋まっている会場でルディエラははたと足を止めた。

広大な広間だが、王族は数段高い場が設けられている為によく判る。

自分にとっても上官である軍務將軍キシエータとティナンが顔を突き合わせて何事かを話していたのだが、出入り口の重いカーテンを開けられ入室したルディエラの存在に気付いたティナンが顔をあげ、こちらへと一歩踏み出すと、途端にルディエラは多少顔を引きつらせた。

兄さまといえるなら、おそらくこんな奇妙に気苦労は無い。

兄として接することもできず、上官として接することもできないという状態がルディエラにとってどうして良いのか判らなく戸惑わせるのだ。

「踊る、無理です」

ふいに、ルディエラの耳に引つかかるような女性の声が届いた。
「ごめなさい」

その独特なイントネーションに慌てて視線をめぐらせれば、煌びやかな女性のドレスが溢れる中、一人他国の民族衣装を着用し、ヴェールで顔を隠すようにして立つ女性の姿にルディエラは慌ててそちらへと足を向けた。

会場内の揉め事を回避するのはルディエラにとっても仕事のうちだ。だがそれ以前に、その特徴的な外国訛りの女性は、ルディエラにとって身内であった。

「すみません」

ドレスの裾をつまみあげ、出来る限り女性らしさを心がけて足を向ければ、別段その女性が無理強いされている訳ではないということに気が付き、ほっと息をついた。

「ナーナ」

男性が非礼を詫びて引き下がるのを見守り、そっと相手に声をかける。

今の姿——髪にドレスという姿に相手の女性が自分に気付いてくれるかどうか怪しいとは思うものの、心配が先について声を掛けていた。

ヴェールの奥から黒い瞳がこちらを見つめ、やがてその瞳に安堵の色が浮かび上がる。

紅に染められた唇が笑みを刻み、この国では滅多に見ない、黒い髪と褐色の肌を持つ女性は微笑んだ。

「エーラ？」

返された名にほっと息をつく。

「まあ、ルディエーラ。いつも違う、オナノコ」

この国に来て四年のナーナは、ルディエラにとって家族だ。

伸ばされる手に親愛の思いを込めて触れ、ルディエラは久しぶりに会った相手に尋ねた。

「クインザム兄さまは？」

「クイン、ヘーカ、呼ばれました」

たどたどしいが、最近ではこちらと同じ言葉を話せるようになったクインザムの妻は、美しい微笑を湛えてみせる。

その笑顔を見るとルディエラは嬉しくなってしまうのだ。

「兄さま、ナーナをおいていくのは渋ったでしょ。ナーナも心細くない？ 寂しい？ 大丈夫？」

長兄であるクインザムの妻であるナーナを、クインザムはまるで籠の鳥を愛でる様に慈しみ溺愛している。

こんな場に連れてくることも滅多に無いのだが、外国人であるナーナとクインザムの婚姻には司祭長リルシェイラの尽力もあつてのことだと聞いている為、リルシェイラの為の催し物には出席せざるをえないのだろう。

ルディエラの無邪気な問いかけに、ナーナは相変わらず美しい満面の笑みを湛えながら言った。

「クイン、死ねばいい、思います」

「あー……」

まだ言葉が不自由だなー……

「鬼畜、駄目」

不自由だけど、ある意味達者。

何がどうしてこんな風に間違っ言葉覚えてるのだろうとル

ディエラは頭を抱えなくなったが、クインザムがナーナを家から出さないのもうなずける。

こんなに言葉が不自由では、外に出してはトラブルの元だ。確かに多少厳しさを持つクインザムだが、決して鬼畜などという人間ではない。

何より、あくまでもナーナは満面の笑顔だ。

「うん、えっと……そうだね」

とりあえずディエラは親愛なる兄嫁に引きつった笑みで応えることにしておいた。

無難に。

その5

ルディエラがナーナと遭遇していると、近くにいた衛兵が気づき「何かありましたか？」と声をかけて来た。

どうやら一人にする妻を心配したクインザムが、しっかりと人を頼んだらしい。

ルディエラは自分の仕事を思い出し、ナーナをもう一度ぎゅっと抱きしめて「仕事だからまたね」と声をかけた。

クインザムと顔を合わせるのはちょっとばかりご遠慮したかった為だ。

先日クインザムに抱きついて子供のように大泣きしてしまったのも、かなり気恥ずかしいし、久しぶりのドレス姿もなんだかくすぐったい。

「ぼく騎士になる為にがんばるからね」

とクインザムに力強く宣言までしたのに、再会がまさかのドレス姿ではちよつと情けなさ過ぎる。

「えっと、夫婦喧嘩とか、何か困ったことがあったら相談してね？」

先ほどのナーナの暴言がちらりと引っかかってしまった為に言葉を付け足すと、ナーナはルディエラの頬に唇を寄せて、いつもと同じようにくつきりとした大きな目をやわらかくした。

「大丈夫、クイン時々憎たらし、でも——嫌い、ない」

褐色の肌を赤らめて言う兄嫁に、思わず自分の格好も忘れ「くそっ、かわいい」と暴言を吐いてしまいそうになったルディエラだった。

ベイゼルが見たら、まさにいちころだろう。

ああ、でもナーナはどちらかといえば豊満ボディではないから、ベイズルの範疇外かもしれない。

——やはり男性は胸が大きいほうがいいのだろうか。

思わず詰め物満載のあげく、セイムに「足りない」とまで言われた胸に視線を落とし、むむむっと眉間に皺を刻み付けてしまった。

いや、どちらかといえば胸より胸筋のほうがいいか。
平らでもいい。しつかりとした胸筋。

ああ、どうして本当にぼくってば男に産まれて来なかったかな。女を捨てていない筈のルディエラだが、あやうく女を捨ててしまいそうな断崖のかけっぷち。

「ルディエラ」

阿呆な思考を頭の中で繰り広げていたルディエラは、危うく裏返ったような声音で「はいいい？」と声を張り上げそうになり、慌てて自分の手ではりと口元を覆いつくした。

「遅かったね。バネットに苛めらなかつたかい？ 苛められたら言いなさい。どうにかしてあげるから」

ティナンは心配そうに眉を潜めてルディエラに言うと、さっさとその二の腕をつかんで歩き出す。

「どうにかって……」

具体的にはいったいどんなことを？

引きつったまま問いかけると、ティナンは一瞬だけ真顔になり、にこりと微笑んだ。

「どうにか」

「——えっと、フィルドさんとは最近仲良しです！ 実は結構いい人かなーって」

意味不明の「どうか」に恐怖を覚え、慌ててフィルドの弁解を試みたルディエラだったが、思い切りそれがマイナスになったことは言うまでもない。

「へーえ？」

ベイゼルがこの場にいたら腹を抱えて笑いを堪えたであろうが、あいにくとベイゼルは中庭警備の為に不在のため、ルディエラはこの兄の「へーえ？」の意味を推し量ることは無かった。

「まあ、バネットと言わず意地悪されたら言いなさい」

——兄様。

ルディエラは久しぶりの兄の優しさを気色悪いなど思っていた事実を完全に忘れ去ることにした。

ただ単純にティナンの言葉に喜色を覚え、思わず兄の腕に抱きつくようにすがりついたのだ。

もはやその虐めの筆頭が、その言葉を口に行っている優しいはずの兄であることは念頭には無い。脳みその記憶中枢すらも筋肉に侵されているルディエラにとって、そんなことは瑣末ごとでしかないのだ。

「兄さま、大好きっ」

やっぱり兄様は誰よりも優しくて、素晴らしい。

ぎゅっと抱きついた妹にバランスを崩されつつも、ティナンは自分の中でぶつりと何かが切れた音を聞いた。

——兄でも妹でもないかもしれない。

それはティナンにとってもものすごく大きな問題だ。

もし、ルディエラが血の繋がらない他人だったら自分はルディエラをどう思っただろうか。妹だから愛しているのだろうか？

妹……

ふっと、意識が遠のいてしまいそうになってしまった。

「ルディ……」

「あつ、ごめんなさい！」

兄さまと不用意に言ってしまった拳句抱きついてしまったことに、ルディエラは慌ててぱっとティナンから手を離し、わたわたと一歩退いた。

面前のティナンは苦しそうに眉ねを顰め、唇を戦慄かせた。

「ぼくも大好きだけれど、でもぼく達はそういう一線を越えては駄目なんだ。判っておくれ。ぼくだっておまえのことは大好きだ。かわいくてかわいくて仕方ない。でも、それでも人間には決して侵してはならない大事なっ」

何故かティナンが片手をぐっと握りこんで熱弁を奮いだし、ルディエラはその大きな瞳を見開いて瞬きを繰り返した。

「ああ、でも、でもっ。おまえの気持ちを考えるとぼくはどうしたら。あああ。神様はどうしてっ」

「あの、えっと……え？」

「ぼくだって辛いんだ。白黒はつきりとつけてしまったほうがいいのは判っている。けれど、真実は時として残酷だというだろう？

もし二人の関係が無関係であった場合、ぼくはそれはそれできつとものすごく辛い。ぼくにとってはおまえはやっぱり可愛い——」
「やかましい」

いつの間に壇上からおりてきたのか——いや、おそらく一段高い場所にいる彼にはこのティナンとルディエラの滑稽な漫才もどきが、それはそれは嫌でも見えたことだろう——第三王子殿下は思い切り自分の副官の頭を殴りつけ、自らの護衛として控えている純白の騎士服の二人組みに冷ややかに命じた。

「酔っ払いは隔離」

「ちよつ、殿下つ。ばくお酒なんてっ」

突如無遠慮に殴られた拳句に言われた暴言に、ティナンは痛む頭を押さえながら苦情を申し立てたが、キリシュエータは更に冷たく微笑した。

「いいや、お前は飲みすぎだ。もしくは病気だ。正気を取り戻すまで、リルシェイラの警護につけ」

低く命じつけ、護衛に連れ出されるのをふんつと鼻息も荒く見送ると、キリシュエータは吃驚したまま固まっているルディエラを見返した。

「何をしてるんだお前は」

「……えつと、ばく何かしたでしょうか？」

突然の兄の熱弁がまったく判らない。

頭の中で兄の言葉を反芻してみようかと思ったが、脳内筋肉育成中のルディエラにはいまいちわかり辛い。

かろうじて判るのは、ティナンもちゃんとルディエラを好きだと思ってくれていることくらいで——最近ではすっかり、ただ憎まれているのではないかと怯えていただけにそれは確かに嬉しい発見だ。

しかし、白黒つけるって、いったいその言葉の主語はいつたいどこだろう？

頭の中で言葉をひっくり返したりこねくり回しても結論は出てきうにない。

二人の関係がどうか言っていたが、兄と妹の關係に何か問題があるものなのか？

「兄さま……違った、隊長、もしかして具合悪いとか？」

「——かなり悪い病氣だが、おまえは気にするな」

「って、隊長病氣っ？」

慌ててティナンの後を追いかけていきそうなルディエラの手首を捕まえ、キシシュエータは嘆息した。

「いや、悪かった。ただ少ばかり無理がたたっているだけだ。本当に、微塵も、これっぽっちも気にするな。明日になればもう少し正気になる」

筈だ、という言葉はキシシュエータの口の中で濁された。

最近の彼の副官は、少ばかり信用がならない。

ことこの妹に関しては。

可愛がっていた妹に対して冷たい態度をとるうちに、どうやら思考回路が方向転換をしてしまったようで時々暴走するようだ。

たいていキシシュエータと二人でいる場合のみ暴走していたので生暖かく見守っていたが、さすがに人前での暴走はいただけない。

キシシュエータの説明に、納得のいかない表情を浮かべたルディエラだったが、それでもその言葉に曖昧にひとつうなずいておいた。「それより、せっかくだ——」

どこか疲れたような嘆息を落としたキシシュエータだが、気持ち切り替えるかのように唇の端を持ち上げるようにして笑み、軽く白手に包まれた左手を差し出した。

「踊ってみるか？」

するりと上向きに差し出された指先。

ルディエラが軽く混乱状態に陥っていると、慌しく立ち戻ったティナンと騎士達の姿にキリシュエータは片眉を跳ね上げた。

「まさか私にもう一度命令を言わせるつもりか」

きつい声に、しかしティナンはすでに第三騎士団の隊長、もしくはキリシュエータの副官としての顔を取り戻し、一旦胸元に手を当てて一礼し「失礼します」とその耳に唇を寄せた。

「……………」

小さく囁かれる言葉にどんどんとキリシュエータの瞳に冷ややかさが灯る。

やがて王子殿下という立場では決して歓迎されることのない舌打ちなどを落とし、鋭い眼差しでティナンに「行け」と命じつけ、ルディエラへも視線を転じた。

「戻って着替えろ。中庭のベイゼルの下につけ」

その緊迫した言葉に何事か起こったのだと理解したルディエラも慌てて相手の言葉に従い着替えの為に廊下に飛び出した。廊下に出れば第二隊の人間もどこかあわただしい。

ルディエラは、はじめてのまっとうな任務らしい任務に胸を高鳴らせた。

いやいや、喜んでいる場合では無い。

国の——極内輪だけの催しといえども、そんな場で事件など威信に関わるというものだ。

喜ぶなど騎士を目指す者のすることでは無い。

それでも軽い興奮を覚え、内股にベルトでつけられた真新しい短剣を意識したその時。

騎士隊の隊舎へと続く渡り廊下へと入ったところでルディエラは廊下の窓からふわりと逃れるものに遭遇した。宵闇にゆれる金色は――髪、だろう。

ドキドキと更に心音が高くなり、ルディエラは無造作にドレスの裾をたくしあげ、短剣を引き抜いた。

「不審者発見！」

――果たしてぼくはどうしてこんな場でこんなコトをしているんだろうか。

というか、どうしてこんなことになっているのかな。

ルディエラは自分が殴ってしまった相手を前に途方にくれていた。殴った、と言うのはちょっとばかり控えめな表現かもしれない。とっさに使いたくて使いたくてうずうずとしていた短剣――本日、キリシュエータから拝領したばかりの、太ももの辺りにベルトで固定していた銀剣の後ろ部分で、思い切りガツリとやってしまった相手。

蜂蜜のような豊かな髪は細かいウェーブをつけて結い上げもせず、背中にもゆれている。腰まである髪だが、あいにくと現在はいしゃがんでいる為に地面に直接ついてしまっているのが、なんだかもったいない。

そしてその衣装は、純白に銀糸で縫い取りのされた腰帯で抑えるワンピースのようなもので、肩からはたれ布がかけられている。

宝石類は一切使われてはいないが、その衣装は超一級品。
何故なら、その相手は――

「リ、リルシェイラ様……大丈夫ですか？」

「――そう思う？」

うずくまっている相手は変質者でも狼藉者でもなく――夜会を抜け出そうとしていた今夜の主演であった。

その6

——王族に対しての暴力行為！

ルディエラの筋肉増量キャンペーンまっさかりの脳みそも、その事態が気安い状況ではないことを瞬時に理解していた。

王宮から少し外れた場では、遠い庭の随所にたいまつ火が揺れているが、ここは少し静かに虫の音だけが聞こえている。りりりつと鳴く虫の羽音と、リルシェイラのうめき声。

ざあつと血の気が引き、あわててうずくまる第二王子殿下にして司祭長リルシェイラの頭にがばりと手をかけ——更に不敬な態度であることに気づかないのがルディエラクオリティ。

「うわっ、頭の後ろがぺったんこ？　ぺったんこになってる？　ええ、ああっ、ぺったんこのトコでぼこってなってる、え、たんこぶ？　え、でもどうしてぺったんこ？　なにこれ。どうしようっ。ぎやあ殿下っ」

ぺったんこを連呼するルディエラに、リルシェイラは口元を引きつらせた。

「ごめんね、ぺったんこで、絶壁でっ」

リルシェイラはべしべしとルディエラの手をはたくようにして拒絶し、痛みで半泣きになりながら恨めしそうに見上げてくる。

「どうせ私の頭はそれはそれは見事な絶壁だよっ」

「ああ、ごめんなさい」

「小さいころにキーシュが私のことをいっぱい殴ったのが原因だと

思っただけだね」

どうやら絶壁の頭には相当コンプレックスを持っている様子で、突然殴りつけてきたルディエラを責めるより先に、何故か言い訳のように第三王子殿下キリシユエータの悪行を暴露する。

拳句、

「好きで髪だって伸ばしてる訳じゃないし。細かいウェーブ作るのだっていちいち面倒くさいんだよ。寝づらいし。でもね、ほっとくと絶壁が目立つんだから仕方ないでしょっ」

——聞いてもいないのだが、自ら傷口をえぐるリルシェイラであった。

「あれ、もしかして——キミ」

熱弁を奮ったリルシェイラはじろじろとドレス姿ルディエラを眺め、未だ手にもつ銀の短剣にキリシユエータの紋章を見て、

「第三隊の……コ？ 来月、私の警護隊に入る」
いぶかしむかのように口にした。

——リルシェイラの警護隊。別名をリルシェイラの子守部隊。主な仕事はしょっちゅう行方をくまますリルシェイラの搜索にあるということ、知られているが公言は禁止。暗黙の了解である。

「あ、はいっ。すみません。ぼく、ルディ・アイギルです」

「やっぱり？ 私はね、人間の判断は骨格でするんだよ。だからどんな変装でも結構見破る自信があるんだ。人間の骨は誤魔化しようがないからね。今はとくにドレスだから、体の線が判りやすいからすぐに判った」

何故か得意げに言うリルシェイラに、思わず——

「すごいですね！ でも、ぼくも負けてませんよ」

何故か対抗意識を燃やしてしまったルディエラは、ぐっとこぶしを握り締めた。

「ぼく、筋肉で相手を見分けることができるんですっ」

嬉しそうに言うルディエラに、しかしリルシェイラは微妙な顔をした。

「キミって……変態？」

「何てこと言っんですかつ。筋肉で人を見分けるからって変態って、その決め付けはおかしいですよ」

「だって筋肉で判るって普通じゃないよ」

「それを言うのであれば、骨格で判るのだって相当普通じゃないですよ」

何故か二人で張り合いだしてしまっただが、突然リルシェイラは息をつめ、よろよと立ち上がりながらルディエラの腕をがしりとつかんだ。

「そんなことより、キミの骨格と私の骨格って実は結構似てるんじゃない？」

べたべたとその腕を触る様子は少しばかり犯罪的。

さすがのルディエラも思わず一歩退いた。

「なんですか、唐突に？」

「ちよつとそのドレス脱いでよ」

いいながら突如ルディエラへと詰め寄る相手に、ルディエラは瞳を大きく見開いて「はあ？」と声をあげてしまった。

その声の大きさに、あわててもう片方の手を伸ばしてがばりとルディエラの口をふさぎにかかり、リルシェイラは声を潜める。

王宮から騎士団官舎へと続く渡り廊下を外れた地面での珍事に、ルディエラは口をふさがれながら「ぶほほ？」と妙な声を出す。

「そのドレス、ちょうだい」

「……なふえ？」

「この司祭長の衣装だと目立つでしょ？ 私つてば髪も長いしね。ドレス着れば結構女の子としていけると思う。キミみたいにね」

そおっと口にかかる指を浮かせてくれる相手に、気を使い声を潜めて——それでもきっぱりとルディエラは応えた。

「まったく意味が判らないんですが」

「鈍いつて言われない？」

リルシェイラは嘆息し、やれやれと首をふりながら更にルディエラへと詰め寄った。

「私はね、同じところでじっとしていると死んでしまう病なんだ。だというのに、夜会なんて無理」

「はあ」

至極もつともらしく言いきるリルシェイラだが、勿論そんな病がある筈も無い。動かないと死ぬのはマグロだけにして欲しい。

「だから、キミのドレスを貰って逃げます。了解？」

言うや、ルディエラの後ろに回りこみ、さつさとそのドレスの首筋にある留め金はずしにかかるリルシェイラ——何度も言うように、相手は第二王子殿下にして司祭長リルシェイラ。

本来であれば問答無用で肘裏を叩きつけ、相手が怯んだところでそのまま足を引っ掛けて張ったおすところだが、相手は腐っても王族——自分の行動の判断を見失ったところで、

「いたぞっ」

「殿下っ！」

「殿下発見、簀巻きにしてもとっ捕まえろっ」

——第二騎士団及び、第三騎士団の数名によって第二王子殿下リルシェイラ捕獲。

「——」

肩口までドレスをひん剥かれかけたルディエラの姿に、第二隊フイルドは嫌そうな顔をしつつ自分の上着を脱いでルディエラの肩に掛けてやろうと近づきかけたが、それより先に第三隊副長ベイゼルが自分の上着をさつさとルディエラの頭にはさりと投げかけ、抱え込むようにしてその上からぐりぐりと頭をなでていた。

「ご苦労さん。大丈夫か？」

「ふくちょーっ」

ルディエラは飄々としたベイゼルの態度と口調に、思わずがばりと抱きつき、思いのたけをぶちまけていた。

「ぼくってばもしかして打ち首ですか！」

「へ？——」

「うわぁんっ、ぼくはもう駄目ですかぁあ」

「なにがよ？ え？」

——幸い、ルディエラが王族への不敬罪を問われることは無かった。むしろリルシェイラを捕獲することに協力したということで、ルディエラは第二隊の隊員達——約一名を除く——に偉く感謝されてしまったし、キリシュエータも「よくやった」と褒めてくれた程だ。

「あの、何か事件があつたんじゃないんですか？」

と、おそろおそろの問いかければ「あの阿呆兄が脱走を企てただけだ。王宮中の隠し通路を網羅しているからタチが悪いんだ、アレは」とキリシユエータは忌々しそくに顔をしかめていた。

どうやら軍事將軍といえども、兄には苦勞させられているようだ。

——ルディエラも兄にはちよつとばかり苦勞させられているので、なんとなく同情的な気持ちが沸いてしまう。

あ、でも今日はティナン兄様の心がちよつぴり判つたからいいか。ルディエラはほんの少しだけ前向きにそんなことを思ってみた。

「ああ、留め金が壊れてしまいましたね」

セイムが苦笑しながら言う言葉に、ルディエラはぐつたりと椅子に座つたまま「どーでもいい」と応えた。

はじめのうちこそ丁寧に脱がそうとしていた様子のリルシェイラだが——思いのほかルディエラが抵抗した挙句、他隊員達により発見されてしまった為、驚いた拍子に強引に引つ張り、ぶちりと壊れたのだ。

なんとか不敬罪を免れ、やっと着替えの為にサロン控え室に戻れた途端——ルディエラは思い切り脱力してしまった。

僅かにこの部屋にまで夜会の楽隊の音色が聞こえてくるが、そんなことよりさつさと普段の自分に戻りたい。

「どうでも良くありません」

マーティアはぷりぷりと怒りを表し、手首にわざわざ針山などをセツトし、顔をしかめた。

「何してんの？ もう着替えるんだよ？」

「黙っていらして下さい」

最強侍女はギロリと睨みつけてルディエラを黙らせると、手早くルディエラの襟首の辺りを直しに掛かる。もうドレスなど脱ぎ捨てて隊服に着替えてしまいたいルディエラとしては、そんな侍女の行動が不可解でしかない。

救いを求めるようにセイムへと視線を送ってみたが、セイムは笑いを堪えるようにしてそつと首をふる。

すべてを諦めろというしぐさに肩を落とし、襟首のあたりでチクチクとやられる感触にげんなりとしていると、小さな物音を耳にしてルディエラは視線を上げた。

「はい、これでいかがでしょう」

「すまないな、マーティア」

静かな物言いで礼を口にしたのは、

「クイン兄さまっ」

ルディエラは第三騎士団のサロンの控え室だということを忘れ、がばりと身を起こして思い切り兄を呼んでしまった。

あわてて口到手を当てたが、考えてみれば未だ夜会は続行中——警備はまだ続いている為に、第三騎士団のサロンも人などいないだろう。

クインザムは共に連れて来たナーナに何事かを囁き、妻の許を離れると、穏やかな微笑を称え、すつと手を差し出し、瞳を細めた。

「似合うじゃないか」

「……そう？」

穏やかな口調で言われると、なんだかもぞもぞと居心地が悪いが、当然悪い気はしない。

はにかむように笑う妹に、クインザムは丁寧に胸元に手を当てた。

「着替える前に、一曲踊っていただけますか？」

少しだけ照れくさい気持ちになって、ルディエラは上目遣いに長兄を見たが、そっと首を振った。

「ごめん、兄さま。ぼ——わたくし、ダンスのレッスンはさぼってしまったから」

「ホールに行く訳ではないさ。ここでいい。それなら構わないだろう。私の動きに合わせてごらん」

ちらりと兄嫁であるナーナを見れば、身内しか居ない場と判断したのか、ナーナは頭から掛けていたヴェールを下げ、にっこりとルディエラに励ますかのような笑みを浮かべた。

「足、踏んでもいい？」

「三回に一回踏み返して構わないなら」

ルディエラは抱きつくようにクインザムの手に分の手を絡めた。

もちろん——その様子をハンカチを引き裂きつつ耐えるもう一人の兄の姿があったりするのだが、それは衝立の向こう側のハナシ。

その1

「ああ、いいんだよ。こいつは最後に風呂掃除させときゃ」

ベイズルが言った言葉を、クロレルはいつたいどう判断したのだろうか。

ルディエラは浴室の淵をがしりと掴んだまま、頭がくらくらとどこかにイッてしまいそうなのをなんとか堪えていた。

今まで深く考えたことは無いが、いつもお風呂は最後だった。

それで困ったことは無かった。誰もいない浴場で思い切りのびのびと風呂に入り、それでも最後の風呂だから「お風呂は綺麗に使って欲しいよ、まったく」などと文句を言いつつも片付けもきちんとしていたのだ。

よくよく考えるまでもなく、こういった騎士団などでは風呂など大人数で入ることのほうが多いだろう。今までそういった経験がないのは、ルディエラが見習いとして最後に浴場の片付けをする——そういう名目があった為だ。

騎士団に見習いとして入ったときからこうなのだから、自分でも疑問にすら思っていないかった。

もちろん、ルディエラが女であることを知っているベイズルの配慮なのだが、ルディエラとしては「見習い」はそういうものなのだろうとしか思っていなかった。

拳句、いつも掃除ってばく可愛そうくらいに思っていたくらいだ。

「なんだ、まだ入っているのかい？」

本日、第二王子殿下リルシェイラが隣国への遊説に出立し、残さ

れた第二隊の三分の一を率いるクロレルは第三騎士団との訓練に入
った。

それにあたり、クロレルが提案をしたのだ。

「外遊の為に従卒などの人数も減っている。よければ風呂場を共用
させて下さい。風呂洗うのはこっちでやるから」

と、気さくに言っただ。

別段おかしいことではない。何事も経費の削減は唱えられているし、
確かにたかが十数名の為に巨大な風呂を用意する手間もある。

ルディエラとしてもどうでもいい部類の提案だ。

いつもと何も変わらない。難点があるとすれば、いつもより風呂の
時間が遅くなる程度の話だったのだが――

「長風呂だな」

クロレルが苦笑と共にルディエラの入っている湯船に足を踏み入
れた時、ルディエラの頭の中は完全に真っ白になった。

クロレル副長、細いのに腹筋割れてるとかそついうの抜きで。

「な、なっ、な……なんでクロレル副長が？」

「ぼく、順番間違えましたかっ？」

「いや。私はいつもゆつくりと入りたいタチだから最後に風呂を使
ってるんだ。大勢がわいわいやっているのもうるさいからね」

湯船の淵にがしりと張り付いているルディエラと違い、クロレル
はそれほど深くない湯船を歩き、一番奥まで行くと、ゆったりと腰
を落ち着かせた。

おそらく、現在はルディエラの頭が見えていることだろう。

肩すらまづいかとルディエラは更に身を沈めながら、半泣きでただ
前方を見つめた。先ほどクロレルが入ってきた出入り口の辺りを一

心不乱に。

——見た。今、確実に女の子として見てはいけない感じのものを見た。

いや、男兄弟の中に育ったのだから、見たことが無いとは言わない。確か六歳くらいまでセイムと一緒にになって川遊びもしたから、セイムのだって見た。

ああ、そうだ。見たことがある。見たさ。はじめてじゃないもんね。なんかでもイメージとちが……いや、深く考えては駄目だ。駄目だつてば。

大丈夫だ。

ルディエラ——大丈夫だ、落ち着け。

こんなことは大騒ぎすることじゃない。

そうだぞ。見たから何だつて言うんだ。

と、なんだか判らない応援^{キル}を自分相手に必死に送るルディエラだが、すでに頭は煮えている。

せめて手で隠して入って来てよっ！

心がさめざめと泣いているが、もちろんクロレルにそんな義務は無い。

男しかいない筈の浴場にのんびりと浸かっていた見習いが、まさか女性であるを知っていたら、堂々としてくることもなかっただろう。

「アイギル、風呂の片付けはやっておくから。先に出て構わないよ」
クロレルが穏やかな口調で言うのを背中から聞きながら、ルディエラはばくばくと鼓動する心臓を宥めた。

「い、いえっ。片付けはぼくがやりますからっ」

「いつも風呂の片付けをさせられているんだろっ？ たまには構わないさ」

その親切が仇過ぎる。

本来であれば「クロレル副長はベイゼル副長と違ってすごい親切だっ」と絶賛したことだろうが、しかし今は到底そんな気持ちになれない。

「そういえば、最近はフィードとうまくやってるみたいだね」

「フィルドさんとは仲良しですっ」

無駄に高い声で言いながら、それでも相変わらずがっしりと風呂の淵をつかんでいると、背後からクロレルが喉の奥を鳴らした。

「おいおい、そんなに緊張しなくてもいいじゃないか。確かに君にしてみれば上官かもしれないけれど、ベイゼルと同じ副長っていうだけだよ」

別の意味の緊張だが、当然そんなことを推し量れというほうが無理がある。

「それに、半月程は同じ訓練を受けることになるんだから仲良くしよう」

いえいえ、半月どころかもう一月と半月です。

ぼくつてば第二隊への移動が確定してますから。でもちよつと色々心配なんです。だってぼくリルシェイラ様の絶壁頭にたんこぶをこしらえてしまったから。今日辺りまだたんこぶが残っているのではないかと危惧しております。

という軽口も簡単には出てこない。

だらだらと玉のような汗が浮かび、つーつと頬を流れていくのを感じ

じながらルディエラはただただ羨望の眼差しで出入り口を見つめていた。

背中だけを見せていれば女だとバレない――

そうだろうか？ 華奢とはいえ、適度に筋肉はついているしセイムの太鼓判を押されたまな板胸は……

ルディエラはつつつと視線をゆっくりとさげ、そおっと自分の胸元を見てみた。

――なんかちよつと最近膨らんでる気がする。

普段であれば喜んだことだろう。

そおっと自分で自分の胸を触り「もう絶壁だの足りないだの言わせないからね」と言いたいところだが、今はえぐれていたとしても大歓迎。

自分で自分の胸を包むように触れ、ルディエラは肩を震わせた。いやいやいやいや、ちよつと頼りない胸筋で押し通せるんじゃないかな。湯気だつてたっているし！

ルディエラは意を決し、そおっと背後のクロレルの様子を伺う為に振り返ってみた。

壁側に頭を預けるようにして入浴中のクロレル副隊長は、実にのんびりとした様子で頭にタオルをのせて目を閉じている。

それを見た途端、ルディエラは瞳を輝かせてくるりと前方へと視線を戻し、一気に退路へと思想をはじけさせた。

気配を消して音をさせず、湯船から出て一気に脱衣所へという動きが頭の中で再現される。何も言わずに逃げるように出て行くのは実に失礼だが、脱衣所とこの浴室とをつなぐあの扉の向こうから顔だ

けを出して「お先に失礼します！」と言い切ればこのミッションは完璧にコンプリートだ。

よし、大丈夫だ。

ぼくならやれる。身の軽さには自信がある。

まずは湯船を軽やかに出るのだ、ルディエラ！

「そういえば、今日の訓練では——」

湯船の淵に手を掛けようとした途端、背後から掛けられた言葉に危うくルディエラはずりすべって顎を打ち付けそうな程に動揺した。

バシャンと無駄に大きな音をさせて手が湯を叩く。

それに驚いたクロレルが瞑っていた目を開けた。

「アイギル？ 風呂場では暴れるなよ」

「す……すみません」

「もう子供ではないのだから。まさか泳ごうとしていた訳じゃないだろうね」

そんなことはしていません。

ルディエラは背中を向けたまま棒読みで返しながら心の中で涙を流した。

先ほどまで頭の中で描いていた「第三騎士団浴場脱出作戦」ががらがらと音をさせて崩れていく。

こんなにも困難な作戦は今までに無かった。

「今日の訓練で怪我をしただろう？ 大丈夫だったかい？」

「ああ……あれは、だいたいいつもあんな感じですから」

昨日、優しかったティナン兄は、日付をまたいだ途端に鬼隊長に戻っていた。

それを思うとルディエラは湯船の淵に落ち込むように顎を預けた。判っていたことだが、兄の豹変振りはある意味賞賛に値する。あそこまで公私を分けることができるのは立派だ。

ただ、ルディエラにしてみれば寂しいが。

ふと、本日訓練中にルディエラが怪我をした時のティナンの何ともいえない表情を思い出してルディエラは身震いしてしまった。

剣先をよけきれずに二の腕を切ったルディエラに舌打ちし「愚か者、この程度よけずにどうする。貴様は幾度死ぬ気だっ」と怒鳴られるのはいつものことだ。だが、今日のティナンはルディエラの傷口をぐつとつかみ、自分の塗れた白手をぺろりと舐めた。

そのしぐさが……腹の奥が冷える程に怖かった。

そう、怖かった。

その凄絶さを振り払うように、ルディエラは軽く首を振った。

「あ、でもぼくよりフィルドさんのほうが酷くやられてた気がしたけど——フィルドさん大丈夫かな」

ルディエラはがばりと顔をあげ、視界に入る脱衣所と浴室とを隔てる扉が押し開かれるのを見てしまった。

そう、脱衣所のほうから開かれるさまを。

「ああ、フィード。おまえも風呂最後か」

——クロレルの言葉に、ルディエラは更に深く湯船に沈んだ。

「家族というのは、どうやったら判別が利くものだろう」

王都から馬で駆けて一刻程の場所に作られている寄宿学校等の一角に、その塔は抜きん出た高さを誇って存在する。

別名【賢者の塔】——国で一番の蔵書を誇る図書館であり、資料館であり、そして限られた研究者達が研究にいそしむ為の地。

突然現れた三男ティナンの言葉に、四男ルークはしばらく兄を見つめ。

「どっち？」

と返した。

「……どういう意味だ」

「上、下？」

無表情で言われる言葉をじつくりと吟味し——ティナンは額に手を当てた。

「下」

「……半年と二十一日ぶりだ、ティナン兄さん」

「おまえまでぼくとクイン兄さんを見分けるのが困難なのか」

確かにティナンとクインザムは似ているといわれているが、だからと言ってそうそう間違えられることは無い。クインザムの方が身長は高いし、持っている雰囲気といえば冷徹。あの兄と一緒にされるのは、あまり良い気がしない。

「困難とは言っていない。面倒なだけだよ」

ルークは言いながら小首をかしげた。

歴代三位の若さで【賢者の塔】入りを果たした青年は、時折理解不能な言動をとる。

腰まである髪をゆるい三つ編みにしているルークは、外見を気にかけている訳ではなく切るのが面倒という理由で髪を伸ばしている無精者だ。

「で、何しに來たつて？」

「家族の判別は何か無いかと思つて。たとえば――血の味が、違ふとか」

ティナンはふとルディエラの血を舐めた時の味を思い出し、小さく笑つた。

ルディエラの二の腕を傷つけ、そこからあふれた血に胸が激しい程痛みを訴え、その血が自分の白手を汚したのを見た時、無造作に舐めていた。

自分の血の味と違う気がした……酷く甘い気がして、何故か落ち着かない気持ちで弟を訪ねてしまったのだ。

血の味など、判りようもないのに。

そんなことで判るのであれば、王族の処女判定など必要はない。自分でも判つてはいるのだ。

「安心して。クインとティナンは間違いなく兄と弟だ」

ルークの言葉に、ティナンは引きつった。

「誰がそんな心配してますか」

「けど、ぼくとルディは違ふかもしれないな」

ルークの言葉に、ティナンは息を詰めた。

とくとくと心臓が激しく鼓動する。まさかずばりと確信をつくような言葉をルークが言うとは思っていなかった。

耳鳴りまでしてきそうな緊張に、口の中が乾いてくる。

ごくりと生唾を飲み込み、ティナンはゆっくりと——あせらずにゆつくりと問いかけた。

「その根拠は？」

「ぼくと兄妹にしては、ルディエラは馬鹿すぎる」
「……」

どっこいだよ。

ティナンは激しい脱力を覚えたが、おそらくキシシュエータがいたのであれば「おまえもな」と付け足してくれたことだろう。

その2

——あの光景は、ある意味凄絶。

フィルド・バネットは所々痛みを訴える腕を軽く揉み解しながら、慣れない渡り廊下を歩いていた。

午前中に他国へと遊説に行く第二隊の三分の二の面子と第二王子殿下リルシェイラを見送り、その後は第三隊の訓練に参加した。

初日ということもあり、全員の顔を覚えられるようにと第三隊と第二隊の三分の一の人間全てでの訓練は、隊長副隊長も交えての打ち込みとなった。

使用されている剣は訓練用の刃をつぶし模造剣だ。そんなものでも、突けば刺さるし、かすれば切れることもある。

それにしても、第三隊のティナン隊長の鬼畜っぷりが今も目に焼きついている。

突きつける切っ先、ふっと一度止めてこちらの安堵を誘った途端に容赦なく振り切られる模造剣。

何度も言うが、刃がつぶされているといってもそこまでする人間は少ない。まるで憎まれているのかと疑う程の鋭さ。

思い出してぶるりと身を震わせ、そしてフィルドは顔をしかめた。

——血が、滲んでいた。

ティナンの操る模造剣がルディ・アイギルの腕をかすり、その先端が隊服の袖を引っ掛けた。その反動で生身の腕を傷つけたのだらう。

二の腕の辺りに血が滲み、明るいオレンジ色の小生意気な子供は歯を食いしばり、それでも相手に立ち向かうかのように自らの剣先

でティナンの剣を跳ね上げようと動いた。

しかし、ティナンはそれを自らの剣で逆に弾き、あろうことかあのチビ助の腹を蹴りあげ、血が滲む腕をつかみ上げたのだ。

「愚か者、この程度よけずにどうする！ 貴様は幾度死ぬ気だっ」

轟く罵声に身をすくめたのは一人や二人ではない。

噂には聞いていたが、これは確かに――虐めと谤られてもおかしくはない光景だろう。第二隊の副隊長であるクロレルが、小さく舌打ちするのをフィールドははじめて聞いた。

ティナン隊長は特別待遇で途中入隊したルディ・アイギルに厳しすぎる。

本来であれば――たとえそういつた話を元に虐めがあつたとしても、隊員同士のことだろう。悪しき慣習ともいえるが、叩き潰そうにも人間の悪感情など叩き潰せるものではない。だが、ティナンの所業が原因か、幸いルディ・アイギルは個人的な悪意を向けられてはいないという。

――ただただ、第三隊隊長ティナンに激しい訓練という名の悪感情を向けられているのだ。

丁度切られた箇所をつかみ上げたティナンの白手が滲むように朱に染まる。

そのぬれた手を、ティナンは冷たい眼差しで自らの顔へと向け、ペロりとその舌先で舐め上げた。

その姿に、ぞくりとしたものがフィールドの背筋を駆け抜けた。

寒気のような、嫌悪のような――怒りのような、奇妙な感情が腹の中でざわざわとわきあがる。

——まさかその後で自分もティナンに叩きのめされるとは思っていなかった。

もしかしてあの隊長は誰に対しても同じなのかと思ったが、

「違うな……」

明らかに厳しい訓練をさせられたのはルディ・アイギルとフィルドの二人だけだった。

「何か恨みでも買ったか？」

嘆息を落しながらフィルドは慣れない第三隊の浴場の扉を開いた。

普段は第二隊の隊舎に作られている大浴場を使用しているが、たかが十名足らずの第二隊の人員の為にそこを使うのはもったいないと

——第二隊のもったいないお化けクロレルが提案したのだ。

本日の打ち身が原因で風呂時間が遅れたが、クロレルのことだからきつとまだ入浴中だろうとふんだ通り、親愛なるクロレル副長殿は湯船にどっぷりと浸かっていた。

——ルディ・アイギルと共に。

顎下まで湯船につかりつつ、ルディ・アイギルことルディエラは目線をぐっと下げた。

男という生き物はどうして堂々と浴室に入ってくるんだ。隠すことはちゃんと隠せ。羞恥心が無いのか。それともまったく別問題なのか。

ルディエラは頭の中で呪いの言葉を羅列しつつ、湯船の淵をしつかりとつかんだままの自分のふやけた手を見ていることしかできない。

視線を上げると、フィルド・バネットの引きつった顔が入る前に

その裸身に目が行ってしまいそうだ。

筋肉だけならいくらでも見たい。盛り上がってつやつやとした麗しい筋肉達であればいくらでも。

だが、パンツはぜひとも穿いておいて欲しい。

「アイギルっ」

フィルドがぎょつとしたように声をあげ、ルディエラは視線を落としたまま不機嫌に「どうも」と返答した。

ここで不機嫌を出すことは得策ではないが、もうなんだか自棄になっていく自分がいる。

せめて浴室にタオルでも持ち込めば良かったと今更ながら後悔してしまうが、もともとそんな習慣は無いし、何より普段であればルディエラは一人で悠々自適な入浴時間をすごしていたのだ。

——それもその筈。

ルディエラがのんびりと浴室でほうけている間、いつもであればベイゼルが脱衣所で一人番人よろしくカード占いなどして時間を潰していた。

だが生憎と、本日は第二隊の面子も第三隊の大浴場を利用した為に、時間にズレが生じてしまっていたのだ。

ベイゼルの親切心など欠片程も気づいていない脳内筋肉ルディエラはベイゼルの存在など完全無視で風呂場に来ていた。

「何してるんだお前っ」

思わず風呂場でルディエラに遭遇してしまったフィルドがギョツとして声を荒げると、湯船の奥、窓際で座っていたクロレルが嗜めるように口を開いた。

「フィード、ここは第三隊の浴場だ。アイギルがいたっておかしくはないだろう」

言われるまでもなくその通りだが、ルディエラに対して色々な感情を持っているフィルドは顔をしかめ「肩まで浸かりなさい」と窘められた子供のように、どっぴりと湯に沈んでいる明るい髪を見た。

すでに洗われたと思わしきオレンジ色のような髪は艶々と塗れてぺったりと張り付いている。

その髪は絶対に石鹸だけではなく仕上げに卵の黄身を使っているだろう。最近貴婦人ばかりでなく、軟弱な男も使っていると聞くが、嘆かわしい。

湯に触れた髪先端がふわふわと湯の中に泳ぎ、何故かうつむき加減の糞ガキは湯中りでもしているのかと馬鹿にしてやりたくなる程頬が赤い。

「……おまえ、どれくらい入っているんだ？」

思わずフィルドは眉間に皺を刻み、自分も湯船に足を踏み入れながら言いつつ——つと上げられた透明な眼差しに、狼狽した。

「ばく長風呂なんですっ」

言った途端に、ルディエラは視線をまたしても落とす。

危うく相手の裸を凝視しそうになってしまったの行動だったが、フィルドは一瞬あげられた濡れたような瞳と、赤い頬に——どくんつと心臓が爆ぜるのを感じ、あわてて湯の中に体を沈めた。

——なにを考えてるのだ私は！

このところアレは男だと呪文を唱えている自覚のあるフィルドは、思い切り近くの壁に頭をがんと打ち付けて、自らの思考を全て粉碎してしまいたい衝動にかられていた。

——違う、絶対に違う。自分は女が好きだ。

たとえば、この糞ガキの女装が似合っていたとしても。その唇が柔らかかったとしても！

何があるうと男など御免こうむる。

——私は変態じゃないつ。

「アイギル、私より先に入っていたらどう？ 本当に大丈夫か？」
クロレルが苦笑交じりに言いながら体を洗う為に湯船を出ると、ルディエラはまた違う方向に視線を向けつつ「はいっ。ぼくいつも半刻くらいお風呂入ってるんですっ」と言い切った。

なんとなく居心地の悪いフィルドは、先ほどクロレルがいた場所に移動し、壁に背中を預けるとルディエラの頭をじっと見つめた。

クロレルがしきりに話しかけている言葉に応える為か、沈んでいた肩が浮き上がり、その体に髪がべったりとまとわりつく。少し長い髪は首の下辺りまであり、最近はずつとずしいというように良にかきあげているのを目撃していた。

その髪をベイゼル・エージ副長がしがしとかき回しているのも良く見る光景だ。

——それを見ると、なんとなく……そう、なんとなく、イラダツよくな気がしてしまう。

今日も、怪我をした糞ガキの腕をティナン隊長が突き放した後、ベイゼルはさつさと反対側の腕を引き上げてルディ・アイギルを医務室へと引き立てていった。口は悪いが面倒見の良いベイゼルに、糞ガキはなついているようだ。

湯からこんもりと出た肩をよく見れば、痣が目立つ。

湯船の淵にのせられた二の腕には本日切れたであろう擦過傷、痣——おそらく、腹や背にも眉を潜めてしまいそんな痕跡が見られると

思うと、フィルドの視線は自然と湯の下に続く背へと向けられている。

細い肩は未だ未発達な子供のソレだ。

確か、年齢は十五だとか聞いたが、まだぜんぜん子供じゃないか。その子供相手に苛立ちを抱えている自分に顔をしかめ、フィルドはその華奢な背中にある痣に、ふつと手を滑らせた。

「痛そうだな、大丈夫か？」

ほんの少しの歩み寄りのつもりで掛けたものに、けれどルディエラは「うわあああつ」と悲鳴をあげ、まるで海老のような動きでずざざざつと風呂桶の端へと逃げた。

「なっ、何するんですかっ！」

ルディエラの立つ向こう側でクロレルがガシユガシユと頭を洗いながら「風呂場で騒ぐなよ」と笑いながら言っている。

「痛そうだから触っただけだ」

あまりな反応にムツとして言えば、糞生意気な小僧は大きな瞳で睨みつけてくる。

「痛そうだから触るって、人が嫌がることをするのは駄目人間ですからねっ」

——って、それはお前だろう。

素で突っ込みを入れてしまいそうになったところで、フィルドは眉を潜めた。

ルディ・アイギルの目が重そうにとろんとしているし、頬は赤い。良く見れば肩なども真っ赤になっているではないか。

なんだか色っぽい……いや、そうじゃなくて。艶っぽい。
だから、そうじゃなくて！

「おまえ、本当に湯中りしてないか？」

——何故そんなに意地になって風呂に入ってるんだよ。
言おうとした途端、湯に浸かっている糞ガキの体がぐらりとかしいだ。

「アイギルしらね？」

ベイゼルはがしがしと頭をかきつつ食堂で部下の一人に問いかけた。残務処理など大嫌いだ、ティナンの姿が無いために、仕方なく仕事をきっちりとなしたまでは良かったが、気づけば問題児の姿が無い。

風呂に行く時はいつもベイゼルの後だから安心していただけ、
そもそも今日は風呂の時間が大幅に変わってしまった。

ベイゼルが「風呂行つて来いよー」と言うまでもなく、

「ああ、風呂ですよ。さっき入るように伝えておきましたから」
と、親切なユージンが顔をあげると、ベイゼルは「ゲっ」と思わず
呟いてしまった。

「つたく」

第三隊の大浴場へと向かう渡り廊下を歩きながら、ベイゼルは自分の髪を両手でがしかき混ぜながら「面倒なことになってねえだろうな」と半ば冗談で口にしていただけだが、脱衣所の扉に手

を掛けるその時――

「うわあああつ」

と聞こえるその声に、ベイゼルはがつくりと肩を落とした。

――色気のねえ悲鳴。

「ってか、こっちがうわあだよ」

面倒くせええええ。

その3

くらりと頭に靄がかかるような感覚、ふっと気を抜くとそのまま後ろ向きに倒れてしまいそうな気だるさに、ルディエラは力つと目を見開いてふらつきそうな下半身に力を込め、無理やり体制を整えなおし、がしりと片手で浴槽の淵を掴んだ。

「ふ、ふははは？」

ぐらりとかしいだ体をあわてて支えようと伸ばされた手を避けるように、横にずれる。

不自然に合わさるルディエラとフィルドの視線。

見つめあいながら、ルディエラの口から奇妙な——というべきか、奇怪というべきか、危うい声が漏れ出ていた。

「大丈夫、なのか？」

引きつるフィルドに片手を突きつけ「なにがですかあ？」と言うルディエラは一見して大丈夫ではない。

おかしい緊張をはらむ浴室。

ざばりと頭を洗っていたクロレルが犬のようにぶるぶると頭をふり、何故か浴槽の隅で奇妙な対峙をしているフィルドとルディエラに首をかしげたが、もちろんルディエラはそれどころではない。

頭がくらくらする。

確実に湯中りしている自信がある。

靴底の金貨を賭けて間違いない倍化できるくらいの自信だ。セイムがいたら「賭けよう」と持ち掛けてやっていたことだろう。

「絶対にイヤだ」とセイムは逃げるだろうけれど。それくらい間違
いなく湯中りしている。

だが、だからといって「お先に」と湯から出て行ける状態では
ない。

このままこの場にいるのは大変危険だ。

風呂場でぶったおれてフィルドやクロレル相手に「実は女の子で
したー」とばれるのはシャレにならない。

風呂場で、全裸で！

駄目だ。

もう何が駄目なのか理解できないくらい駄目だ。

「ふ、ふははははははは」

なんで笑えてくるのか理解不能。

フィルドは奇妙な生き物を見る眼差しで「おい？」と手を伸ばして
くる。更にそれを避けて、何か言つべき言葉を搜しているというの
に――扉は三度、開かれた。

「ういーす」

浴室と脱衣所をつなぐ扉を開き、その枠に寄りかかるようにした
ベイゼルが暢気な調子で「うちのいね？」と声をかけてくる。

その時のルディエラの絶望感は次元を突き抜けた。

浴槽にはフィルド。洗い場にはクロレル――出入り口にベイゼル。
前面に虎、後門に狼、中間地点にコモドドラゴン並みの脅威だ。

もう、終わりだ。

もうばくは色々と詰んだ。

ここてばくの性別はばれて——ばれて、ばれたらどうなるのさ？

騎士団は女子禁制だが、そもそもルディエラを騎士団に放り込んだのはトウモロコシの髭、もとい第三王子殿下キリシュエータだ。文句があるのであれば髭に言え！

何故か気が大きくなっているルディエラだが、思考回路がすでに「女の子」として間違っている。

全裸の自分の体を他人に見られるかもしれないという羞恥心以前のところで混乱しているのだ。

そう、周り全てが、敵だ。

脱衣所にはいくつか棚が作られ、その棚が三つ埋まっている。

人間性が良く判る感じで。

一番ぐちゃりとしているのは、間違いなく件の問題児、ルディエラだろう。あの小娘は家人に甘やかされていたのか、自分の身の回りのことに無頓着すぎる。

実際、同じ部屋で生活しているベイゼルは、決して見てはいけないものを幾度か目撃してしまったことがある。

何を、と問われると口を噤んでしまうが、いわゆる——女性用の下着の類だ。

普段から男装に慣れているルディエラだが、女性としての自分を捨ててはいないようで腰巻は女性用だった。

否、よくある女性用ズロースとは違うのだが。

確かに簡素といえば簡素なのだが、丁寧に刺繍やらレースが付け加えられているものは決して男性用下着ではない。何より、男性

は腰巻など付けない。

何の為に男性用のシャツが長いかといえば、そこは推して知るべし。

——つまり、何が言いたいかといえば、男臭い騎士団の官舎、寮で女性用下着を持ち込む者はいないということだ。

ある種の趣味の持ち主でなければ。

そんな抜け作の世話をよく今までやってこられたと自分を褒め称えつつ、ほんの少しばかりこの先第二隊に移動になった場合どうするんだと心配になってしまう。

移動して第二隊に移って目の前から消えたとしても、なんとなく自分の心労が減る気がしないのは何故であろうか。

嘆息しつつ、ちらりとベイゼルは他の棚を見た。

ルディエラの隊服とは別に、二人分の衣装。

大浴場の中には二人の男とルディエラがいるということになる。もし、今現在ルディエラの性別がばれて、なおかつ女性としての危機であるのであれば、

「ま、あんな阿呆な悲鳴の訳ねえやな」

それでももし万が一の場合に備え、ベイゼルは自分の腰の細剣をたんとんと叩いた。

しかし、意を決してベイゼルが浴室と脱衣所をつなぐ扉を開き、呑気な調子で「うちのいね？」と声を掛けたものだが——幸い、風呂場にいた男二人は、ベイゼルにとって何とかかなりそうな二人でしかなかった。

突如として現れたベイゼルの存在は、ルディエラの脱出作戦を更に困難なものへと塗り替えた。

浴場に顔を出したといっても、ベイゼルは未だ隊服を着用しているし、その腰には細剣まで吊るしたままの状態だ。

何より、どうやらルディエラを探していたという様子が、更にルディエラを窮地に叩き落していた。

もしここで「さつさと出て来い」と言われた場合、どうしたら良いのだろうか。

ざばりと立ち上がってベイゼルの居る脱衣所へと抜ける扉に行くなど言語道断だ。隠しようがない。

そもそも、この場合はいったいどちらを隠すのが正解なのだろう。胸か？

それとも下半身か？

胸なんざ胸筋で押し通せるか？

だとすれば下腹部をなんとか両手で隠して……って、えっと、男性のあそこの部分って手で隠せるものなの？

そう思った途端、本日はつちりと目撃してしまったクロレル副隊長の問題の場所を瞬時に思い出し、ルディエラは危うく「ぶはーっ」と噴出してしまいそうになった。

むりむりむーりい。

いやいや絶対に、無理でしょ。

手でなんて隠せないよっ。

あ、でもぼくってば子供だから隠せるくらい小さいってことでどうだろう。

ここまで一心不乱に男性の下半身について考えたことはルディエ

ラの人生において、ない。

おそらくこの時の彼女の思考を敬愛するティナン兄が知ることがあれば、ハンカチを握り締めてむせび泣いたに違いない。

愛しい妹が男の下半身について熟考するなど、ティナンの辞書には存在しないのだ。たとえその熟考が性的な意味合いを完全に含んでいないとしても、恐ろしく噴飯ものであったことだろう。

「おう、やっぱここにいたかーって、クロさんにフォードじゃないか。お疲れさん」

へらへらと手を振って言うベイゼルに、クロレルは苦笑し、フィールドは顔をしかめた。

「クロさんは呑んでる時だけにしたいな」

「エージ副長、何度も言いましたけど私の名前はフィールドです」

冷ややかにフィールドが訂正をいれている間に、ルディエラはつつと浴槽の中を移動して入り口から見て一番手前の角に場所を変え、がしりと浴槽の淵にすぎるように張り付いた。

「副長もこれからお風呂ですか？」

できるかぎり自然に言ったつもりだが、どこか頭がふわふわとしている。

ベイゼルはそんなルディエラをちらりと見ると、入り口付近に積まれている空の桶を一つひよいと掴み、湯ではなく水がためられている水がめから水を一掬いし、桶を満たしながら肩をすくめた。

「ああ、そのつもりなんだけどよお。俺ってばシャイなもんだから誰が入ってるか確認しに来てみた訳だ」

げらげらと言いながら、ベイゼルはそのまま近づき、ニツと口元を歪めた。

途端、ざばりとルディエラの頭の上から冷たい水を勢いよく落とし

込み、それをまともに食らったルディエラはまたしても「うわあああ」と無常な声をあげた。

突然のベイゼルの行動に、クロレルもフィールドも呆氣にとられてベイゼルを見つめた。

「なっ、何するんですかつ」

「おまえね。見習いは風呂は最期って決まってるでしょ。俺がいいって言う前に風呂に入るなつつつの」

冷たい水で火照った体が瞬時に覚めた。

ルディエラはぶるぶると頭を振りながら水気を飛ばしつつ、ぼんやりとしていた頭の覚醒にほっと胸をなでおろした。

ベイゼルからの叱責だとは理解していても、水をかけられたこと自体は素直に嬉しい。

「ベイゼル、いくらなんでもそれは無いだろう。彼が悪いんじゃない——私達が遅い時間に来たのが悪いんだ」

クロレルがルディエラを庇って近づくのを、ベイゼルはがしりとその肩に腕を回した。

「あまーい。クロレル。おまえなあ、こいつを甘やかすんじゃないよ。こいつは甘やかすと凶に乗るタイプなんだ。甘やかすと成長がとまる」

「だからって、いきなり冷水を浴びせるようなことをする必要は無いでしょう」

「おや、フォードってばやけにうちのチビを庇うね？ 仲悪かった癖に」

「フィールドです」

「ぎゃはははと言うベイゼルにフィールドは忌々しそうな口調で応える。

三人が何故か円陣を組むかのような立ち話を繰り返しているのを浴槽の中から見上げつつ、ルディエラはそろりそろりと移動した。

心臓がばくばくと鼓動を早める。

一度水をかけられた為か、何故か今度は体の表面がやけに熱をもっているかのように感じられる。

ばくばくとする心臓、胸元に手を当ててルディエラは瞬時に自分の場所と浴室の扉との距離を測った。

今であればクロレルとフィールドの意識は完全にベイゼルへと向いている。そしてベイゼルはクロレルを引っつかみ、背を向けている。いける！

いけるぞルディエラっ。

今ならばきつと彼らに裸を見られることなくこの場から逃げられる。

完璧だっ。

今度こそ完璧な脱出計画を遂行できる。

ルディエラは浴槽の淵を思い切り引っつかみ、一気に彼らに背中を向けたまま立ち上がった。

ざばりと湯音が響いたがかまうものか。

ここで大事な何よりも早さだ。後ろを振り返ってはいけない。

走れ。今だ。負けるなばくらのルディエーラ！

またしても頭の中で奇怪な歌を歌いながら自分を鼓舞したルディエラだったが、その努力もむなしく、三步程歩んだところで――思いっきり前のめりに倒れこみ、果てた。

「アイギル！」

驚いたフィールドとクロレルが声を上げた途端、ベイゼルは一瞬天井を見上げてしまいそんな自分を押し留め、わざとらしい演技力でもって掴んでいたクロレルを思い切りフィールドへとぶつけ「アイギルどうしたっ」と言いながら、クロレルに張り付いていた為濡れてしまっていた上着をルディエラの裸体の上へと乱暴に投げつけた。

「おまえなあっ、歩けなくなるってなんなのよ。あああ、メンドウくせえなっ」

最期に怒鳴った言葉はベイゼルの本心だった。

「まあ、兄さんがルディエラが兄妹か疑う気持ちも判る」

久しぶりに会った弟とは、やはりどこか会話が成立しないと残念な気持ちを抱きつつ帰宅しようとしたティナンに、ルークはいつものように淡々とした口調で言った。

「あの子が産まれた時、誰も一緒にいなかったから」

さらりと言われたが、それはまさに事実だった。

ティナンは八つ——その当時すでに第三王子殿下キリシュエータの遊び相手として王宮に出入りしていたティナンは、ルディエラとはじめて顔を会わせたのはルディエラが生後三ヶ月を迎えようという頃合いであった。

その時すでにルディエラは母親ではなく長兄クインザムの腕にあった。

敬愛する兄の手に赤ん坊という取り合わせは、ティナンにとって歓迎すべきものではなかった。

ティナンは当初ルディエラに対して少しも興味が無かった程だ。

「私は当時は王宮に居たから」

「——でも、ルディも王宮にいたはずだ」

ふと眉を潜めたルークの言葉に、ティナンは首をかしげた。

「王宮？」

「あの子が産まれたのは王宮のはずだよ。母さんは陛下の四番目のお子様の為の乳母候補だったから。早いうちから王宮にあがって出産じたいも王宮で行われた筈だ。まあ、実際は四番目のお子様も御生母様も出産時にご逝去された訳だけれど」

淡々と言われる言葉をじつくりと味わうかのように喉の奥で転がし——ティナンは引きつった表情でルークを見返した。

「……それはつまり」

「つまり？」

ティナンはがつくりと肩を落とした。

「ルディの出産に立ち会ったのはネティじゃないじゃないか」

あんの、ボケ産婆っ！

ティナンの激しい落ち込みの前で、ルークは「いや、そもそもネティが産婆として働いていたのはティナン兄さん辺りまででしょう。いったいあの人幾つだと？　ひ孫もいるというのに」至極常識的な物言いで冷たく兄を見つめていた。

その4

踏んだり蹴ったり——もしくは、踏まれたり、蹴られたりだった。

第三騎士団宿舎内に作られている大浴場での壮大なる大脱出作戦は完璧な筈だったが、勢いをつけて浴槽から立ち上がり、大慌てでそこから抜け出して思い切り足を動かしたところで、ふわっと足をすくわれるような奇妙な感覚と、頭にかかる靄によってルディエラはその場でばったりと倒れた。それはもうもののみごとに。

幸いなことにその時の痛みにより、失いかけた意識は浮上したものの、お尻丸出しでずっこけるといいう、取り返しのつかないような状況に思えたが、そのむき出しの背にはばさりとベイズェルの上着が掛けられた。

なんだか罵詈雑言をがangan叩き込まれたあげく、思い切り踏まれるし、力任せに引き上げられたあげく、大きなベイズェルの上着を引っかぶった格好のままで脱衣所へと引き立てられ——なおかつ、脱衣所へと蹴りいれたのだ。げしりと力任せに容赦なく。

「とつとつ着替えて部屋に戻って色々反省しろっ、この糞ボケがっ」

最後にそんな台詞を吐かれた気がしたが——まあいい。

踏まれたことも、蹴られたことも大目にみよう。

なんだか判らないが、当初の危険は去ったのだ。

あんな状態で誰一人として女と気づかれることは無く事なきを得たのだ。

脱出大作戦は成功のうちに終結した。自らの手柄とはちょっとばかり言い切れない場面と、あの状態でも女の子だと判らないヤツは

目がおかしいのではないかという疑念と、それとももしかして自分
ってやっぱりそんなに女の子らしくないのかなあという憤りを残し
て。

まあ、このことは綺麗さっぱりと忘れることにする。
というか忘れた。

とくに男性の身体的特徴については。
はい、これにて終了。

「これもきつと日ごろの行いがいいからだな」

ルディエラは昨夜のことを思い出し、過去は過去として頭の筆笥
の引き出しにしっかりとしまいこみながら、馬房までの道のりを歩
きつつうんうんとうなずいた。
己を知らぬ者ほど恐ろしい者はない。

「あー、なんか言ったか？」

昨夜から不機嫌なベイゼルはあくびを幾つもかみ殺しながら、ギ
ロリとルディエラを睨みつけた。

「そういえば、副長つては昨日戻ってくるの遅かったですね。ぼく
随分おきてまっていたんですけど、結局先に寝ちゃいましたよ」

「あの後風呂入ってからクロさんと風呂場の片づけして、酒飲んで
たんだよ、ボケ」

湯中りしたルディエラを気にかける二人を無理やり浴室に留める
ことにどれだけ無駄な体力と気力とを必要としたことか。

拳句の果てにクロレルには散々「第三隊の人たちは皆そんな風に見
習いを扱っているのか」と苦言をたらだらと向けられてしまった。

——もう本当に勘弁して欲しい。

オレががんばったよ？

めちゃくちやがんばったって。
誰も評価してくれねえけどなっ。

「うわっ、副長ってば酒臭い」

あからさまに顔をしかめるルディエラの様子に、ベイゼルはぎゅつと拳を二つ作り、ぐりぐりと相手のこめかみの辺りを締め上げた。
「いたっ、いたいいたいいたいっ」

「食らえっ、酒臭っ」

押さえ込んだまま、はーっと力いっぱい息を吹きかけると、ルディエラが「やめて下さいいい」とじたばたと暴れる。

丁度通りかかったクロレルとフィルドが顔を見合わせ、ベイゼルの暴拳を止めようと近づくより先に――隣接する建物の階上より声が落ちた。

「にんじん」

その声は低く、ベイゼルのそれよりも不機嫌そうに響く。
相手が誰だか気づくと、馬房へと足を向けていた数名の騎士団員達はぴたりと足を止め、胸元に手を当てて一礼した。

「話がある。来い――」

端的な言葉で命じつけ、今度はベイゼルへと続ける。

「今日の訓練はにんじん抜きで進めておけ」

建物の三階窓際で言う第三王子殿下キリシュエータの言葉に、ベイゼルは「了承いたしました」と丁寧に応え、キリシュエータの姿が見えなくなると、まるで八つ当たりでもするようにべしりとルディエラの肩を叩いた。

「おまえ今度は何をしたんだ？」

「いや、ぼく何もしてませんよっ？」

突然のことにルディエラ自身動揺しつつ、何故か周りを見回して顔をしかめた。ひそひそと小さな声で「鼻屑」だの「特別待遇」だのという囁きが聞こえてくる気がする。

それは堂々と言われているものではないが、それでも——まるで忘れ去ることの許されない罪だともいうようにちくりちくりとルディエラの身を刺すのだ。

「フィブリスタに何をした？」

たんだんと、執務用のテーブルを指先で神経質な様子で弾きながら言葉を搜すようにしていたキシユエータがそう口火を切ったのは、たつぷりと三分程はたった後のことだろう。

キシユエータの執務室にティナンと第一隊の騎士一人が控え、その顔色は少し悪いようにさえ見える。

きつく結ばれた唇に、いつもより更にその眼差しが厳しい。

なんだか激しく居心地の悪い思いを抱きながら、ルディエラは相手の言葉に首をかしげた。

「……あの」

「なんだ」

「フィブリスタって、何です？」

何か壊してしまったろうかと怯えを含ませてルディエラが言うと、ティナンが咄嗟に声を荒げていた。

「無礼は慎め。」

第一王子殿下——王位継承権第一位のフィブリスタ殿下のことだ」

鬼隊長の口調で言われ、ルディエラは背中を叩かれたかのようにびしりと硬直した。

第一王子殿下——現在の王補佐の名前が確かにそんな名前であったかもしれない。だが、言わせて貰えばこの国の三王子の名前はややこしい。

上からフィブリスタ、リルシェイラ、キリシュエータ——一発で覚えられたら外交特使にだってなれそうな難関だ。少なくともルディエラにはそんな名前を一発で覚えることは完全に無理だと断言できる。

名前が悪いなどと言える訳もなく、さすがにルディエラは口を噤んだ。

しかし、まったく意味が判らない。

何故ここにきて第一王子殿下の名前など出てくるのだろうか？

たとえば、先日思い切りその絶壁頭の側頭部を殴りつけてたんこぶを作り上げてしまった、第二王子殿下リルシェイラの件でお叱りを受けるのであれば十分に理解ができる。

だが、たかが見習いであるルディエラに第一王子殿下との接点は皆目思いつかなかった。

「フィブリスタがおまえを除隊させると言って来た」

重苦しい口調で言うキリシュエータの言葉に、ルディエラは頭の中で「変な名前兄弟め」と思考していたことがはらりと消え去り、思い切り「なんでっ」と声を上げていた。

「え、どうして？　なんでっ、どうしてそうなるのっ」

「こちらが聞きたい。昨夜遅くに呼び出されて言われたことはその命令だけだ——エリックの娘、ルディエラ——おまえを騎士団から

出せと」

「クインザム」

きつい口調で名を呼ばれ、クインザムは丁寧に一礼した。陛下との拝謁を済ませたのだから、本来であれば一刻も早く愛する妻の許へと戻りたいのだが、呼び止めた相手は生憎と無視できる相手では無い。

王族特有の色素の薄い金髪に湖畔のような深い碧玉の眼差し。

眉間に皺を寄せてつかつかと歩いてくる青年の背後には、三人の護衛騎士がつき従っている。

フィブリスタ第一王子殿下——次期国王と目される相手。

「アレは誰だ」

「——アレ、とはどなたのことでしょうか」

「判っているだろう？ ティナンが連れているあの娘だ」

言われても生憎とクインザムには覚えが無かった。

本日は第二王子殿下リルシェイラの為の壮行の為に渋谷夜会などに赴いたのだ。本来であれば王宮の催しなど出席したくない類のものだが、自らの婚姻の事に骨を折ってくれたリルシェイラからの招待には応じなければいけない。

来て早々に陛下から拝謁を命じられて王宮内部へと来た為に、ティナンが女性をつれているなどという話にもぴんとは来ない。

「ティナンが女性と？ 誰か相手を見つけたのでしょうか。生憎と

——」

「何故、騎士団に所属している」

苛立つように言われ、やっとクインザムは相手の言わんとしてい

る言葉の意味を受け入れ、眉を潜めた。

騎士団に所属している娘など、他に居ない。

ならばこの相手が示すのはすなわち——自らが育て上げた愛しい妹に他ならない。

「うちの末のことでございますか？」

「何故騎士団なのだ。何故、そんな危険なことをっ」

「当人の希望ですから」

ゆつくりと言う言葉に、フィブリスタはぐっとクインザムの上着を掴み、壁際に押し付けるようにして低く恫喝するように囁いた。

「あの子は私のっ」

「お間違いなさいますな。殿下」

クインザムは低く、冷たい眼差しで相手を見返した。

「あの子は貴方様とまったく関係の無き者。

どうぞかような場で軽々なお言葉はお控え下さいませ」

「——そうだ。だが」

「殿下。私の妹をお気遣いいただきありがたき幸せに存じ上げます。ですが、どうぞそれまでに。」

あの子のことは捨て置き下さいますようお願い致します」

その1

突然のキリシュエータの言葉は、まさに寝耳に水——青天の霹靂。ルディエラにとって思ってもいないことだった。

なんとか一月と三分の二程の日々を無我夢中ですごしてきた。決して戦力になっていないことは認めよう。

足を引っ張っている自覚も恥ずかしながある。

それでも歯を食いしばって、どろどろになって、傷だらけになって必死に突き進んできたのだ。

あと一月以上をこの騎士団で過ごせる筈であつたというのに、突如としてその道は閉ざされた。

見たことも——正確に言うのであれば見たことくらいはあるのだが、記憶にとどめていない——聞いたこともないような相手からの突然の命令によって。

口の中が一息にからからに乾き、水分も酸素も足りないように頭にもやががかる。

自分がいったい何をしたというのだろう。

必死に思い返してみても理解はできなかった。何か、きっと何か不興を買うようなことをしてかしてしまったのだろうが、生憎と判らない。

ただ激しい虚脱感のようなものに、ルディエラはぎゅっと自分の手を握り締めた。

短く切つてある爪が手の平に食い込み、その小さな痛みだけが現実のようだった。

第三王子殿下キリシュエータの唇から吐息が漏れた。
それが終焉の合図——

泣くことも、笑うこともできずにルディエラはゆっくりと浅い呼

吸を繰り返した。

——除隊命令。

見習いは見習いのままに、三ヶ月の期日すら全うもせずに除隊という憂き目にあうとは想像してもいなかった。

それでも、ルディエラは自分がこの場に居られるのは、軍事將軍であるキリシユエータの独断という気まぐれであることは理解していた。

そして——ルディエラの除隊を命じたのが第一王子であるのであれば、キリシユエータといえども、もはやどうすることもできないのだということも。

ぼつかりと心に穴が空いたような奇妙な感覚に薄い笑みを浮かべ、ルディエラはゆつくりと腹式の要領で呼吸を繰り返し、鼻につんとくる思いを振り払った。

「つつしんで拝命いたします」

除隊命令を受ける者として、その言葉が正しいのかは判らない。ただ騎士見習いとして胸元に手を当て、正式な主を前にするように、真似事と理解していても——最後くらい立派に示したかった。

——この一月と半分ちよつとの騎士見習い期間を無駄にしたくない。ルディエラが膝を折って示す態度に、ティナンは思わずその傍らに駆け寄り、膝をついた妹を引き上げ抱きしめようと手を伸ばした。除隊命令を受けるのであれば、それはもう部下ではない。

見習いではなく、そこにいるのはただの——かわいい妹だ。

必死に自分の気持ちをねじふせて気丈に振舞う妹を、ただ引き上げて、抱きしめて、もういいのだと——もう、泣けばいいと慰めてやりたい。

家に帰ろう、と。

よく今までががんばったと。

その衝動のままに体は動いていた。

「触れるな」

ふつと、ティナンの手が宙をかいた。

ルディエラの腕に触れようとしたその瞬間に鋭く発せられた主の命令は、まるで刃のようにその場を引き裂き、ティナンはぐつと息を飲み込んだ。

「下がれ、ティナン」

「……殿下」

執務用の席についていたキシシュエータは厳しい眼差しと言葉で副官を制し、ゆつくりとした動作で一枚板の机に手のひらを当て、席を立った。

「にんじん。いや——ルディ・アイギル」

「はい」

「悔しいか？」

問いかけに応える前に、キシシュエータはこつりと長靴ちゅうかを床に叩きつけるように歩き出し、膝について控えるルディエラの前に立った。

「悔しいか、ルディ・アイギル。」

私は、悔しい——意味も判らずただ除隊させよという命令に従わねばならん。せめて理由をと問うてはみたが、だが、フィブリスト兄上は答えては下さらなかった」

キシシュエータは鋭い眼差しをひたりとルディエラの瞳にあわせ、ゆつくりとその心にねじ込むように口にした。

「来い、ルディ・アイギル——自らの道を塞ぐものに自らで立ち向かう勇氣があるのであれば、この私が手を貸そう」

まっすぐに差し向けられたキシシュエータの白手に包まれた手に、

ルディエラは考えるよりさきに自らの手を重ね合わせた。

「本気ですか、殿下っ」

ティナンは悲鳴のように声を荒げた。

「これ以上フィブリスタ殿下のご不興を買ったらどうなさるのですかっ」

「私が責任を負う」

「殿下っ」

ティナンはぐつと拳を握り締め、ゆつくりと首を振った。

「いけません。そこまでする必要はありません」

「ルディ・アイギルの命であれば保障する」

「我が君！ 私が心配をしているのは貴方様の御身にございます」
だんつと力強く一步を踏み出し、ティナンは主と視線を交えた。

その表情に甘さはなく、きつい眼差しが交差しあう中——ティナンは主を説得する為に口調をきつくした。

「冷静におなり下さい。たかが一介の騎士見習いの為にご自身のお立場を見失ってはなりません。相手は王位継承第一位のフィブリスタ殿下なのですっ」

生真面目に主に向かうティナンに反し、ふつとキシシュエータの眼差しに余裕が生まれ、その口元に微笑が浮かんだ。

「何です？」

主の変化にティナンが眉を潜めれば、キシシュエータは自分の副官の肩に腕を回し、親しげに二度叩いた。

「おまえが自分の片腕だと久しぶりに思えた」

「どういう意味ですか」

「——行くぞ」

王宮を正面にして左側に騎士団官舎、その官舎内にキリシュエータの執務室があるのに対し、現国王補佐である第一王子フィブリスタの執務室は王宮内に存在する。

例え第三王子殿下キリシュエータといえども、王補佐であるフィブリスタへと面会を求めるにはきちんとした手続きを必要としていた。

「殿下、突然おいでになられましても、今すぐの面会などできません」

執務官の慌てる言葉を無視し、キリシュエータは不快を示すように片眉を跳ね上げて相手をねめつけた。

「弟が兄に会いに來ただけだ。奥においでだろう。かまうな」

「殿下。何事も定められていることでございますれば」

「兄の予定など気にかけてはいつつ面会が通るか判らん」

すでに執務室の前で警護に当たっている者がどうしたら良いものかとうろたえている。規定であれば、突然の面会については軍事的な問題が生じた場合にのみ許されている。だが、現状そのような事柄はなく、何よりキリシュエータは「ただ会いに來ただけだ」と言うのだ。

これまでには決して無い事柄に、官吏達が慌てるのも無理は無い。「武器が問題というのであれば」

突如、話の矛先を切り替えてキリシュエータは自らの腰に吊るされた細剣を鞘ごと引き抜き、ぐいっと事務官へと押し付けた。

「これでいいだろう」

「キリシュエータ殿下、そういうことでは――」

「ティナン、おまえ達も武器をはずせ。私は別に謀反などどこにしているのではない――兄へと弟が面会を求めているのだ」

再度繰り返すキリシュエータに、事務官は根負けした様子で渡さ

れた武器を王宮警護の第一騎士団の人間に引渡し、嘆息した。

「少々お待ち下さい。ただ今フィブリスタ殿下に事の次第をご説明にあがります」

——ですがどうぞ、期待なさないで下さいませ。

そのやり取りを固唾を呑んで見守りながら、ルディエラはぎゅつと自分の手の甲をつねり上げていた。

極度の緊張で、何かの痛みで紛らわせるしか自分を保てそうになかったのだ。

——自分が本当に騎士であるのならば。その魂を示すものならば、本来ここにはいけないのだ。

ティナンが正しい。

自分如きの為に主を危険に晒してはならない。その立場を脅かしてはいけない。

キシシュエータをとめもせず、その言葉にやすやすと乗っかかりこの場にいることは許されることではない。

奥にある執務室へと続く扉を開き、顔を出した執務官は心持ち堅い表情で戻り、一礼した。

「フィブリスタ殿下はお会いになれません」

「知るか」

短く、鋭く言い切るとキシシュエータは自らの背後にいるルディエラの腕を引っつかみ、足早にその扉へと駆け寄り——ルディエラを放り込んだ。

「殿下っ」

「兄からの叱責ならば後でいくらでも聞く。僅かでもいい、私に時間をくれ」

キリシュエータはその場にいる全ての者を制するようにつげ、自らの背を閉ざした扉に預けて腕を組んだ。

——かなり、自分のしていることが危険なことであると自覚しながら。

その2

勢いよく放り込まれたフィブリスタ殿下の執務室にて、ルディエラは前のめりに倒れこみ、鼻をしたたかに打ちつけたと思った途端、即刻控えていた第一騎士団の隊員二人にがしりと逆手を取られて押さえ込まれてしまった。

「何者だっ」

誰^{すいか}何される鋭い声に混じり、低く冷静そうな言葉が「何事か」と重ね——二人の騎士団員に逆手を取られて押さえ込まれたルディエラの姿に、息を飲み込んだ。

「……エーラ」

つぶやいた途端に、その部屋の主であるフィブリスタはがたりと音をさせて席を立ち、慌てた様子で命じた。

「離せっ、なにをしているっ」

言われた騎士隊員としても、主の言葉であれば逆らうつもりは無いが——突如、無遠慮に入り込んだ子ねずみを放置していいものか迷いが掠めた。

フィブリスタは大股で未だ床に座ったままの状態のルディエラの前に立つと、ぎこちない笑みを浮かべてその手を差し出した。

「痛くはないか？」

「……はい、あの……」

ルディエラは押さえ込まれた瞬間こそ底知れぬ程の恐怖抱いたものだが、自由を得た今、差し出される手に困惑しつつ、懸命に自分のすべき行動を脳裏に求めた。

ここでヘマをすれば、自らの首はおるか第三王子殿下キシュエー
ータ及び家族にまで累を及ぼす大事件だ。

どくどくと爆ぜる心臓をなだめ、ルディエラは慌ててその場で頭
を下げ、利き腕である右手の平を軽く握って心臓の上へと押し当て
た。

ちよつとばかり鼻が赤いのはご愛嬌だ。

「突然の非礼をどうぞごかんによくださりたくっ」
気張って早口に言った言葉に失敗した。

「……ごかんによ」

フィブリスタは小さくつぶやき、ルディエラはかあっと体温があ
がる羞恥に身もだえした。

なんでもつとスマートにできないかな、ぼくつ。

急激な体温の上昇に慌てて更に混乱が広がってしまう。

「あのっ、えつと、ご、ごかん——」

恥ずかしさからろれつが回らず、何度も口の中で言葉を転がす。
控えている第一隊の純白の隊服を着用した騎士達さえ、なんだかイ
タタマレナイ気持ちになり、思わず視線を逸らしてしまった程だ。

「ごかつ」

「いや、いい。言いたいことは判った。そこまで緊張せずとも良い。
そうか、キシュが面会というのは、そなたが理由か」

フィブリスタは苦笑をこぼし、気安い様子で未だひざまずいたま
まであったルディエラの二の腕を掴むようにして、控えている二人
の第一騎士団の護衛へと声を向けた。

「おまえ達は外にて控えよ——外にキシュエータがいると思うが、
あれもさがらせていい」

主の命令に二人の騎士団員が下がると、ルディエラは相手の腕を
振り払うこともできずに、どうすべきか内心で混乱をきたしていた。

掴んだまま、フィブリスタは近くの長椅子へとルディエラを導いた。

「かけるといい」

「……あの、あ、失礼します」

「そう緊張せずともいい。私は——」

言いかけた言葉を飲み込み、フィブリスタはふっと懐かしむように瞳を細め、そして苦笑した。

「それが本来のそなたの髪色か」

「はい？」

「——そなたは、色素の薄い金髪になるものと思っていた。そうか、やはり違うのだな」

言われる言葉の意味が判らずに眉を潜めるルディエラから離れ、フィブリスタは部屋に置かれている棚からグラスとデカンタに入れられた淡い黄色の飲み物を取り出した。

「あの、失礼は承知でお尋ねいたします」

ルディエラは緊張で声を上ずらせながらも、相手が噛み付いたりほしないと確認しつつ言葉を搜した。

「ぼくは——あ、私は騎士団第三隊に所属しております、騎士見習いのルディ・アイギルと申します」

まず名乗り上げ、ルディエラは自分の手を握りながらゆっくりと告げた。

「私は、殿下に何か無礼を働きましたでしょうか」

言われた言葉に、グラスに液体を注いでいたフィブリスタは虚をつかれたかのように動きをとめ、しげしげとルディエラを眺めやる。

「無礼？ そんな覚えは無いが」

「ではっ、ではどうしてぼくは騎士団を除隊するように命じられた

のでしょうか」

必死で声を張り上げたら、鼻を貫くような痛みを伴った。こんな場面で泣くなど論外だ。必死に自分自身の手をぎゅっと掴むようにして耐えながら、ルディエラは自分の身がわずかに震えているのを感じていた。

「――そなたは、女の子ではないか」

さも当然というようにフィブリスタは言い、グラスについだ液体――果実水をルディエラの前のテーブルにことりと置いた。

エーラという名がその口からこぼれたときから、面前の相手が自分の素性を知っているのだということは理解できた。

だが、まさか今回の除隊命令の理由が――自分の性別だとは。ルディエラは悔しさに奥歯がざしりと音をさせるのを聞いた。

「騎士団など男のすること。そんな場にはいけない」

「そんなんっ。それが……理由なのですかっ？」

「他にどんな理由が？ ルディエーラ――怪我をしてからでは遅い。そなた程の年齢であれば、家で刺繍や楽に励み、程よき頃によき相手に嫁ぐものだ。騎士団などで荒くれた男達の中にいて良い訳があるまい」

それが当然なのだという言葉に、ルディエラは更にきつく自分の手に力を込めた。

「ぼくは、騎士団にいたいのです。怪我をしても、つらくたっていい。それでも、騎士団にいたいんです。どうか、除隊命令を取り消してはいただけませんか？」

言い募る言葉に、フィブリスタはキリシュエータと良く似た眼差しに困惑を込めて、ゆっくりと首を振った。

「何故、騎士団に」

「ぼくは、父様——騎士団顧問のエリックのような立派な騎士になるのが夢なんですっ」

瞳をきらきらと輝かせて言う言葉に、フィブリスタはじっとルディエラを見つめ、しばらく後に小さな笑みを落とした。

「エリックは——騎士ではないが」

その言葉に、ルディエラは瞳を瞬いて間抜けに「はい？」と問い返してしまった。

「あれはもともと傭兵で、父王が騎士として任命しようとしたが当人が断った。だから未だに正式な騎士では……いや、いやっ、泣くな。すまない。忘れてくれ。私はおまえに泣かれると弱い」

フィブリスタの淡々とした説明を耳にいれながら、ルディエラは根本的なところで自分が思い切り思い間違いをしていたことに気づかされ、青くなり、赤くなり、ついでその瞳を潤ませた。

——父様みたいな騎士になる！

回答、父様は騎士ではありませんでした。

……って、どうして誰も今まで言ってくれなかったのっ。

テーブルを挟んで反対側に座っていたフィブリスタだが、泣きそうな顔をしたルディエラに慌て、わたわたと席をたつとルディエラの傍らに身を寄せた。

「そつだ。そなたははじめて会った時も盛大に泣いて私を困らせたのだ」

フィブリスタは言いながらハンカチを取り出し、ルディエラの瞼に浮かんだ涙にそつと押し当て、苦笑した。

「——あの、殿下はぼくをご存知なのですか？」

上目遣いに見上げてくるルディエラへと、柔らかな眼差しを向け

てフィブリスタは小さくうなずいて示した。

「そなたは私の――」

すっと落ちそうになった言葉を押し留めた、一旦瞳を伏せてフィブリスタは口を開いた。

「そなたは私の妹と乳姉妹として産まれたのだ。幾人かの乳母候補がいたが、その中で一番私の末の妹に近く産まれたものとして――妹と共に過ごすことになる筈であつた」

「妹……姫様？」

突然言われた言葉に驚き、ルディエラが思わず奇妙な声を上げると、フィブリスタはそつとルディエラの短い髪をかきあげた。

「産まれてすぐに失われた姫だ。死産だった――母親もろともに失われてしまい、この国では忌み事としてそれに触れるものはいないだからそなたが知らぬのも道理だろう」

その時の記録はただ短く文献に記されているのみ。

――生れ落ちたのは姫君であつた。生母諸共に命を失つた。

「私にとって、妹よりもずっと妹なのだ、そなたは」

フィブリスタは愛情を込めた眼差しで告げ、緊張に身を硬くしているルディエラの肩に触れて問いかけた。

「あの時のように抱いてよいか？」

「え、あの」

「おかしい意味ではない。ただ、抱きしめてみたいだけなのだ」

フィブリスタは言うや、ルディエラを引き寄せてその膝の上に抱え込んだ。

やるほうはよくても、やられるほうはたまつたものではない。

何といつても相手は王位継承権一位皇太子――たとえ相手が「妹」といつてくれたとしても、はいそうですかと納得できよう筈が無い。頭の中で「うひゃーっ」と悲鳴をあげるルディエラを、フィブリ

スタはぎゅっと抱きしめて目を閉ざした。

——あなた様には関係の無い娘。

頭では理解している。

そう、そうだ……

『陛下の子ではありません。殿下、あなた様のお子ですわ』

妖艶な女の唇が紡ぐ毒のような囁きを。

『違うっ、違うわ！ 私の産む子が役立たずな女である筈がないっ。
わたくしの子こそが未来の王位を担うのよっ』

血なまぐさい記憶、悲鳴、怒号。

一人の赤子が殺され、一人の女が死んだ。忌まわしきあの記憶。

『——おいたわしいことに存じます』

忘れよと、命ぜられた全て。

「——」

思いのほか強く抱きすくめられ、ルディエラが苦しさに身じろぎ
すると、フィブリスタは慌ててその腕を緩めた。

「すまない。痛かったか？」

「あ、いえ。大丈夫です」

ルディエラは家族以外の相手の膝に乗せられ抱き上げられること
に顔を赤らめ、もそもそと身じろぎした。

途端、ルディエラの緊張した体が、爆ぜた。

「つくっ」

「——」

「ひゃっ」

必死に押し留めるも、競りあがってくるひゃっくりは留めることは
かなわない。

突然の横隔膜の痙攣に慌てるルディエラと、膝の上で跳ねるその様子にフィブリスタは破顔した。

「そなたは、赤子の時にも私が抱いている時にひゃっくりをした」

「そ、そうなんつ、くうつ、ですか？」

危うく舌を噛みそうになりつつ、その膝からそろそろと降りようとしたルディエラをもう一度ぎゅっと抱き、とんとんとその背を叩いた。

——それはげっぷの方法では。

ルディエラはなんだか自分が赤ん坊扱いされていることに泣きそうになった。

「慌てた私は乳母——そなたの母に言っただ。これは驚かしてよいのか？」と」

赤ん坊相手に驚かしてどうするのか。

「そなたの母は慌てて私からそなたを取り上げたものだ」

フィブリスタはテーブルの上のグラスを手にとり、ルディエラの体を一旦引き離すと、その口にグラスを差し向けた。

「一息ではなく、ゆっくりと飲むといい」

その方法は確かに昔母親が教えてくれたものだ。

ちなみに、次兄は水を飲ませ、次に豆を一气飲みさせる。長兄が「豆は気管支に入れば危険だ」と次兄を蹴り飛ばしたことまで思い出した。

「——ルティフィリエラル」

ふいにフィブリスタがつぶやいた言葉に、ルディエラはこくりと口の中の水を嚥下して瞳を瞬いた。

「はじめはそう名づけたのだが、呼びづらいと不評をかった」

「……それって」

「私はそなたの名づけ親だ。ルディエーラ」

『ご報告申し上げます』

夜の闇を引き裂くように王宮に伝令が散った。

寝入ろうとしていたフィブリスタがガウンを脱ごうとしていたところに駆け込んだ騎士団員の一人が控えて口にしたのは、

『カーロツタ婦人がご乱心——乳母ミセリアの赤子にお手を掛けました』

——死んだ赤子は、男の子だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8036s/>

王道で行こう!

2011年11月7日08時08分発行